

# 節田湊金久・万屋下山田遺跡

笠利町文化財報告No.13

1991年

鹿児島県笠利町教育委員会





笠利町東海岸（空港から笠利上空）



# 目 次

## 本文目次

序文	
例言	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第2章 遺跡の概要	3
第1節 遺跡の位置と環境	3
第2節 遺跡の概要	8
第3節 砂丘	9
第4節 層序	9
第3章 万屋下山田Ⅲ遺跡の調査	10
第1節 遺構	10
第2節 出土遺物	11
1) 土器	11
2) 出土遺物－土器（以下第1次調査報告書より）	16
3) 骨製品、貝製品	86
4) 石器	96
第4章 調査の成果と問題点	98

## 図目次

第1図 笠利町の遺跡分布図	5
第2図 第1次調査区グリッド配置図 第2次調査区（1区・2区）	8
第3図 1区遺物出土状況実測図	12
第4図 //	13
第5図 //	14
第6図 2区遺物出土状況実測図（その1）	15
第7図 2区遺物出土状況実測図（その2）	15
第8図 2区遺物出土状況実測図（その3）	16
第9図 面縫前庭式土器	17
第10図 土器（第3地点）－1	20
第11図 土器（第3地点）－2	21

第12図	土器（第3地点）-3	22
第13図	土器（第3地点）-4	23
第14図	土器（第3地点）-5	24
第15図	土器（第3地点）-6	25
第16図	土器（第3地点）-7	26
第17図	土器（第3地点）-8	27
第18図	土器（第3地点）-9	28
第19図	土器（第3地点）-10	29
第20図	土器（第3地点）-11	30
第21図	土器（第3地点）-12	31
第22図	土器（第3地点）-13	32
第23図	土器（第3地点）-14	33
第24図	土器（第3地点）-15	34
第25図	土器（第3地点）-16	35
第26図	土器（第3地点）-17	36
第27図	土器（第3地点）-18	37
第28図	土器（第3地点）-19	38
第29図	土器（第3地点）-20	39
第30図	土器（第3地点）-21	40
第31図	土器（第3地点）-22	42
第32図	土器（第3地点）-23	43
第33図	土器（第3地点）-24	44
第34図	土器（第3地点）-25	45
第35図	土器（第3地点）-26	46
第36図	土器（第3地点）-27	47
第37図	土器（第3地点）-28	48
第38図	土器（第3地点）-29	49
第39図	土器（第3地点）-30	51
第40図	土器（第3地点）-31	52
第41図	土器（第3地点）-32	53
第42図	土器（第3地点）-33	54
第43図	土器（第3地点）-34	55
第44図	土器（第3地点）-35	56
第45図	土器（第3地点）-36	57

第46図	土器（第3地点）	- 37	.....	58
第47図	土器（第3地点）	- 38	.....	59
第48図	土器（第3地点）	- 39	.....	60
第49図	土器（第3地点）	- 40	.....	61
第50図	土器（第3地点）	- 41	.....	62
第51図	土器（第3地点）	- 42	.....	63
第52図	土器（第3地点）	- 43	.....	64
第53図	土器（第3地点）	- 44	.....	65
第54図	土器（第3地点）	- 45	.....	66
第55図	土器（第3地点）	- 46	.....	67
第56図	土器（第3地点）	- 47	.....	68
第57図	土器（第3地点）	- 48	.....	69
第58図	土器（第3地点）	- 49	.....	70
第59図	土器（第3地点）	- 50	.....	71
第60図	土器（第3地点）	- 51	.....	73
第61図	土器（第3地点）	- 52	.....	74
第62図	土器（第3地点）	- 53	.....	75
第63図	土器（第3地点）	- 54	.....	76
第64図	土器（第3地点）	- 55	.....	77
第65図	土器（第3地点）	- 56	.....	78
第66図	土器（第3地点）	- 57	.....	79
第67図	土器（第3地点）	- 58	.....	80
第68図	土器 1類	.....	.....	82
第69図	土器 2類、3類	.....	.....	83
第70図	土器 4類	.....	.....	85
第71図	土器 5類、6類、7類	.....	.....	87
第72図	土器 その他の土器	.....	.....	88
第73図	土器 底部	.....	.....	89
第74図	貝・骨製品実測図	.....	.....	91
第75図	貝・小玉実測図	.....	.....	92
第76図	貝製品実測図	.....	.....	93
第77図	貝製品実測図（貝製容器）	.....	.....	94
第78図	貝製品実測図（貝製容器）	.....	.....	95
第79図	石器実測図	.....	.....	96

第80図 石器実測図（磨石） ..... 97

挿表目次

第1表 町内遺跡地名表 ..... 6

附 説

奄美大島・笠利町節田の民俗地図 ..... 99

## 序 文

この報告書は、笠利町教育委員会が、主要地方道龍郷・新奄美空港線の改良工事に伴って平成2年度に実施した節田湊金久・万屋下山田Ⅲ遺跡の発掘調査の記録です。

節田湊金久遺跡は現砂丘上にあり、生活面からははずれたが、砂丘の堆積状況による集落の立地から民俗調査も記録しました。

万屋下山田Ⅱ遺跡は旧砂丘上に広がった縄文時代の生活面で、奄美ではこれまで類例を見ない程の多量の出土品でした。第1次、今回行われた第2次調査から、まだ道路下に統一していることが明らかになったので、第3次調査を含め今後の結果が期待される。

本書は笠利をはじめ奄美の歴史的研究や文化財保護のため活用していただければ幸いです。終りに、この発掘調査に御協力くださった大島支庁土木課、県教育庁文化課、地元の節田・万屋の方々に心から感謝いたします。なお報告書の作成には青山学院大学、法政大学の方々に夜を徹して作業をしていただきました。本当にありがとうございました。

平成3年3月

笠利町教育委員会  
教育長 染 光 義

## 例　言

- 1、本書は平成2年度に実施した主要地方道奄郷新奄美空港線工事に伴う。「篠田渙金久・万屋下山田Ⅲ遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は大島支庁土木課が県教育庁文化課と協議し、笠利町教育委員会が依頼を受けて行った。
- 3、報告書作成のための実測、拓本、写真は法政大学高梨修、青山学院大学池田治、仲盛敦、橋本達也の協力を頂いた。
- 4、本書の編集、執事は中山清美が行った。
- 5、本書で用いたレベル数値は絶対海拔高である。
- 6、出土遺物は笠利町歴史民俗資料館において管理、保管を行っている。

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

### 節田湊金久遺跡

奄美空港が1988年（昭和63年）に開港し、それに伴う奄郷－新奄美空港線の改良工事も年次的に進められている。それに基づき遺跡の確認調査が県文化課によって行われ、これらの工事地内に遺跡が含まれている場所が数ヶ所確認された。大島支庁土木課と県教育庁文化課と協議を重ねた結果、県文化課より町教育委員会に大島支庁土木課と町教委で協議して欲しい旨の連絡があった。町教委は教育委員会において町内に立地する空港とそれに伴う町内の遺跡であることから行政的に協力体制をとることにした。あくまでも県文化課の指導により調査を引き受けることにし、今回の調査が実施された。

調査は節田集落東側はずれにある節田湊金久遺跡である。この道路は砂丘断面に土器片と石器が検出された砂丘と同一であることから道路予定地も同様な埋蔵遺跡であると思われた。調査は確認調査を行う期間がないことからいきなり本調査に入ることになった。

### 万屋下山田Ⅲ遺跡

万屋下山田Ⅲ遺跡は1984年（昭和59年）に発掘調査が県文化課によって上述の理由で行われた。同遺跡は節田湊金久遺跡の予算で行う。県文化課が行った地点の両端で道路拡張部分にあたる。1984年当時はまだ用地買収が出来ておらず、境界にあたるソテツ部分は未発掘の状態であった。大島支庁土木課との協議と県文化課の指導で万屋下山田Ⅲ遺跡も記録保存を図ることとなり、今回の調査が実施された。

## 第2節 調査の組織

### 発掘調査

調査主体者	笠利町教育委員会	教育長	染 光義
調査責任者	〃	社会教育課長	南 隆光
	〃	課長補佐	別府良美
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	主 査	中山清美
調査補助員	法政大学	博士課程	高梨 修
	青山学院大学	修士課程	池田 治

### 調査指導助言者

熊本大学文学部教授	白木原和美
鹿児島県教育庁文化課	長野真一

### 報告書作成

調査主体者	笠利町教育委員会	教育長	染 光義
調査責任者	"	社会教育課長	南 隆光
	"	課長補佐	別府良美
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	主査	中山清美（考古学）
調査員	奄美民俗談話会員		高橋一郎（民俗学）
調査補助員	法政大学 博士課程		高梨 修（考古学）
	青山学院大学 考古学研究室		仲盛 敦
	"	"	橋本達也

### 調査指導助言者

熊本大学文学部教授	白木原和美
青山学院大学文学部教授	田村晃一
鹿児島県考古学会長	河口貞徳
鹿児島大学文学部教授	上村俊夫

その他、鹿児島県大島支庁土木課、笠利町役場、沖縄県教育委員会、沖縄国際大学、鹿児島県教育庁文化課の協力を得た。

### 〈発掘作業〉 節田湊金久遺跡

内山 静	泉 紗子	恵 幸恵	盛 健一
竹田 文子	西 すまえ	恵 照勝	竹田加奈恵
西 ひろみ	盛 和照	竹 今恵	浜田伊津子
中村喜美代	奥 八重子	当原 重信	

### 〈発掘作業〉 万屋下山田Ⅲ遺跡

浜田 鶴喜	川畑 忠美	泉 紗子	川畑 テツ
竹田加奈恵	坂下ヨチコ	竹田 文子	川畑ヲサエ
中村喜美代	東田 輝己		

### 〈整理作業〉

川畑 忠美	竹田 文子	坂山あいか	東田 輝己
竹田加奈恵	竹元むつみ	川畑 テツ	泉 紗子
牧野 瑞穂	坂下ヨチコ	浜田 鶴喜	前田奈留美

川畠ヲサエ 南 初代 今里 恵 南 亜矢子  
山下かおり 元多 敏子 中村貴美代 栄 はつ子  
昇 美幸 伊地知千草 西 雄志

なお、報告書作成にあたり、上記以外の多くの方々からも指導・助言をいただいた。ここに感謝の意を表します。

青山学院大学考古学研究室江上幹幸女史他教室の皆さん、熊本大学考古学研究室の皆さん。鹿児島県文化課の皆さん。沖縄県文化課の皆さん。中村恵（北谷町教育委員会）、島弘（那霸市教育委員会）、池田栄史（琉球大学助教授）の各氏。

## 第2章 遺跡の概要

### 第1節 遺跡の位置と環境

奄美諸島は5つ主島の島々から成り、喜界島、大島、徳之島、沖永良部島、与論島がそれにあたる。その他に大島本島南部に加計呂麻島、与路島、請島もあり、遺跡の所在も明らかにされている。「奄美」「大島」などの地名がこれら5つの島を差すのかはっきりしないが、ここでは国土地理院で「奄美諸島」として全体を差していることから「奄美」を全体的な呼び名にし、「大島」を大島本島を差す呼び名として行いたい。地名については今後の研究成果に従って改める必要があれば改めたい。

笠利町は奄美大島の中でも最北端に位置し、南北約15km、東西約4.5kmの細長い半島をなしている。半島は南北にのびる高岳、大刈山、淀山等からなりほぼ中央を東西に分ける地形になっている。この最高峰の山でも183.6km（高岳）である。半島全体は大島本島の中でも比較的平地が多いのが特徴である。

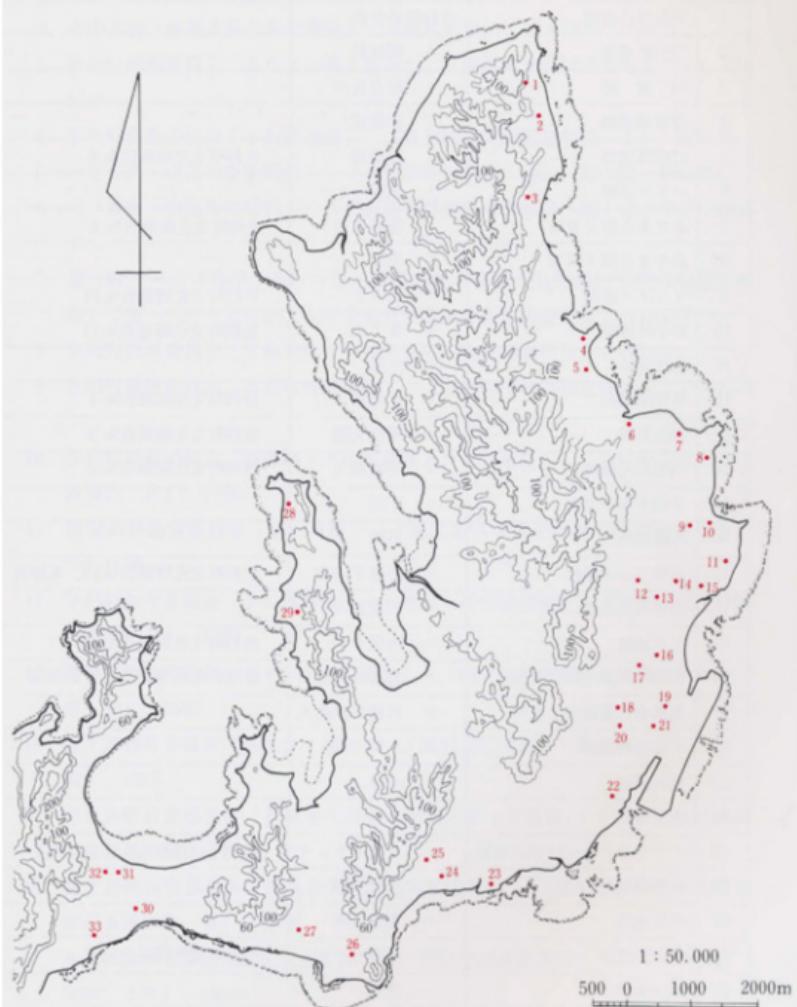
半島を東西に分けたこの“山脈”は“アマンデー”と呼ばれる「天孫降臨最初の地」として女神アマミコ男神シリクの二神が“シマ”づくりをしたと言われている。ここには明治34年に地区民等によって石碑が建立されている。碑のある南側下にはアマミコを祭ったアマミコ神社もあり、節田、平地内においては数々の伝説が多く残っている。東西を分けた山脈は島の生活にも大きく影響を及している。東海岸は黒潮の流れをまとめて受け発達した砂丘をなし地上は平地が多くゆるやかな台地状が山脈に続いている。これに対し西海岸は大小のリアス式海岸をなし山脈から急峻な湾で海につづく、集落は湾入した地形で三方山に囲まれた大小の地形をなしている。集落はその海岸側に限られている。これは奄美大島全体の特徴もある。

黒潮の中にある島として、海への依存度が高かかったものと思われる。また東海岸一帯は、古くより多くの先史、古代遺跡が立地しており遺跡からも貝や魚を中心とした生活跡が確認されている。

節田湊金久遺跡や万屋下山田Ⅲ遺跡も東海岸に位置している。この一帯は洪積台地の裾部に形成された旧砂丘（後水期海進に形成）と新砂丘、現砂丘の三つに大別出来る。これまでの遺跡の調査から旧砂丘上には縄文時代の遺跡が多く立地し、新砂丘上には弥生時代からグスク時代までの遺跡が多い。その多くは笠利町の東海岸に密集している。この密集度は徳之島伊仙町と喜界町にも認められるが、なぜこのように集中しているのかまだはっきりした解決を得るまでには到っていない。とにかく笠利町の東海岸の密集は面積から言えば全国でも珍らしい地域であろう。

万屋下山田Ⅲ遺跡は旧砂丘に立地しており、その遺物も多く当時の生活を復元出来得る資料である。

節田湊金久遺跡は新砂丘上に立地しているが、その生活規基は小範囲であり、生活跡や出土遺物を多量に得ることは出来なかった。遺跡は砂丘に立地しているものと思われるが今回の調査区域からはずれた結果になった。砂丘上に形成される遺跡の特徴を改めて知られた。



第1図 笠利町の遺跡分布図

第1表 町内遺跡地名表

番号	所 在 地	遺 跡 名	備 考
1	用長浜A遺跡	笠利町用長浜	
2	用長浜遺跡	タ 用長浜	
3	用 遺 跡	タ 用安良川	
4	辺留城遺跡	タ 辺留城	
5	辺留窪遺跡	タ 辺留窪	笠利町文化財報告No.6
6	コビロ遺跡	タ 須野コビロ	"
7	あやまる第2貝塚	タ 須野大道	笠利町文化財報告No.8
8	あやまる第1貝塚	タ 須野	
9	マフノト遺跡	タ 松ノト	笠利町文化財報告No.14
10	喜子川遺跡	タ 喜子川	笠利町文化財報告No.11
11	土盛遺跡	タ 土盛	
12	宇宿港遺跡	タ 宇宿港	笠利町文化財報告No.4
13	宇宿貝塚	タ 宇宿大龍	笠利町文化財報告No.3
14	宇宿高又遺跡	タ 宇宿高又	笠利町文化財報告No.2
15	宇宿小学校遺跡	タ 宇宿	
16	万屋遺跡	タ 万屋	
17	万屋下山田遺跡	タ 万屋下山田	笠利町文化財報告No.10、本報告
18	万屋泉川遺跡	タ 万屋泉川	タ
19	ケジ遺跡	タ 万屋ケジ	笠利町文化財報告No.6
20	長浜金久遺跡第Ⅱ貝塚	タ 万屋長浜金久	鹿児島県教育委員会報告書32
21	長浜金久遺跡第Ⅰ貝塚	タ 万屋長浜金久	"
22	ナビロ川遺跡	タ 土浜	
23	立神遺跡	タ 土浜	
24	土浜遺跡	タ 土浜	
25	イヤンヤ(ヤーヤ)洞穴遺跡	タ 土浜イヤンヤ	1973年三島格・永井昌文調査
26	明神崎遺跡	タ 用安入瀬	
27	用安遺跡	タ 用安入瀬	
28	サウチ遺跡	タ 喜瀬サウチ	笠利町文化財報告No.1
29	鯨浜遺跡	タ 喜瀬	
30	ウツタ遺跡	龍郷町赤尾木ウツタ	熊本大学考古学研究室活動報告12
31	赤尾木遺跡	タ 赤尾木	
32	赤尾木保育所遺跡	タ 赤尾木	
33	手広遺跡	タ 手広	手広遺跡発掘調査終了報告

〈地名表作成文献〉

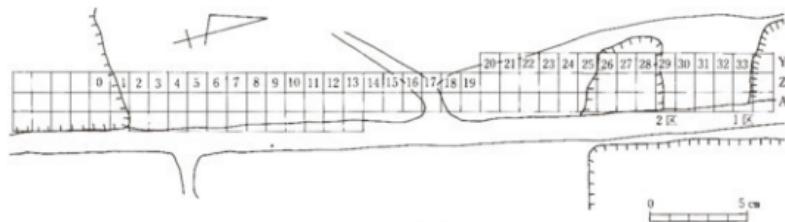
- 1 『笠利町郷土誌』 笠利町 1973年
- 2 中山清美「奄美大島の先史遺跡」 『南島史学』 17・18号 1981年
- 3 笠利町教育委員会「あやまる第2貝塚」 『笠利町文化財調査報告 7』 1984年
- 4 笠利町教育委員会「宇宿港遺跡」 『笠利町文化財調査報告 4』 1981年
- 5 三完宗悦「南島の先史時代」 『人類学先史講座 16』 雄山閣 1941年
- 6 河口貞徳「南島先史時代」 『南方産業科学研究所報告 第1巻2号』 1956年
- 7 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨「奄美大島笠利村宇宿貝塚発掘報告」 『美一自然と文化』 九学会連合奄美大島共同調査委員会 1959年
- 8 笠利町教育委員会「宇宿貝塚」 『笠利町文化財調査報告』 1979年
- 9 笠利町教育委員会「笠利町高又遺跡」 『笠利町文化財調査報告 2』 1978年
- 10 笠利町教育委員会「城遺跡・下山田遺跡・ケジⅢ遺跡」 『笠利町文化財調査報告 8』 1986
- 11 鹿児島県教育委員会「泉川遺跡」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 39』 1986
- 12 笠利町教育委員会「ケジ遺跡・コビロ遺跡・辺留窪遺跡」 『笠利町文化財調査報告 5』 1983
- 13 鹿児島県教育委員会「ケジⅠ・Ⅲ遺跡」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 38』 1986
- 14 鹿児島教育委員会「長浜金久遺跡」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 32』 1985
- 15 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡(第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡)」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 42』 1987
- 16 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡(第Ⅱ遺跡)」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 46』 1988
- 17 永井昌文・三島格「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」 『考古学雑誌 50巻 2号』 1964
- 18 鹿児島県教育委員会「土浜ヤーヤ遺跡」 『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 47』 1988
- 19 笠利町教育委員会「サウチ遺跡」 『笠利町文化財調査報告書』 1978

## 第2節 遺跡の概要

### 下山田Ⅲ遺跡

下山田Ⅲ遺跡は1984年（昭和59年）に県文化課によって中心部が調査されている。その後埋めもどされているので旧地形は調査区域外の遺跡の北側にわずかに残るだけである。旧地形の最高位は「9~10m程で、遺物包の最深部は6,5m程であった」と報告書に記されており、ほぼ旧地形に埋めもどされている。

調査区は1984年調査時の第3地点にあたり、29区と33区になる。今回の調査区が3区内に残る部分の両端になることから北側（33区）を1区とし南側（29区）を2区として調査区を設定した。両端ともわずかに残った境界地点で北側、南側とも1978年（昭和53年頃）に砂採掘が行われ破壊され窪地になっている。北側は赤土で少し埋めもどされサトウキビ畑として使われていたが2、3年前から放置され雑草に覆われている。砂採掘された当



第2図 第1次調査区グリッド配置図 第2次調査区（1区・2区）

当時のことを地元の方々に聞きとりをした結果、多くの貝が散乱しており、人骨も出土したという。その遺物や人骨がどのように処理されたかは不明である。

遺物の発掘状況から見ると第1次調査時もかなりの出土量で今回のⅡ次調査も多くの遺物が出土していることからも砂採掘された場所も同様な出土量であったと思われる。

第1次調査と同様に遺物包含層は西側から東側へ（現道路部分）深く潜み込んでいる。遺物包含層も厚く、出土量も多い。下層の白砂中からの出土もあり、第Ⅲ次調査では白砂の下層まで全体的に堀り下げる必要がある。

出土遺物は宇宿下層式土器、面積前庭式土器、松山式土器等が主でその他に貝製品が多く貝小玉も14点検出された。自然遺物は貝殻が最も多く、魚骨、獸骨そしてクロウサギと思われる頭骨も検出されている。

遺構は第1次と同様に集石遺構が出土し、集石が重複して検出されている。第1次調査と合わせると集石群をなしており、調理を行っていた場所とも考えられる。集石はそのほとんどが加熱されている。

### 節田湊金久遺跡

節田湊金久遺跡は海岸近くの新砂丘上に立地しており、遺跡南側が砂採掘された時に地元の方々が土器片を表探している。砂丘は防砂林としてモクマオウが植え付けられており現在はモクマオウ林になっている。調査終了時に台風19号、20号でモクマオウ林がメチャクチャになりその木や枝がトレンチの中に入って壁が壊れるというアクシデントもあった。

砂丘上に点在する遺跡は小規模遺跡が多く発掘地点が少しづれるだけでも無遺物、無遺構になることもある。湊金久遺跡は調査区域内には無遺物、無遺構であった。唯一青磁片と動物骨が出土しただけである。遺跡北側（砂丘の奥地）には積石があり、古者の話しては昔の墓地であると説明して頂いた。節田地区ではこうした無人の墓地が多く、工時中に多量の人骨が出土することがたびたびある。風葬、集団墓的なものもあるが完全な調査は行われていない。この地域においては民俗学的なアプローチでの調査を行い補足する。

## 第3節 砂丘

笠利町東海岸には発達したリーフと発達した砂丘がある。砂丘の形成に大きく影響を与えたのは発達したリーフも考えられる。東海岸のリーフと砂丘は遺跡とも大きく関連しており、大きなリーフがあると必ず砂丘があり、その砂丘上には遺跡が立地する。

大島本島における砂丘遺跡はグスク時代の遺跡を除いてその約90%が砂丘遺跡である。これらの遺跡は古砂丘に縄文時代、新砂丘に弥生、グスク時代と大別出来る。

縄文海進最高頂期後泥炭層の堆積があり、縄文後期に風成砂層が堆積する、縄文晩期には砂丘はさらに厚くなり、数枚の堆積層を見る事が出来る。笠利町長浜金久遺跡においては縄文時代後期の出土遺物が古砂丘（砂丘形成初期）から出土し、弥生時代からグスク時代にかけては堆積もかなり厚くなり、その中から遺物が出土する。

## 第4節 層序

### 2区 南壁

表層は畑地として整地された部分もあり、部分的にしかない。

Ⅱ層 黒褐色砂層（遺物包含層）

Ⅲ層 褐色砂層 立層と色調は違うが遺物包含層である。

Ⅲ'層 Ⅲ層と同一であるが中に白砂層がレンズ状に入いる。

Ⅳ層 白砂層であるが無遺物層ではない。遺物の出土量はⅡ、Ⅲ層に位べ少なくなるが、大型の土器片等が検出される。Ⅳ層を完全に掘っていないため下は不明である。

## 第3章 万屋下山田Ⅲ遺跡の調査

### 第1節 遺構

今回の調査で7基の石組み遺構が検出された。発掘調査区は1区と2区。1区（北側）は石組み遺構1基が検出されている。石組は周辺の石を残存するだけで遺構北側には大量の灰が凝固している。砂丘の石灰質と灰が混りコンクリートのように固く締っている。この中には貝や土器などの遺物も含まれており、砂丘遺跡でありながら遺物も含めて凝固しているため遺物の検出、水洗いにはかなりの時間を要した。1区の石組みは炉としての使用が行われていた状況である。

第3図は遺物包含層の上層より出土した状況で遺物の出土状況にややまとまりがあるが、全体的に散乱している。炉と思われる部分には灰層が固く締っていた。

第4図は遺物包含層の中層の出土状況である。当時の生活面と思われ土器片もやや大片化が目立つ。炉跡もはっきりと出土している。第5図は第4図出土の状況から特に浮いた状態の遺物を取り上げて更に掘り下げた図面である。第6図もこの方法で掘り下げた状況である。

第7図は遺物包含層下層の出土状況である。この状況になると同一種の貝だまりが数ヶ所検出される。マガキ貝や二枚貝などは多量に取って1回分の廃棄の状況である。現在でもこの貝は多量に取って中身だけを取り出してまとめて食べる。マガキ貝が一番美味とされるのは季節的には春である。

レベル的に3枚に分けて発掘を行ったが出土遺物に大きな差違は認められなかった。ただし貝の出土状況は第5図に見られるように同一種の貝だまりが確認されるなどの時間差が見られる。

2区（南側）においては1区のように多量の遺物の検出はなかったが石組み遺構が6基検出されている。（第8図）

1号集石は直徑約1mの大きさの円形状をなしており、ほとんどが焼けている。中にはシャコガイなども入っており、まとまったしっかりした集石である。掘り込み状態ははっきりしない。

2号集石は比較的小型で7個の石だけである。集石内に炭化物が多く、使用されている。

3号集石は上部の石が散乱した状態で下部は少し掘り込まれて敷石がある。石を敷いて積んで使用されたのがわかる。集石内には大型の土器片も入っている。

4号集石は3号集石と近く、散乱した状態で出土している。貝殻も一緒に混入している。

5号集石はレベル的に1, 3, 4号集石積の下層から出土している。遺物包含層が落ち

込んでおり、集石が重複した状況で出土した。多少の時間差は認められるが時期的にはさほど差はないと思われる。

6号集石は比較的小型の石が散乱していた状況で他の集石に較べるとあまりまとまりのない状態である。

集石全体焼けており、魚骨、動物骨、貝等が近くに散乱している。

## 第2節 出土遺物

出土遺物は1区、2区を合わせて土器、石器、貝製品、骨製品、その他として記述する。合わせて第1次調査の報告書より土器の図面等についてはそのまま使わせて頂いた。これは同一遺跡を調査したものであることから第1次調査の土器と今回の土器が同一個体のものもあることからの理由である。また土器等においては今後奄美編年においてはこのように多種多様の土器が出土したことは今後の調査研究には必要であることから今後の資料として記録したい。

### 1) 土器

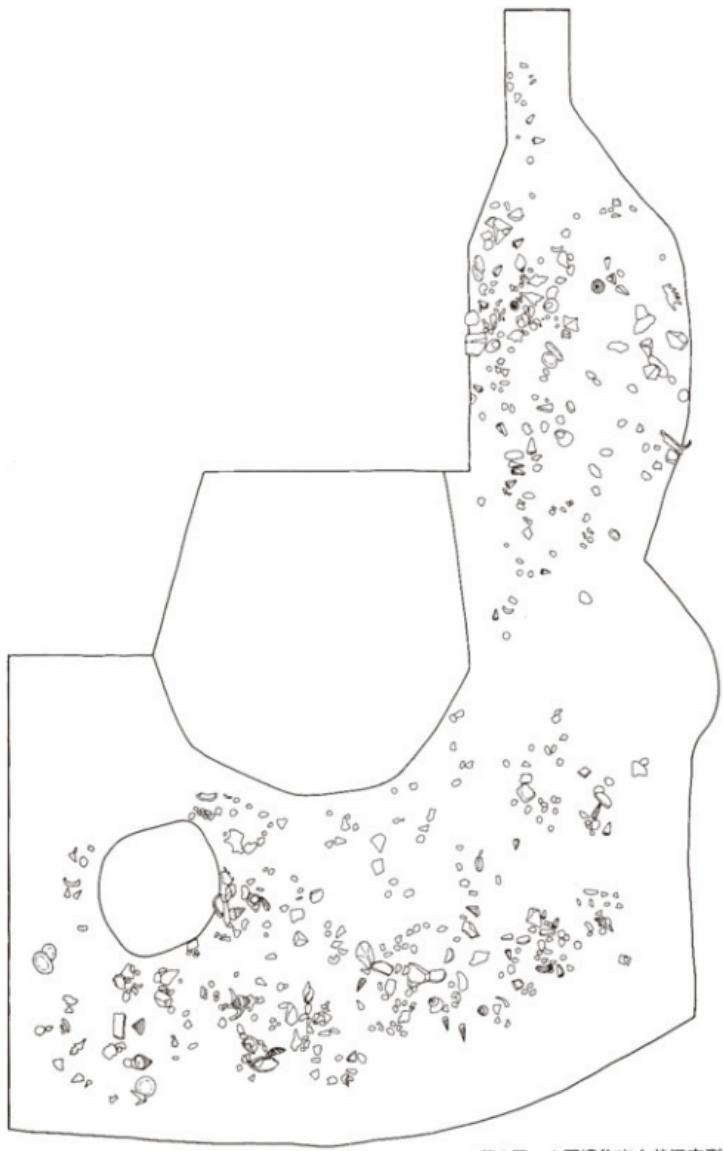
出土土器は1区において多くの資料を得た。2区においては土器片は少なく集石が多く出土している。

図面で紹介出来る資料としては第68図～第73図までが今回出土した土器である。19ページから81ページまでは第1次調査時の資料である。

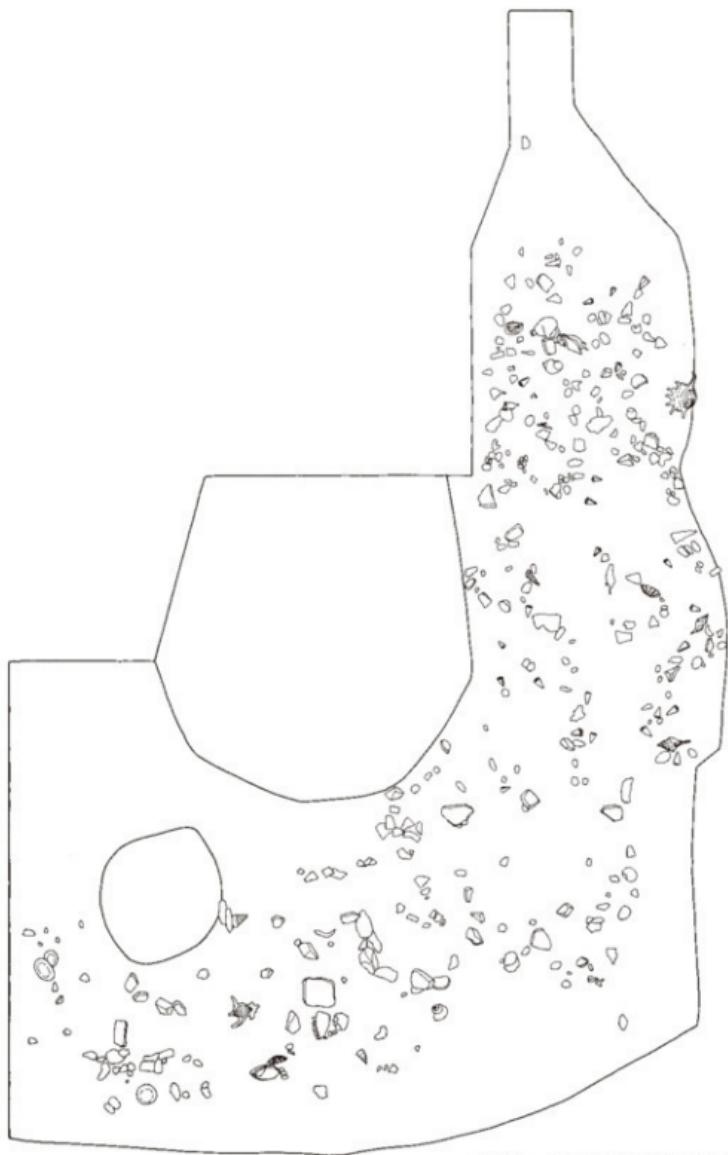
第9図は面縄前庭式土器で器形や文様帶等に多少の差異があるがこれまで面縄前庭式土器の範疇に入っている。面縄前庭式土器についてはこれまでの資料の増加によって分類が行われている。ただしこれらの分類はまだ沖縄と比較されたものでもなく、下山田遺跡の資料等々の比較も行われていないことから今後更に検討する必要がある。ここでは分類はあえて行わず資料の特徴的な報告だけにとどめたい。

万屋下山田遺跡は砂取り工事によって発見された。その後1981年「南島史学」に紹介されている。その時点で出土遺物は断面観察によって下層から曾畠系土器、条痕文土器、面縄前庭式土器等が出土しており、表採資料では面縄前庭式土器が多かった。石器にミニチュアの磨製石斧、チャートのチップ、貝輪等も含まれている。今回の調査では宇宿下層式土器が主で面縄前庭式土器は少ない。

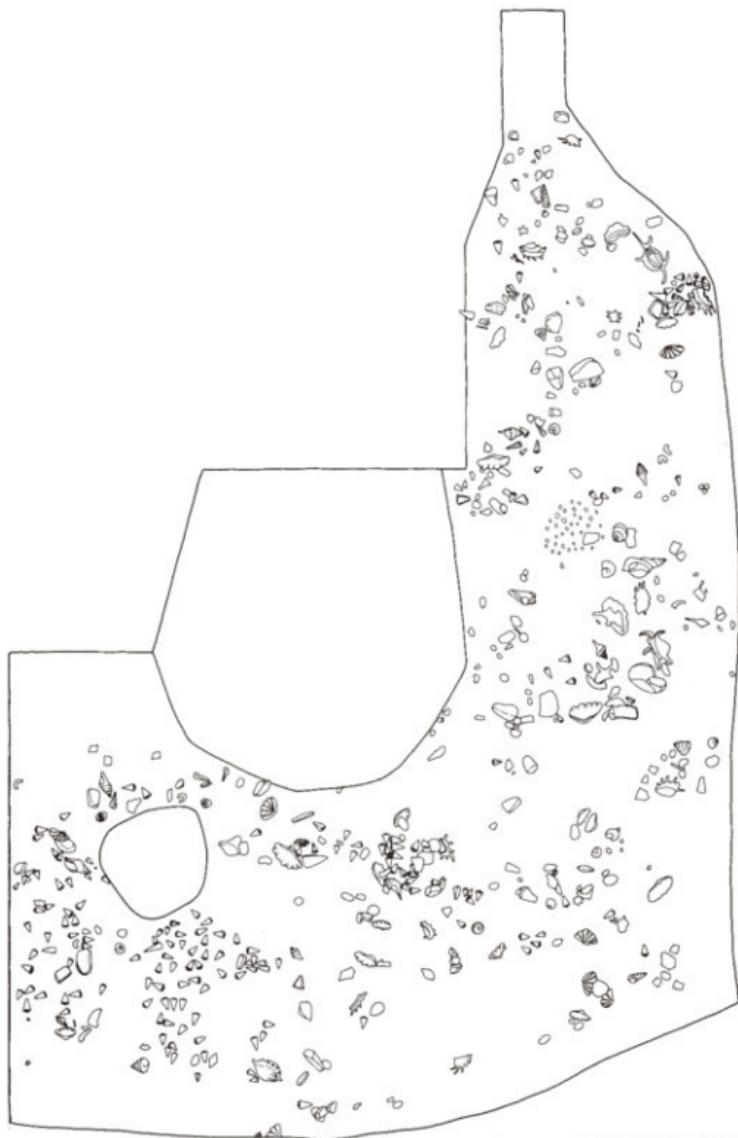
第9図1～8までは口縁部でタイプは3タイプに分類出来る。1はやや内側に傾くが大型の土器片である。口縁部近くにコイル状の貼り付け凸帯文を有し、凸帯文直下から傾状沈線文が施されているタイプ(1, 3, 4, 5, 6, 8)と傾状沈線文でなくさらに凸帯文で文様構成をなすタイプ(2)、口唇部に半截竹管状の押引き文を有するタイプ(2, 7)に分類出来る胸部の文様構成は9～35まで同様である。内器面においても貝殻条痕文が鮮明に残っている(11)、器厚は比較的薄手で焼成は良好である。面縄前庭式土器の特



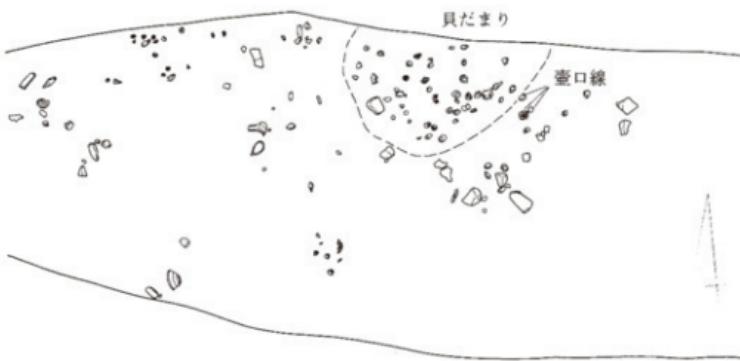
第3図 1区遺物出土状況実測図



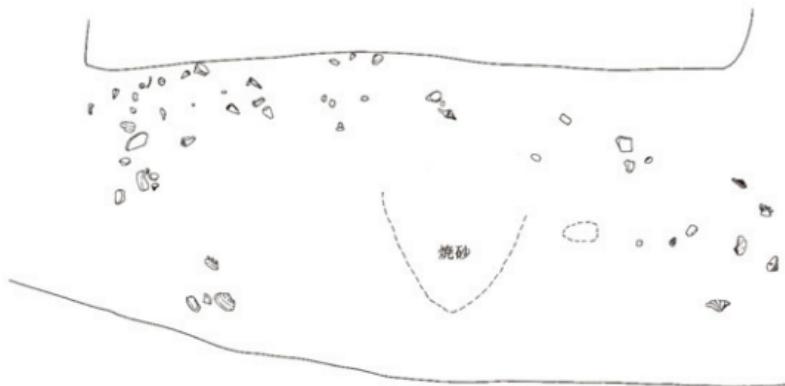
第4図 1区遺物出土状況実測図



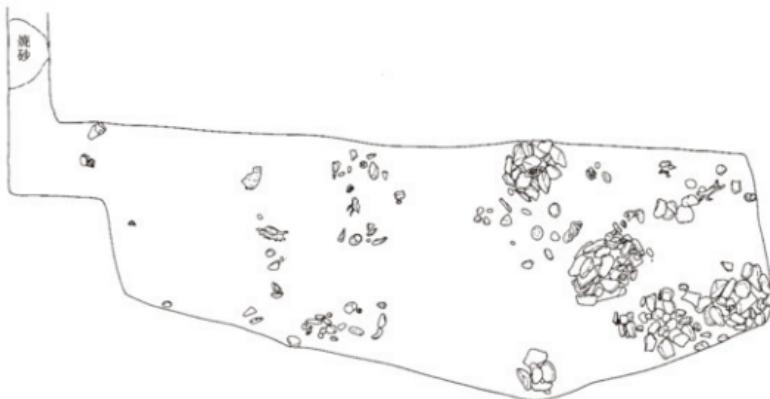
第5図 1区遺物出土状況実測図



第6図 2区遺物出土状況実測図（その1）



第7図 2区遺物出土状況実測図（その2）



第8図 2区遺物出土状況実測図（その3）

微を良く見る事が出来る。

底部は37の1点である。面縄前庭式土器の底部は丸底か乳房状尖底をなすが本資料は丸底の一点のみである。

全体的に今回の調査地点では面縄前庭式土器を中心とした土器文化ではなく宇宿下層式土器を中心とした地点であったと考えられる。また面縄前庭式土器は小規模でまとまって出土するのが特徴で広範囲に広がった出土のしかたがあまり見られない。第1次調査地点と少し場所を移してこれだけの相違が見られる。土器片も小片がほとんどである。

2) 第1次調査では面縄前庭式土器を含めて全部1類からX XI類に分類している。面縄前庭式土器はII類からV類に分類されている。

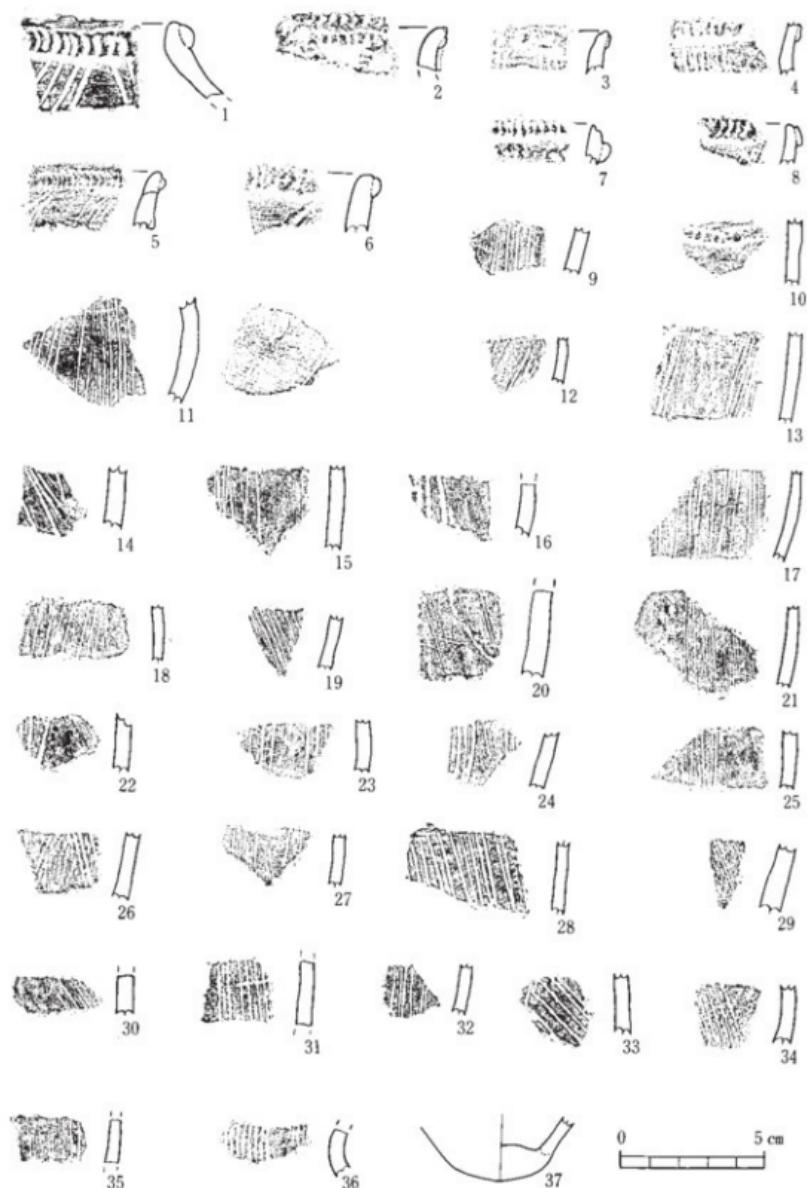
## 2) 出土遺物—土器 （以下第1次調査報告書より）

III類 基本的に第2地点の分類に準じている。

III a類 120の1点だけである。口唇部に叉状工具による連続刺突を施し、頭部から口縁部へかけての屈曲部には、同一の施文具によって連続刺突を巡している。

III b類 第3地点では、全く無文のb類は確認されていない。

121は、口唇部に連続刺突、122・126は口唇部に連続刺突を施し、無文のままの屈曲部には蛇行突帯、128では、口縁直下の横走する突帯と下部の無文帯には蛇行した突帯が設けられ、突帯のあり方に多様化している様相がうかがえる。130は無刻目の突帯が2条貼



第9圖 面繩前庭式土器

り付けられる。これらは、いずれも口縁部から頸部へかけての屈曲部へは、沈線文等の文様は施されていない。

N類 頸部から、口縁部へかけて、形状・整形等の違いが認められ、いくつかのバリエーションが見られる。

N a 類 132は全体的に器肉は厚く舌状の口唇部を呈し、139は頸部から口縁部へかけて、外反が小さく直線的な立ち上がりをみせ、制作時の粘土ひもの接合面も明瞭に残される。また、139・142の屈曲部に描かれた沈線は、他と比べてやや広目の施文具が使用されている。このN類土器の器形は、145や148のように最大径は胴部に位置するのが一般的であるが、147の場合、若干様相を異にし、広口の鉢形の形状を呈している。145の屈曲部の細沈線は、途中で方向を変え屈曲をついている。153・154の口縁直下の貼りつけ突帯は、他と比べて小型であり、また、153の器肉は、特に薄い。173は器肉も厚く、頸部での屈曲も強く、異質で大型の器形である。

胴部の文様は、垂直方向の平行線文が主であるが、177・201のように交差するものも含まれている。227は、平行する曲線文を描いている。ヘラによる施文である。1点だけの出土で、他に類例は認められない。

N b 類 143は、復元口径 80mm 程度で、他と比べて極端に口縁部が小さく壺形土器の様相が強く感じられる。また、口縁端部の突带上には、叉状工具による2条の連続刺突が並行する。144は、口唇部に円盤状の粘土板を貼り付け、円盤の上面の周辺に連続刺突を施す特異なもので、他に類例は認められない。148は、口縁部と頸部に直結する2本の突帯を貼り付け、155・156は蛇行する突帯が施されている。

胴部や底部については、a 類との区別は困難で、おそらく類似した形状・施文手法を用いたと思われる。

#### V類

N類土器と比べて、貼り付ける突帯の幅がより広くかつ平坦面を呈している一群である。164～168の口縁部への貼り付けは、いずれも幅広で平坦面をなし、押し引きや連続刺突で刻まれる。166は口唇部に角状の突起をつけ、167の直交する突帯は内面にまで達している。いずれも、平坦で幅広の突帯が貼り付けられる。

171と172は復元口径は異なるが、同一の個性を持つもので、その点同一個体の可能性がある。やはり幅広の突帯を持ち、屈曲部では口縁部と頸部の突帯を連結する突帯がつけられる。2点共に同一のヘラ状工具によりシャープに刻まれている。

土器1 678～680も同様な特長を持つもので、681はそれらの胴部片と思われる。平坦で背の低い幅広突帯は鋭利な工具で斜位に刻まれ、屈曲部や胴部の細沈線もシャープに描かれている。

## VI類

口唇部が意図的に肥厚されている一群である。口唇部が外に傾き断面が三角形状を呈し、なおかつ、口唇部に刻み目を施したもの（VI a類）。VI類の特徴を持つもので、口唇部に細沈線、内面に刺突文等を加えたもの（VI b類）。肥厚した口唇部の傾きが弱く、平坦面に近くなり、口唇部の刻み目も明瞭さを失い、刺突や細沈線が施されるもの（VI c類）。平坦な口唇部に貝殻腹縁部を刺突したもの（VI d類）に分類される。

VI a類 231～235は共通して横方向の条痕整形がなされ、口唇部はナデ消された後に棒状工具で深い刻み目が施される。刻みの方向は、外から内へ向いている。色調は明赤褐色で明るく、他の土器類とはやや趣を異にしている。器形は口縁部片だけで明らかでないが、ゆるやかに外に開き丸味を呈し、胴部に最大径があるものと思われる。

VI b類 239・240をその典型とするもので、239は、刻目間の平坦面に斜行する細沈線を施し、屈曲部にも細沈線文が描かれる。240では、刻目は斜めに施され、刻みの方向は内側から行われている。また、屈曲部にも沈線文が描かれ、内面は不規則な刺突が施されている。

VI c類 241～245は、口唇部の傾きが弱まり平坦に近くなる。241は細沈線、242は細沈線と連続刺突、245では、3条の連続刺突文等が施されている。

VI d類 253の1点だけの出土である。内外面共に斜位の条痕調整がなされ、平坦な口唇部には、貝殻腹縁による刺突が施される。やや内湾する形状を呈した鉢形土器で、他には類はないようである。

## VII類

口縁端部に幅広の突帯を貼り付けるもの（VII a類）、突帯が小型化し、頸部に貼り付けられるもの（VII b類）とに細分される。

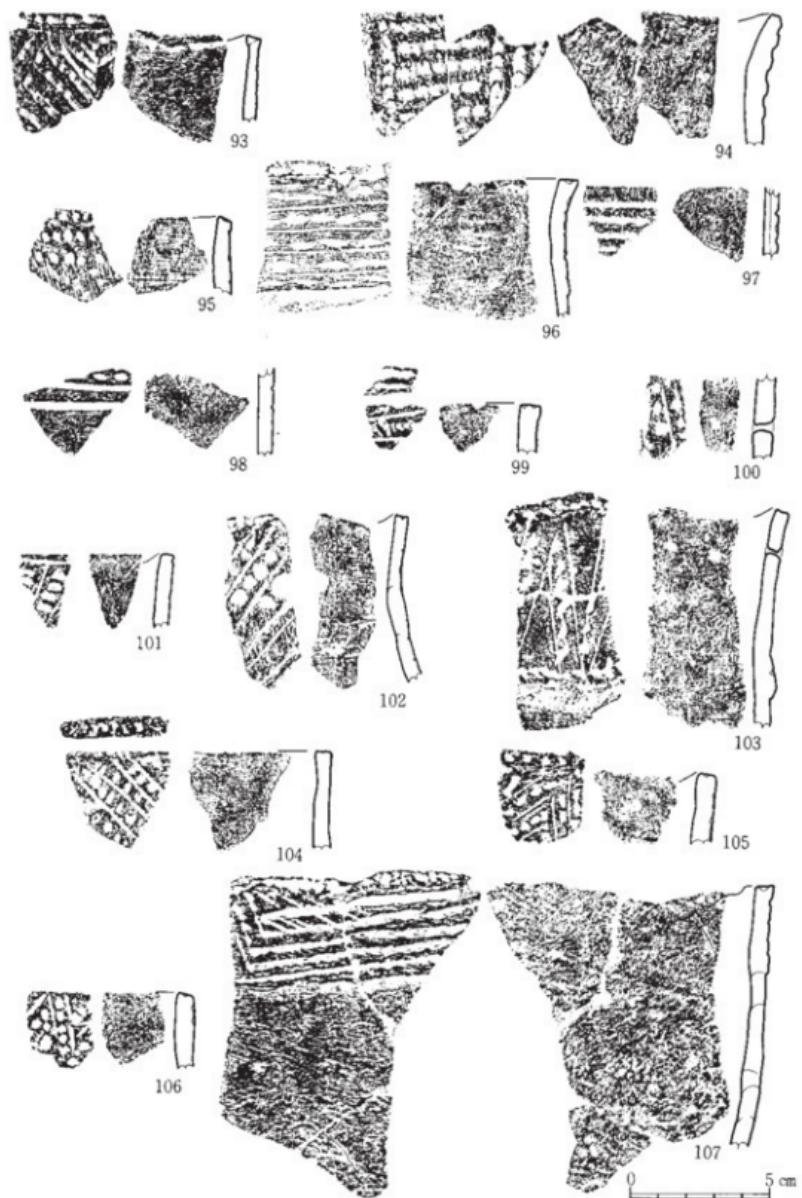
VII a類 248～249が代表的なもので、20mm幅の粘土帯の貼り付けがなされる。突帶上は、貝工具により搔き取る様に押圧（248）。249では、口唇部の両端に押圧により連続刺突、中央部に貝工具による押圧、口縁部も同じように押圧している。

VII b類 257・260の頸部の突帶上の刺突は、249の口唇部の両端に施された押圧手法と同一である。

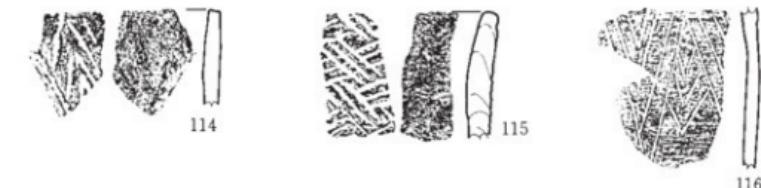
## VIII類

口縁部及び文様体が肥厚したもので施文の違いにより、押し引き（VIII a類）、押し引きの間隔が遠くなり間のびした感じの押し引き、あるいは一方向への連続刺突（VIII b類）に大別している。密な押し引きを施したものは少なく、間のびした押し引きによる施文が圧倒的に多いのも特徴である。

VIII a類 262がその典型的なもので、内外面を入念にナデ仕上げた後に、先端部が三角形に整形された工具で密に押し引いて入組文を描いている。269では、押し引きの間隔がやや粗となったもので、肥厚帯の下位にも同様に施している。全体としては數は少ない。



第10図 土器(第3地点)-1

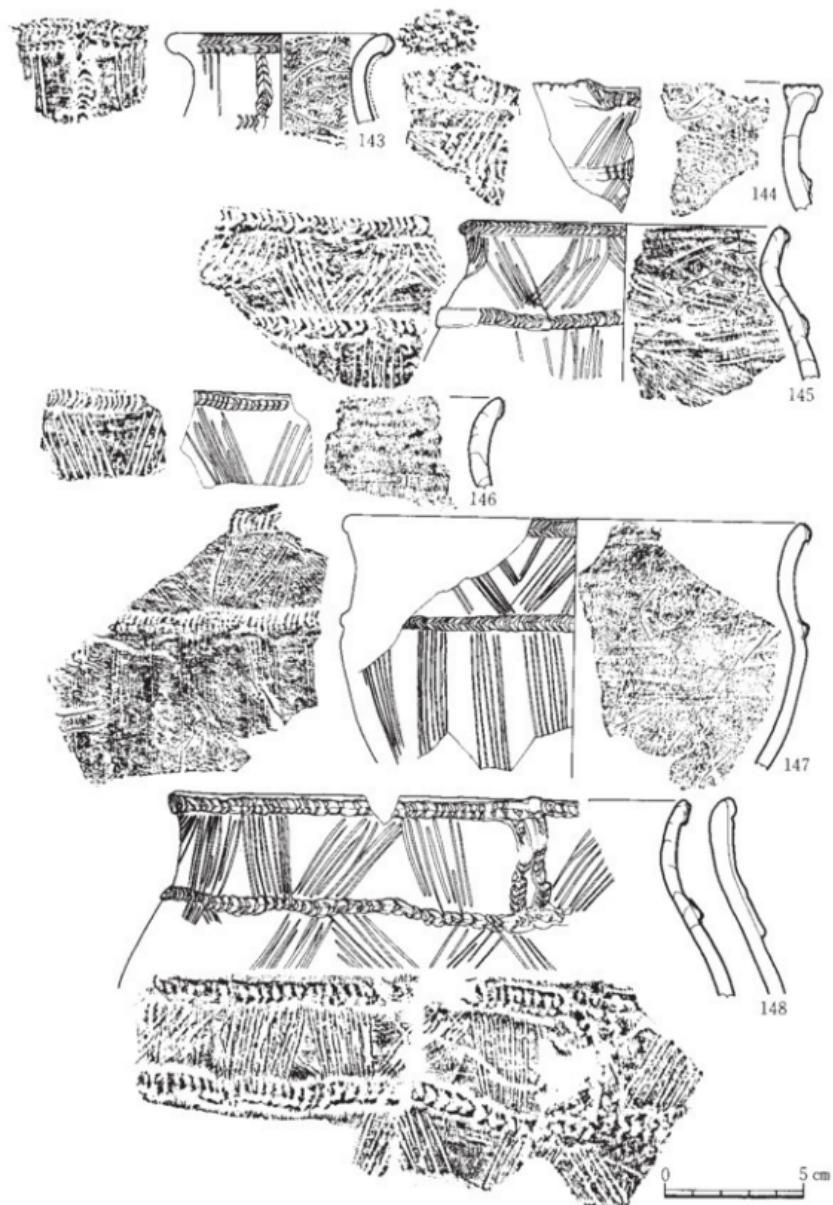


0 5 cm

第11図 土器(第3地点)-2



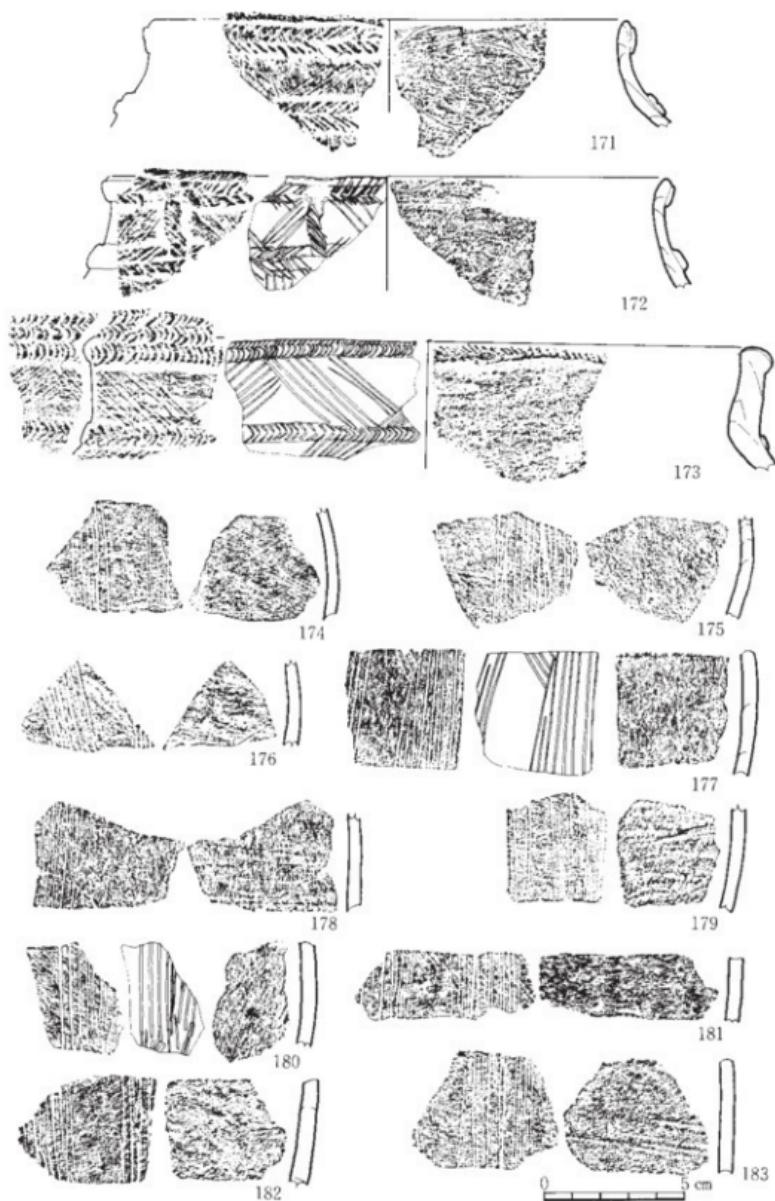
第12図 土器(第3地点) - 3



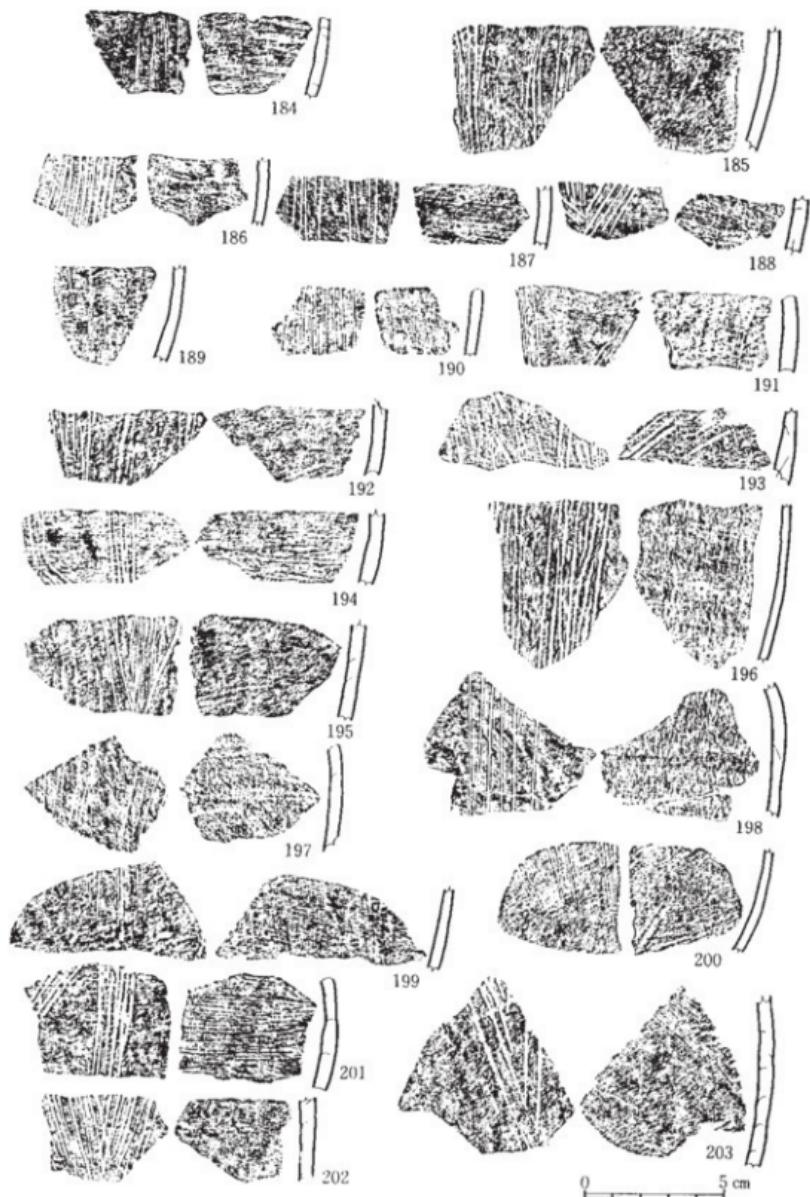
第13図 土器(第3地点)-4



第14図 土器(第3地点) - 5



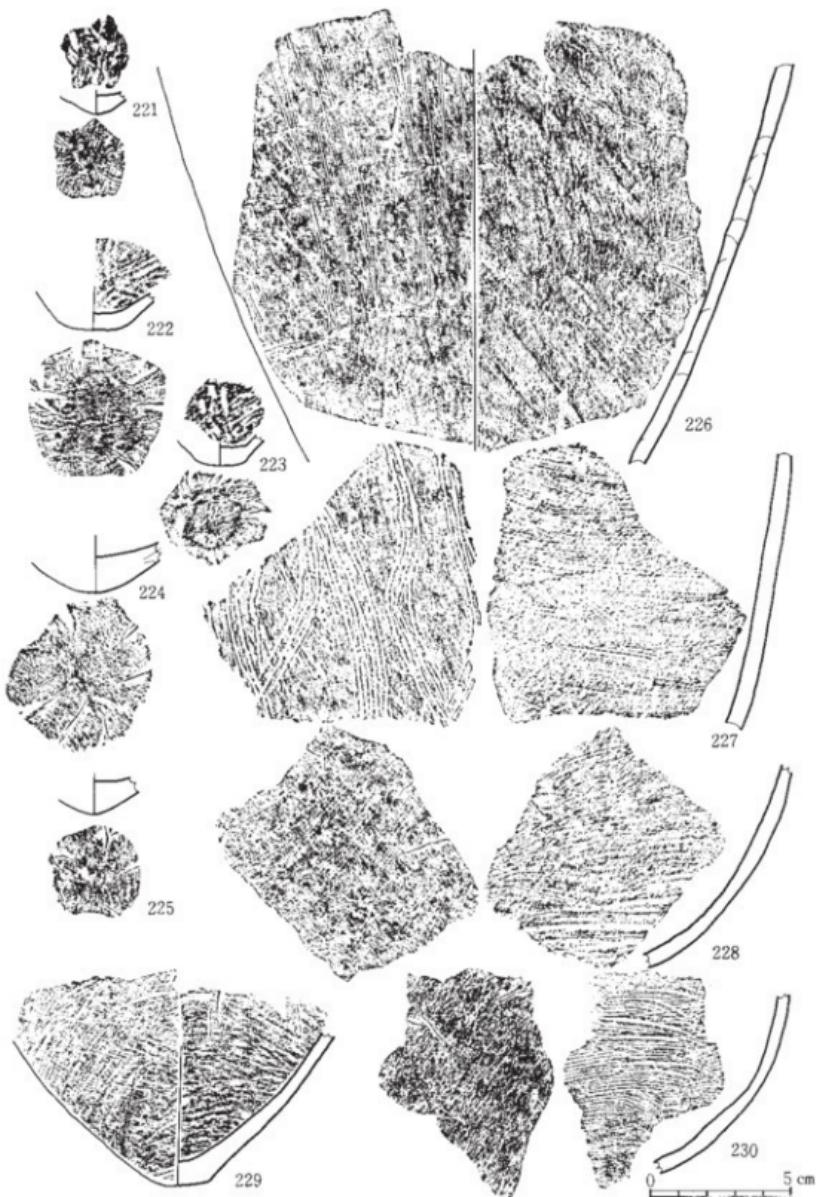
第15図 土器(第3地点)-6



第16図 土器(第3地点)-7



第17図 土器(第3地点)-8



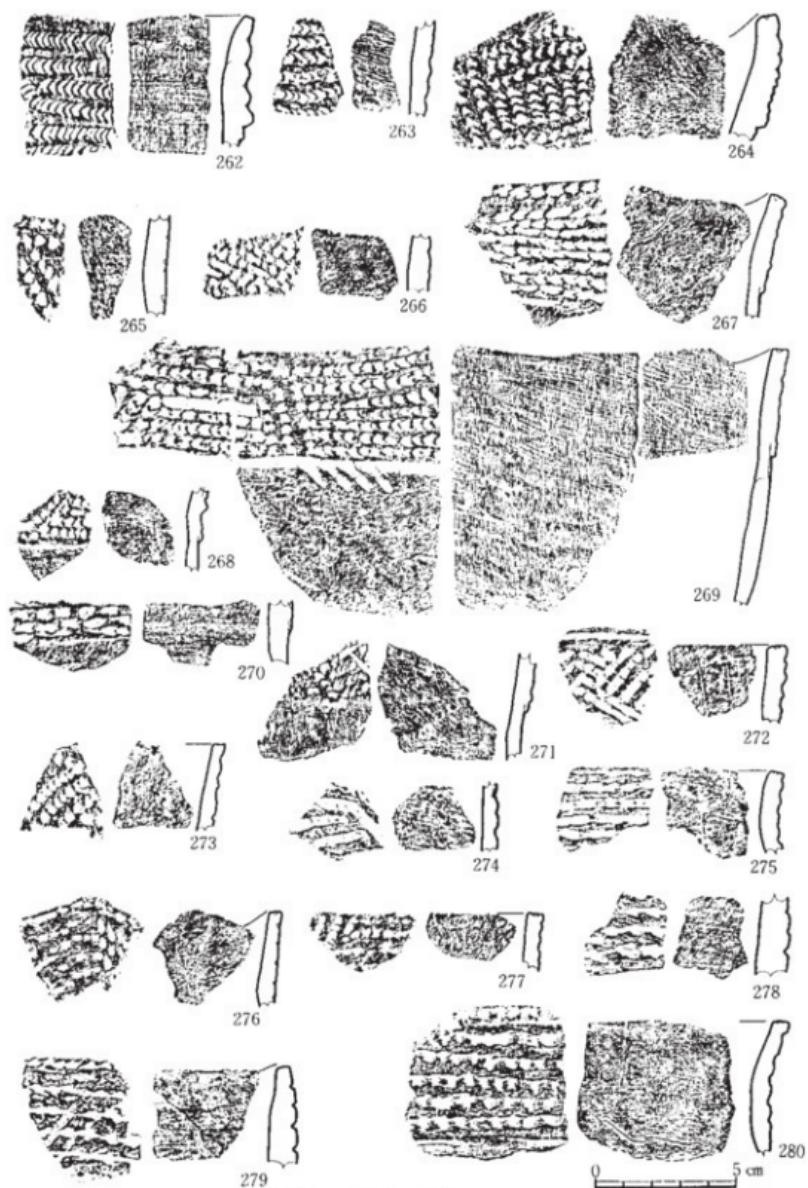
第18図 土器(第3地点)-9



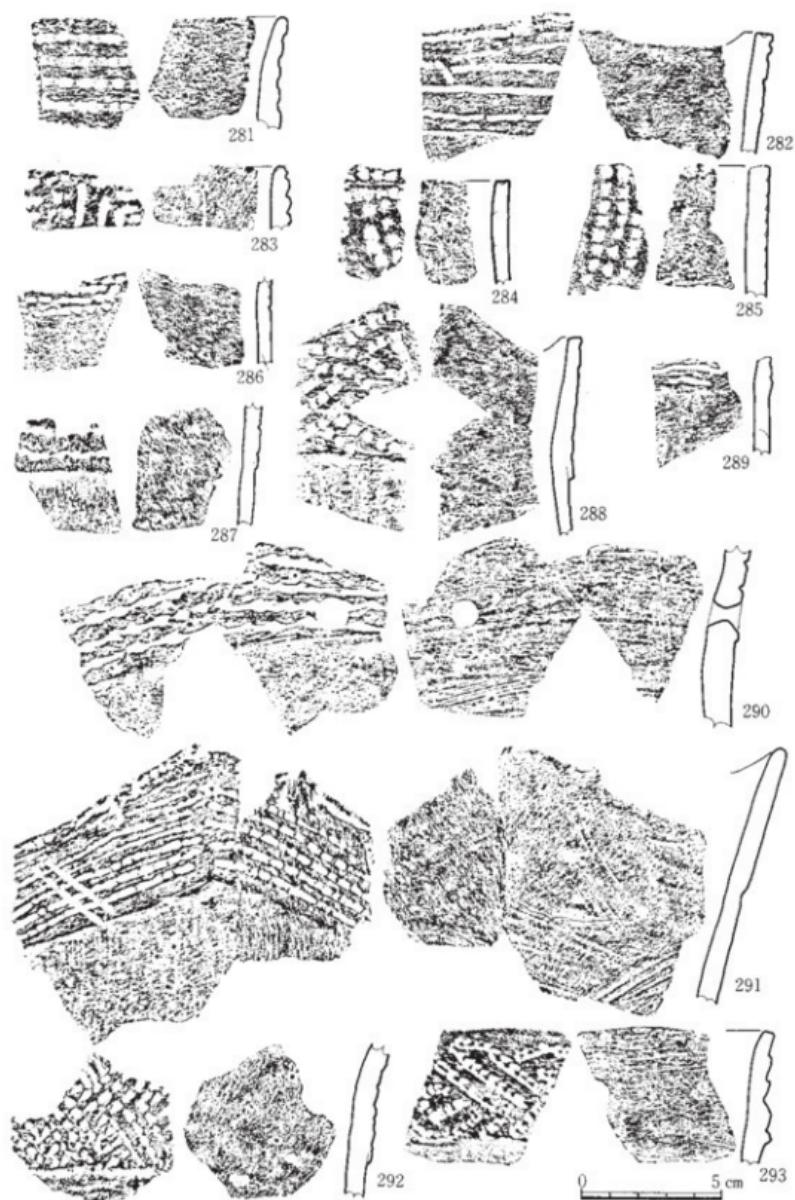
第19図 土器(第3地点)-10



第20図 土器(第3地点)-11



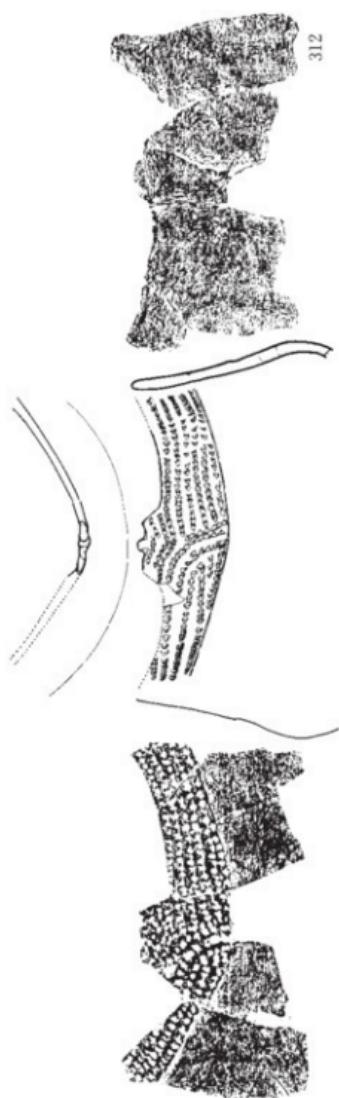
第21図 土器(第3地点)-12



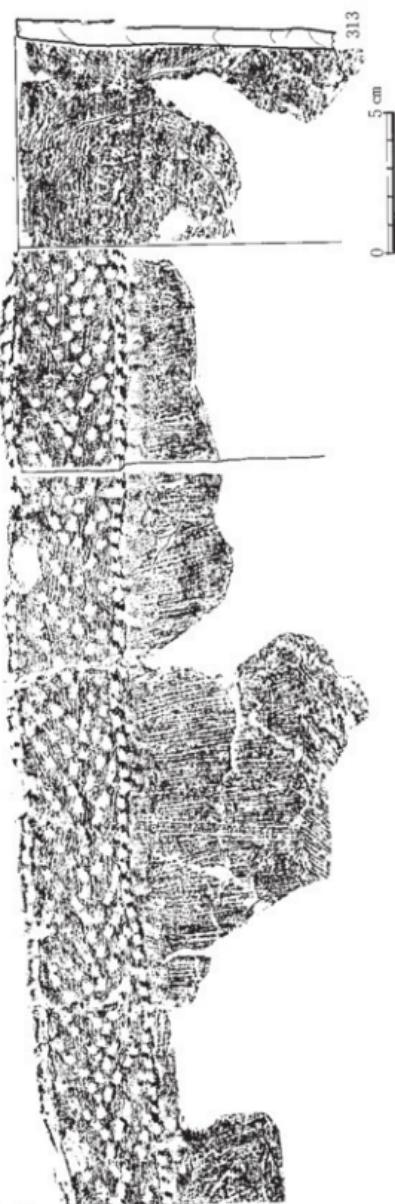
第22図 土器(第3地点)-13

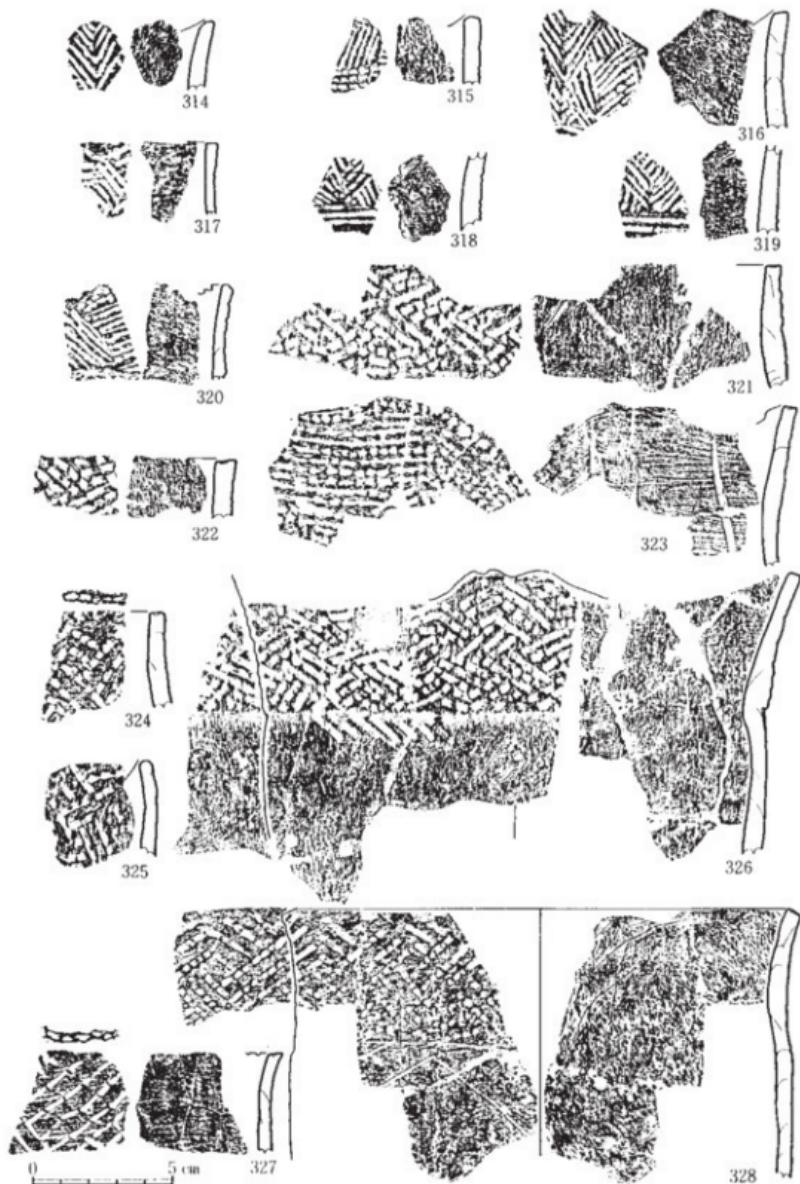


第23図 土器(第3地点)-14

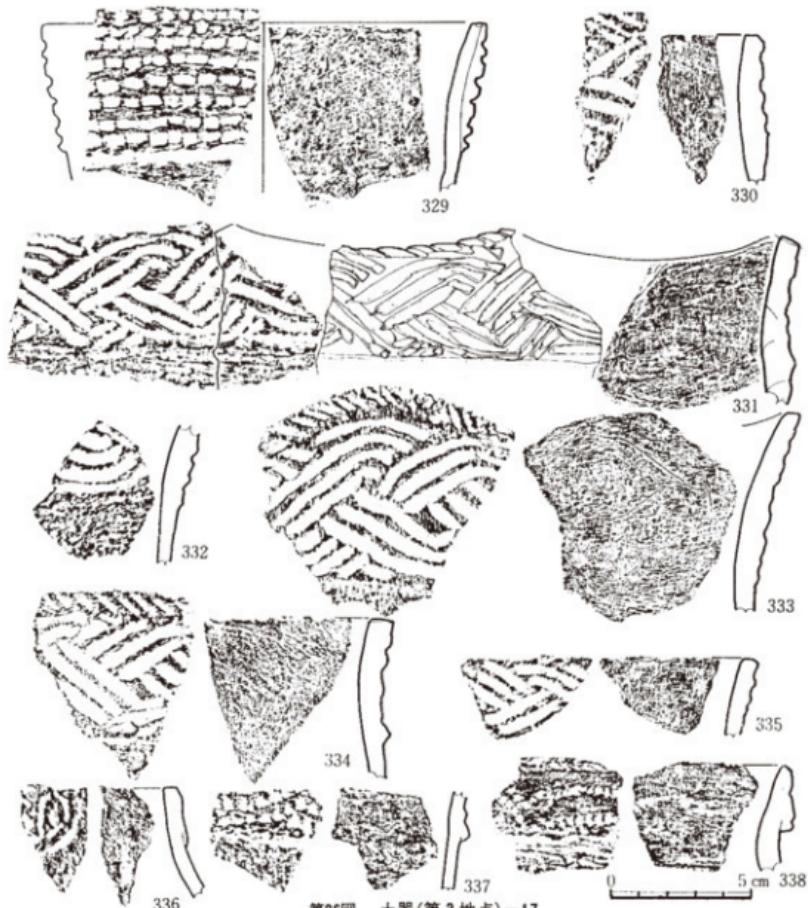


第24図 土器(第3地点)-15





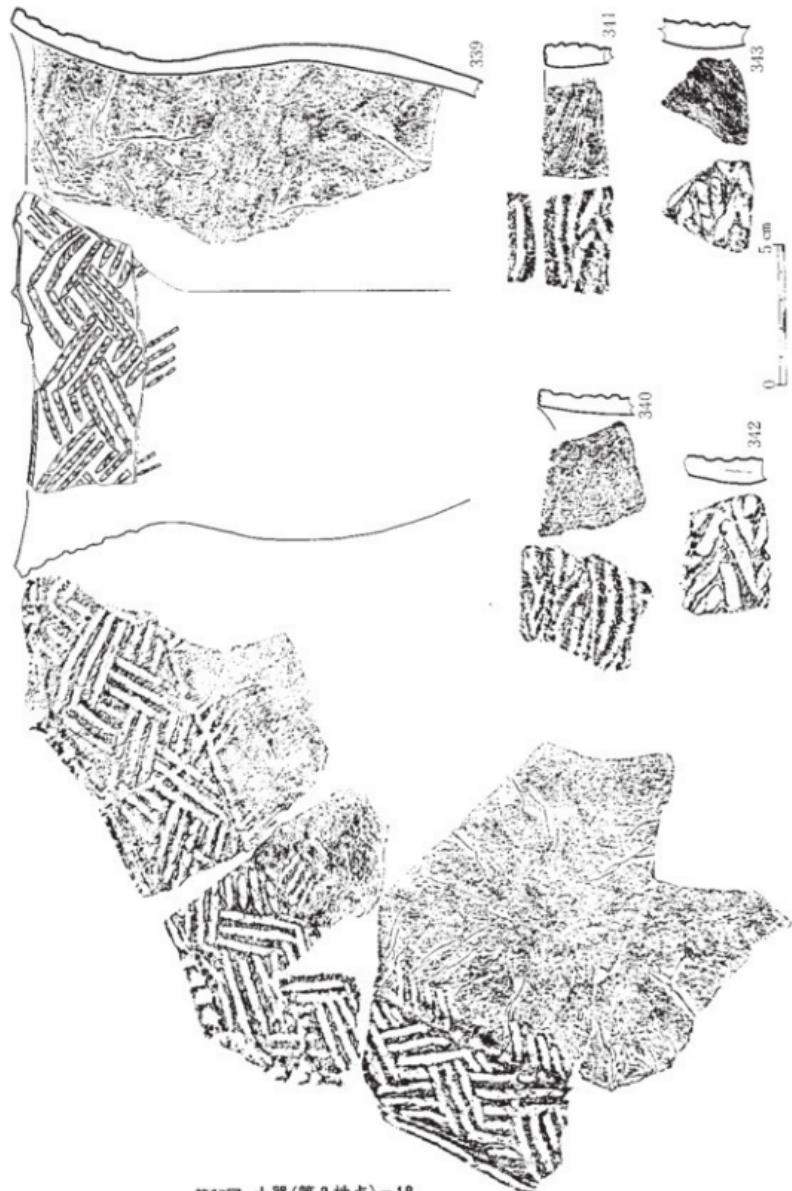
第25圖 土器(第3地點)-16



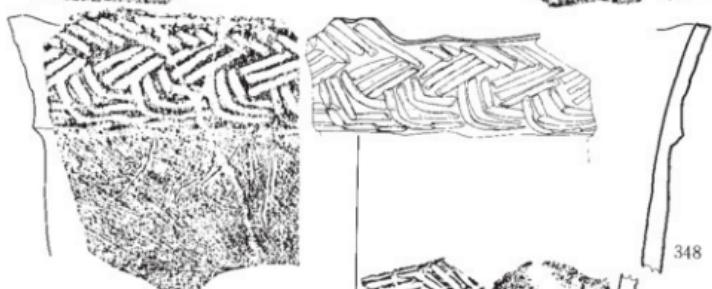
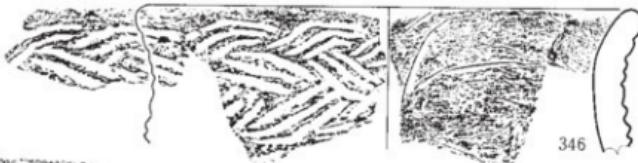
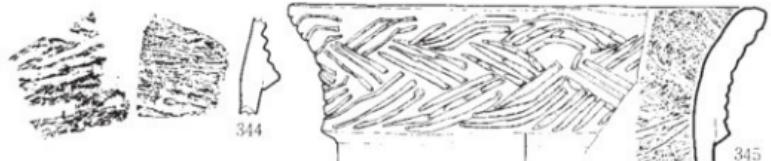
第26図 土器(第3地点)-17

VII b類 壁類の中では、圧倒的に多い。b類の施文パターンは、291・304のように横位に一定方向へ施すもの、295や301のように器形のアクセント部で方向を変化させるもの、326・328・339のように3本が1組の単位でそれらを組み合わせて文様を構成(編籠文)するもの、313のように異なる方向のものを組み合せて構成するもの等が存在している。

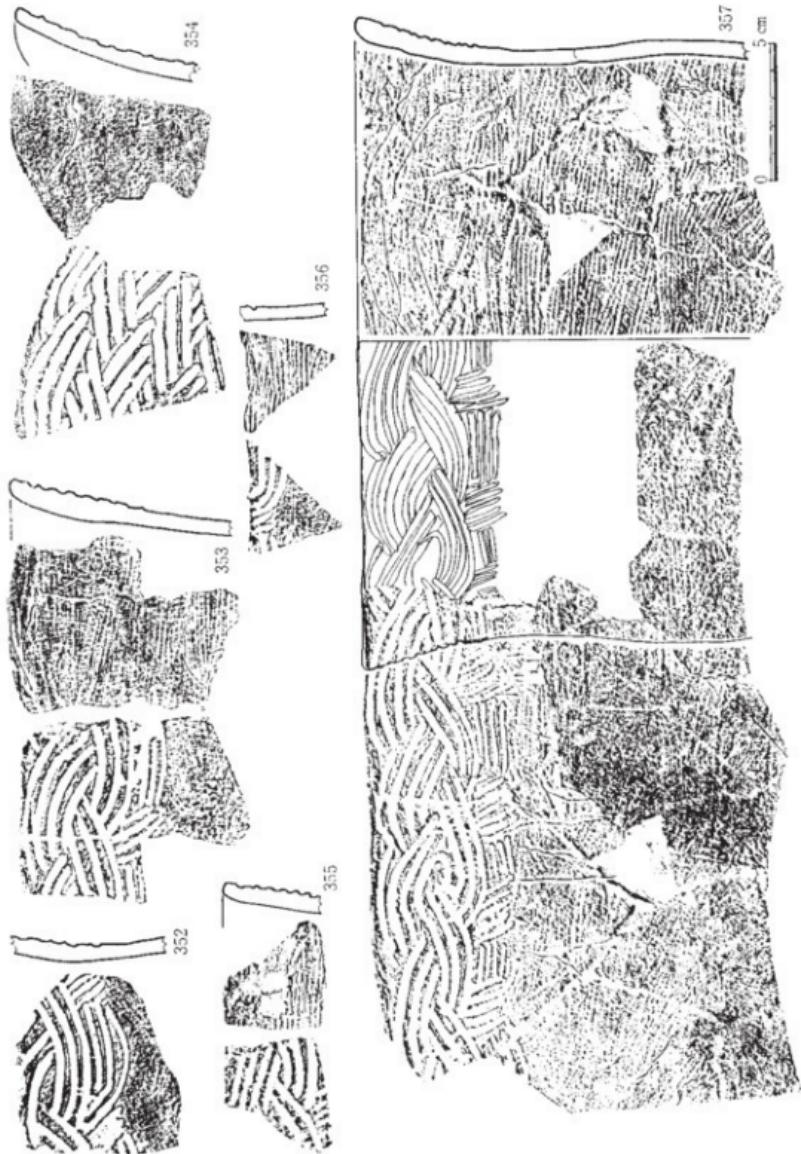
280は間のびした押し引きで、その押さえも浅く、281も同様である。283では深く押さえ込まれているが間のびが大きく、拓影では沈線状にしか見えない。293の工具は半截竹管。300~301は内外面共に施文した特殊な例である。310・311は連続刺突、313も同で先端部が方形の工具を深く刺突している。器形は円筒形を呈し、胴部では縦位の条痕が著しい。



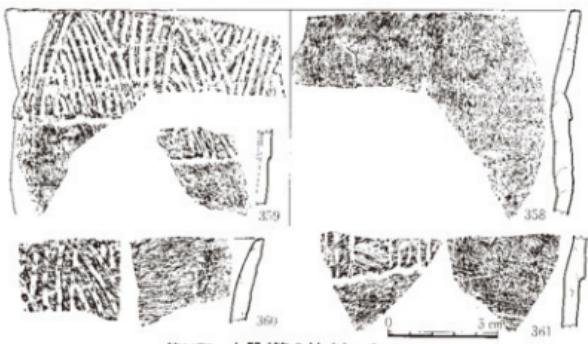
第27図 土器(第3地点)-18



第28圖 土器(第3地點)-19



第29図 土器(第3地点)-20



第30図 土器(第3地点)-21

い。312は薄手で硬質の精製土器である。特殊な器形を呈し、口縁部上面観は方形で最大径は胴部にある。山形口縁の頂部の左右に削りを加え、中心部だけ乳頭状に突起している。なお、相対する山形部は同一の形状をなし、左右の山形部の形状は異なる可能性が高い。314~316、318・319は同一個体の可能性が高い資料で、細い工具で浅い間のび押し引きを施す。326の山形口縁は2ヶ所で抉られ、321、322と同一個体の可能性が高い。328では文様帶の肥厚は見られず、押し引きも極めて浅く、間のびしている。また、内面にも継位の浅い細沈線が描かれ、324と同一個体の可能性が高い。329は1点だけの出土で、深く押し引かれている。336、338は壺形土器の可能性もあるので、口縁部文様帶が意図的に肥厚されている。339、上面観は方形、五段の階段状の山形口縁を呈し、肥厚した文様帶に編籠文状に間のび押し引きを施す。拓影では沈線文に写る。358~361は同一個体で、叉状工具を継位に押し引いている。

#### K類

沈線により規則性のある文様構成をなす一連の土器群で、やや幅の広い工具から細い工具まで用い、編籠文を文様構成の基本とし種々展開されている。

弧状の曲線を施文の主体とするもので、総じて幅広の工具を用い、一部には押し引きの痕跡を留めるものも含む（K a類）。直線化した短沈線でa類同様の文様を構成するもの（K b類）。直線化した短沈線の組み合せにより「く」の字状の文様構成を持つもので、編籠文とはやや距離が感じられる（K c類）。横走する沈線間に「く」の字状の短沈線を組み合せたもの（K d類）に細分する。

K a類 331~334は同一個体と思われるもので、332と334は掲載後接合している。口唇部はいづれも斜めに刻まれ、3本1単位で弧状に描き331の一部には押し引きの痕跡が残される。345と346は復元口径に差があるが、同一個体の可能性が高い。347まで一部に押し引きの痕跡が残されている。348は、凹線が方向転換し屈曲する位置に押し引きの痕跡が残される。また、348の胎土には多量の金雲母が含まれている。350と354は、薄手

で硬質の焼成で規則性のある文様を描き、同一個体の可能性が高い。351では4本1単位で描かれる。357は口縁部が外反する形状をなすもので、3～5本の弧状の凹線で文様を構成している。385～387も同一個体で、上面観は方形を呈す。3本1単位でヘラ状工具をやや寝かせて描いている。

K b類 362, 363はいずれも焼成前に穿孔し、極めて類似した個性を持っている。沈線はやや細くなり、直線化した文様を呈している。371では明確な規格化が見られる。376は一部に押し引きの痕跡を残している。379や381の内面の沈線は明瞭である。383は山形口縁。384の口縁は特徴的である。388, 389は同一個体と思われるもので、3本と4本の単位である。422の穿孔も焼成前に施され、同個体には4個認められる。421や422等では、編籠文が完全に直線化し固定化していることがうかがえる。433は4段のステップを持つ山形口縁で、3～4本単位の構成は見られず、形骸化している様相を示している。571は、31区南壁（断面ベルト）の第4層から出土した小型の深鉢形土器の完全形品であり、本遺跡唯一の完形土器でもある。上面観は方形を呈し、胴部では橢円形、底部ではほぼ円形をなしている。山形口縁で、頂部は抉られ凹面を呈し、口唇部はヘラ状工具で斜めに刻まれる。文様帶は、若干肥厚し、縱、横方向の沈線で文様を構成している。

K c類 406は肥厚した文様帶に沈線で「く」の字状に施したもので、大型の土器である。412, 416も同様の文様構成を持つもので、いずれも大型の土器である。420の外面の文様はc類と同一であるが、類を異にした方が良いかも知れない。440～443は同一個体と思われるもので、上面観は方形の筒形土器である。纖維質の施文具を用いたと思われ、線条痕が残される。444～446では先端部の鋭い工具で、細沈線が施されている。

このc類でも、b類と同様、施文具に多様化が認められる。

K d類 458～464の資料であり、羽状文様の規則性のある構成が見られ、いずれも、器肉は薄く硬質で、直行する器状を呈している。

#### X類

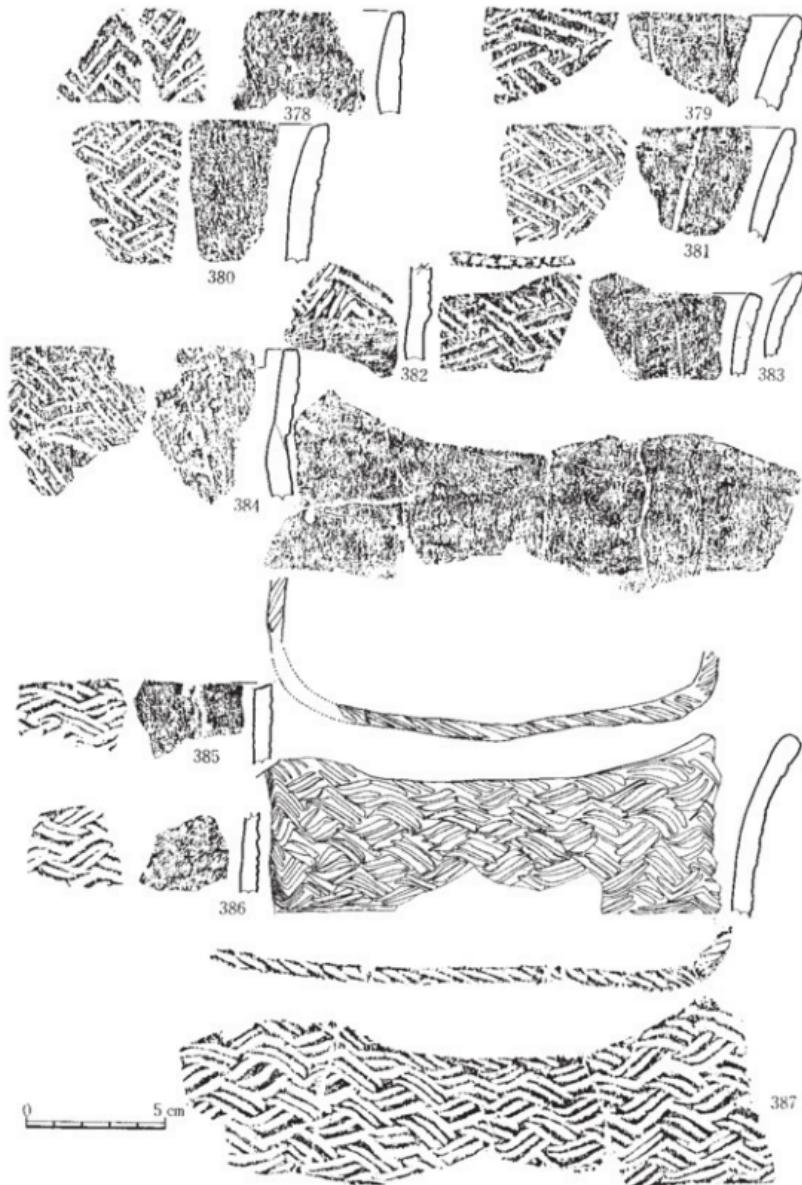
平行する沈線文で構成するもので、肥厚した文様帶に斜行する平行沈線を施すもの（X a類）。横位に平行沈線を施すもの（X b類）。縦位の平行沈線を施すもの（X c類）に細分される。

X a類 467と469, 472の3点で前2点はおそらく同一個体と思われる。口唇部は深い連続刺突が施され、口縁部の文様帶は若干肥厚し、ヘラ状工具で鋭い沈線が描かれる。また、口唇部の一部には瘤状の小突起がつけられる。472は入念にナデ消された後に、施文し、胎土には多量の金雲母が含まれる。

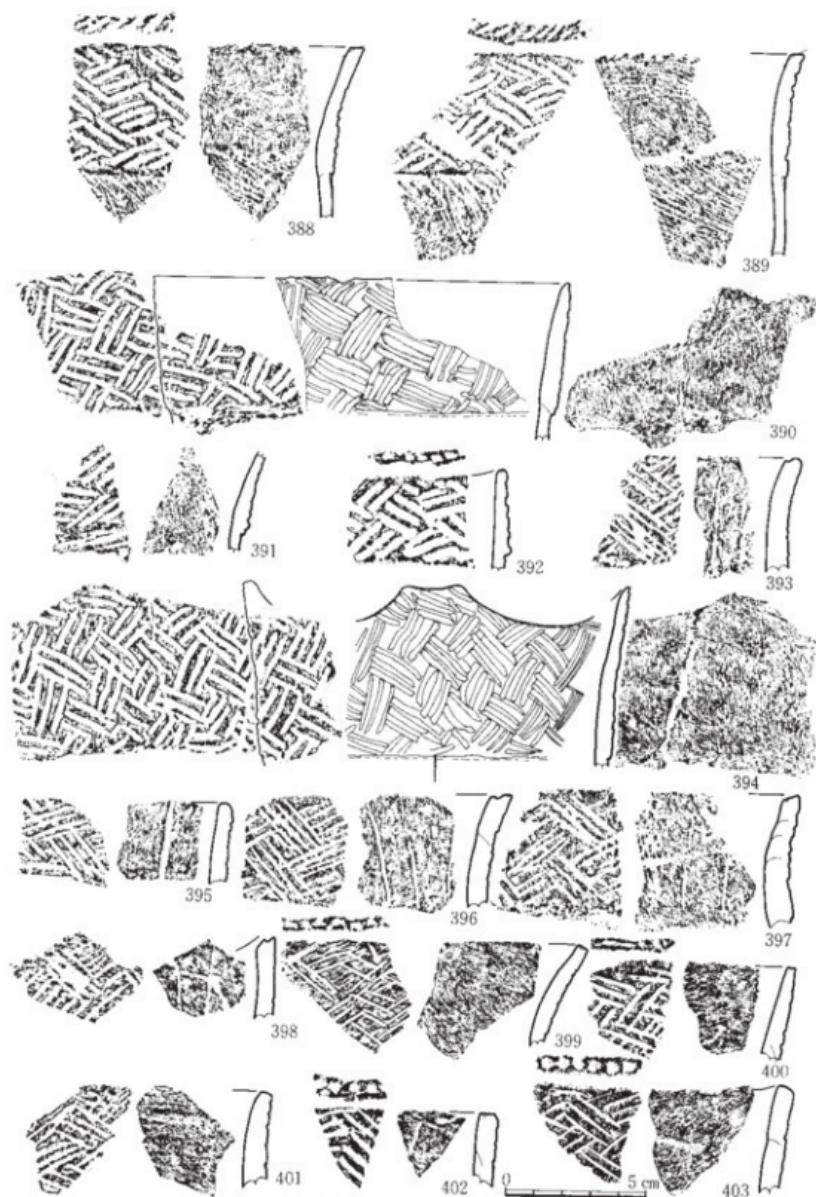
X b類 466は纖維質の施文具を用いたと思われ、線条痕が残されている。470の文様帶は肥厚し、477もその可能性があり、さらに穿孔は焼成前になされている。471, 476は薄手で476は軟質の焼成である。



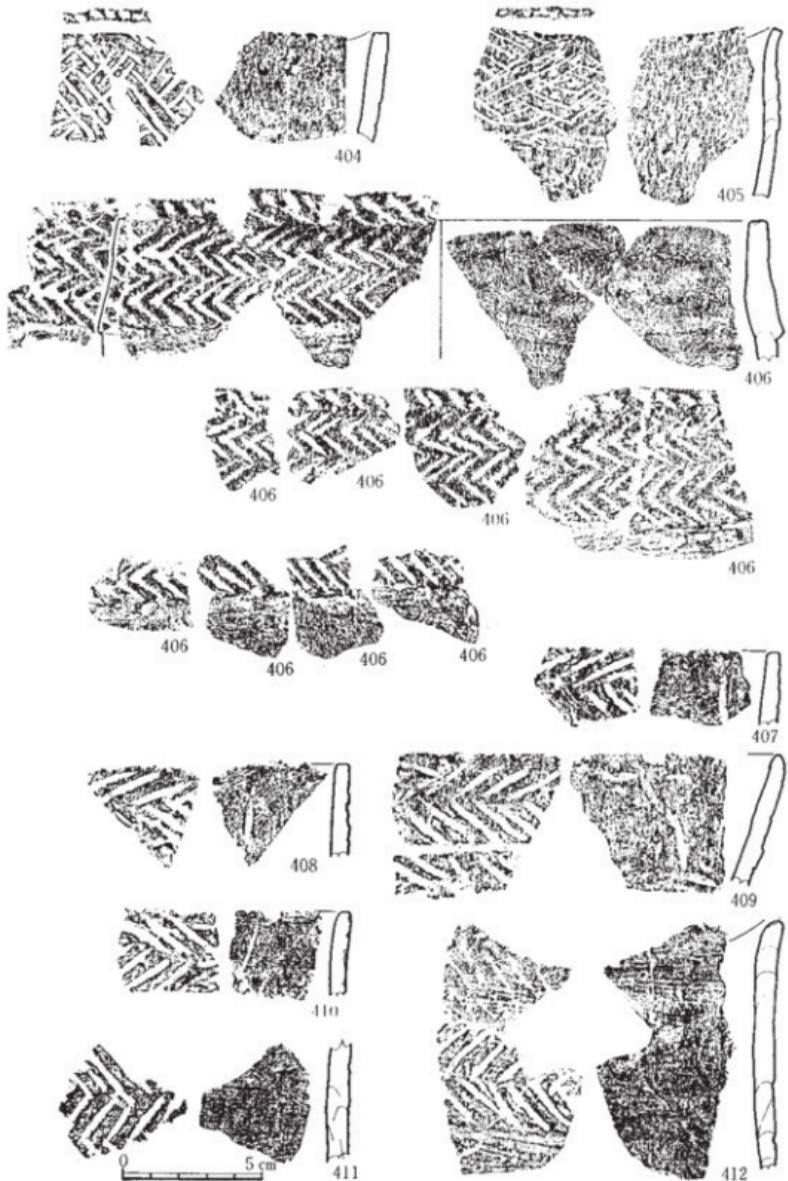
第31図 土器(第3地点)-22



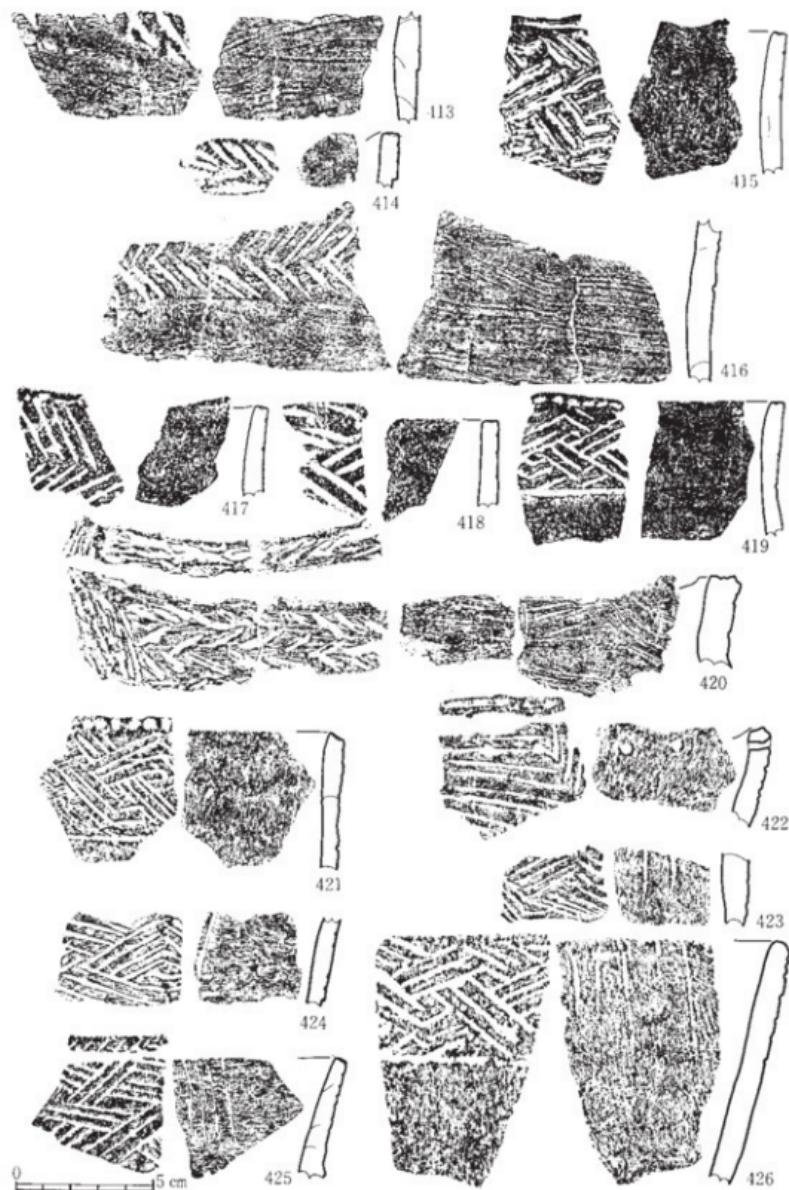
第32図 土器(第3地点)-23



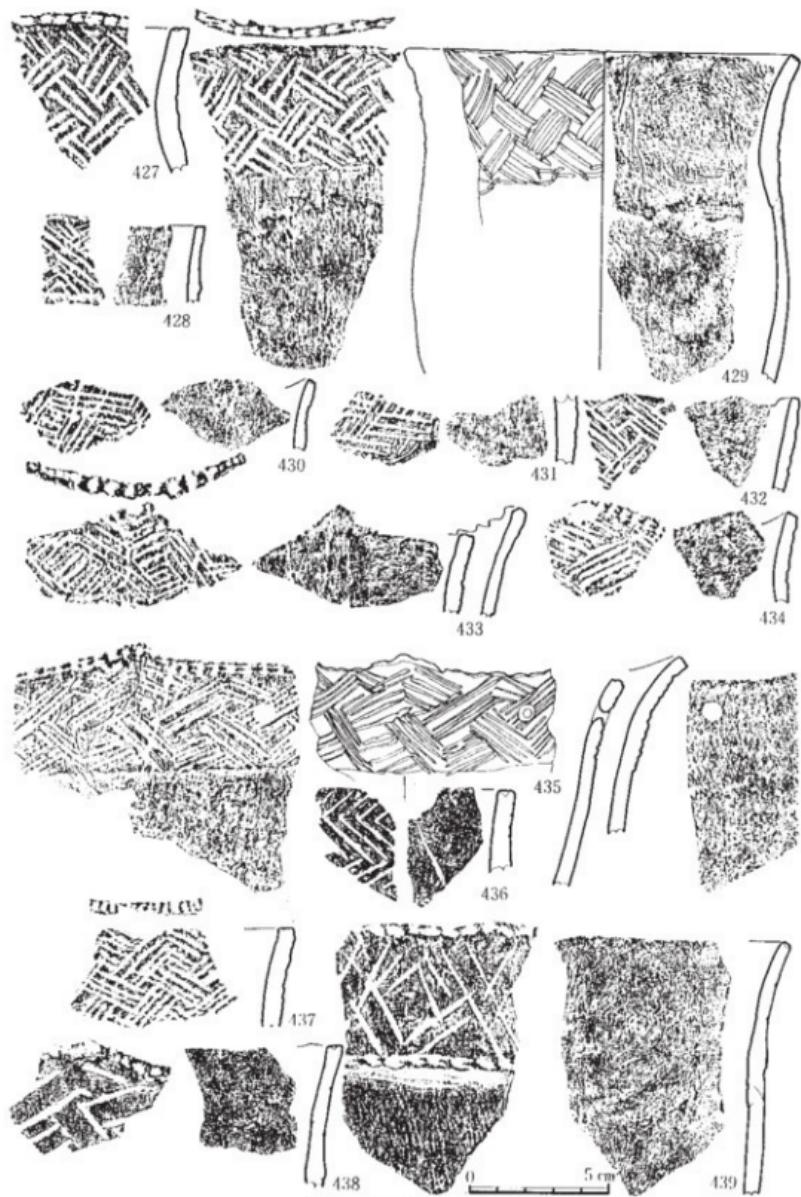
第33図 土器(第3地点)-24



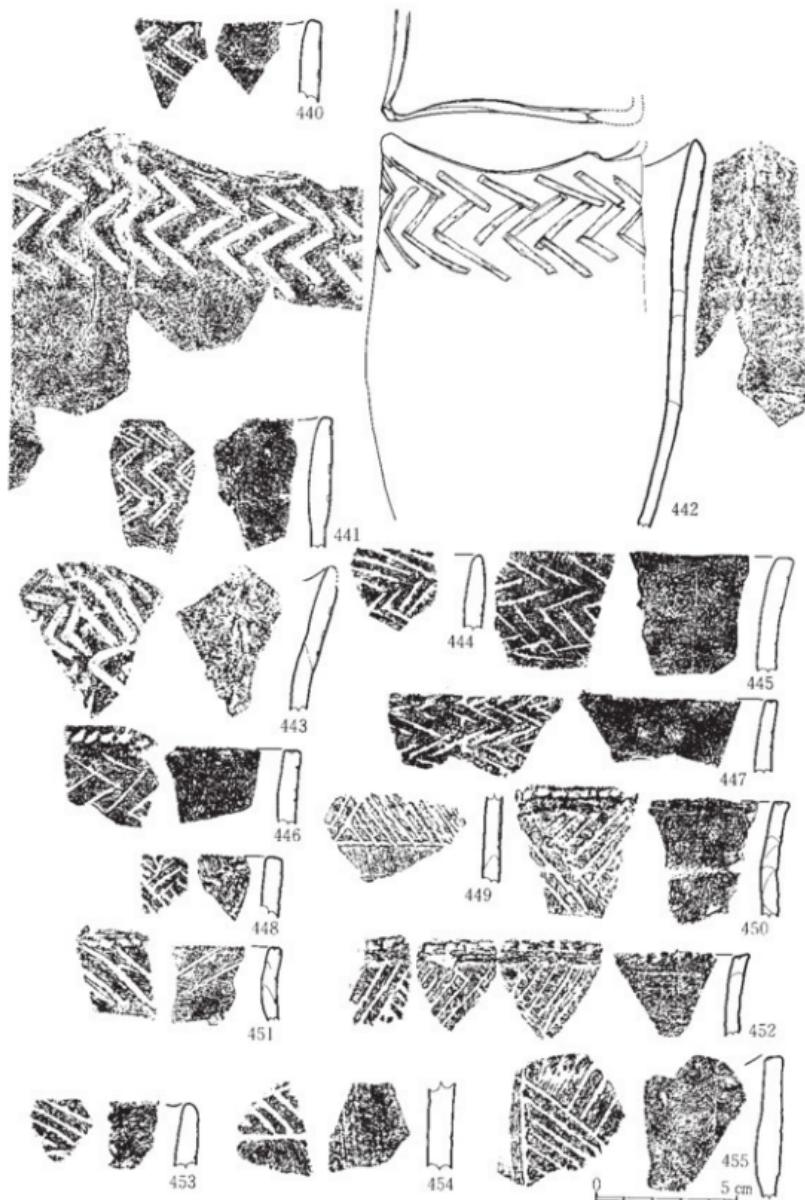
第34図 土器(第3地点)-25



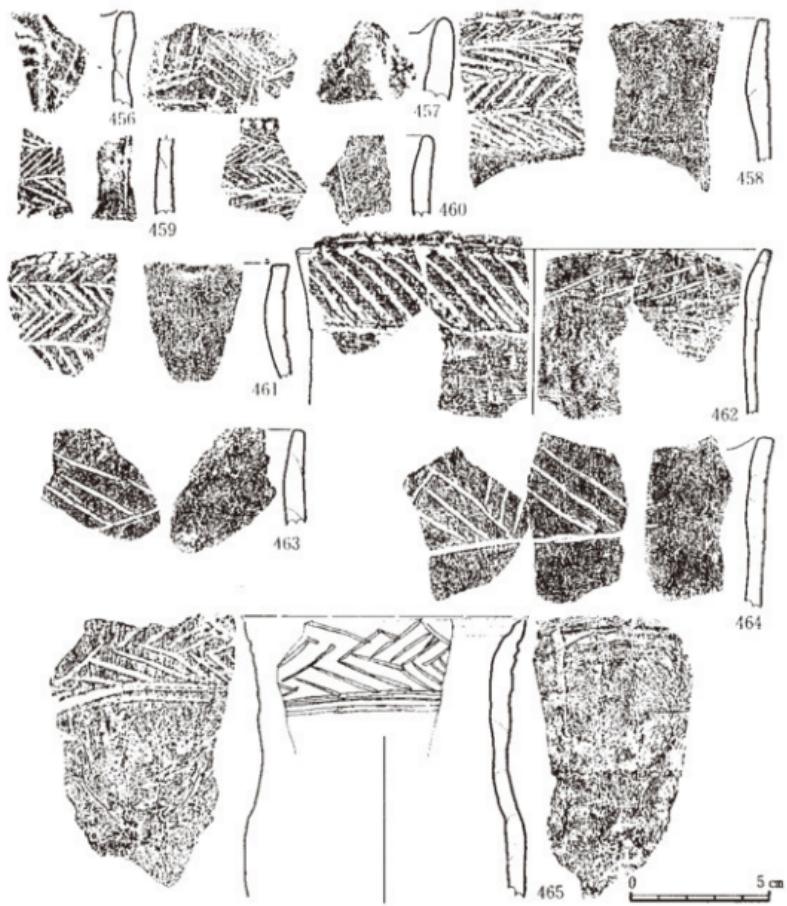
第35図 土器(第3地点)-26



第36図 土器(第3地点)-27



第37図 土器(第3地点)-28



第38図 土器(第3地点)-29

Xc類 478, 479の2点で、同一個体と思われる。476同様、軟質である。器形等は不明で、口縁部は波状を呈するようである。また、口唇部も舌状を呈している。

#### XII類

口縁部文様帯を上段と下段に区分し、口縁端と文様帯下端に同一の施文具により、間のび押し引き及び連続刺突を施したものである。上段と下段を細沈線で結んだものを(XIIa類)、連続刺突で結んだもの(XIIb類)と二分している。

XIIa類 480~482の3点だけである。480と481は同一個体と思われるもので、やや軟質の焼成であるが、薄手の良質な資料である。文様帯はていねいにナデ消され、口唇部に

も連続刺突を施し、山形口縁を呈している。

XII b 類 483 と 485 は同一個体と思われ、器肉は厚く硬質の土器で、口縁部は山形をしている。文様帶は肥厚し、先端部が三角形の工具で押し引き、連続刺突を施している。施文部は、口唇部、文様帶上段と下段、肥厚部の接合部で、さらに、上段と下段を 3 条 1 組の押し引きで連結している。486 も前記と同一の文様構成を持つもので、やや小ぶりの土器片である。施文は、押し引きが消失し連続刺突で行われる。やや軟質の焼成であるが、多量の金雲母を胎土に含み、外面には多量のススが付着している。

#### VII 類

口縁部が山形を呈す鉢形土器で、山形口縁部の直下に縦位の粘土紐を貼り付け、瘤状の隆起帯を持つものである。

VIII 類 478・488 の 2 点だけである。口唇部に連続刺突、隆起帯と器面に縦方向の連続刺突が施され、刺突は上から下へ斜めに深く押されている。文様帶と胴部を区分するための 1.5cm 程の短沈線が間隔を置いて描かれている。

#### XI 類

口縁部は、平口縁と山形口縁をなすものがあり、口縁部がゆるやかに外反する鉢形土器が基本となる。施文は口唇部、口縁下位（文様帶は肥厚するのが一般的で、若干は肥厚しないものもある）が圧倒的で、胴部に鋸歯文様の沈線文を施すものも存在する。文様は沈線文と間のび押し引き文、連続刺突の組み合せで構成される。横、縦、斜め方向に沈線を引き、その間に間のびした押し引きや連続刺突を充填しており、沈線が区画文の役を果たしている。

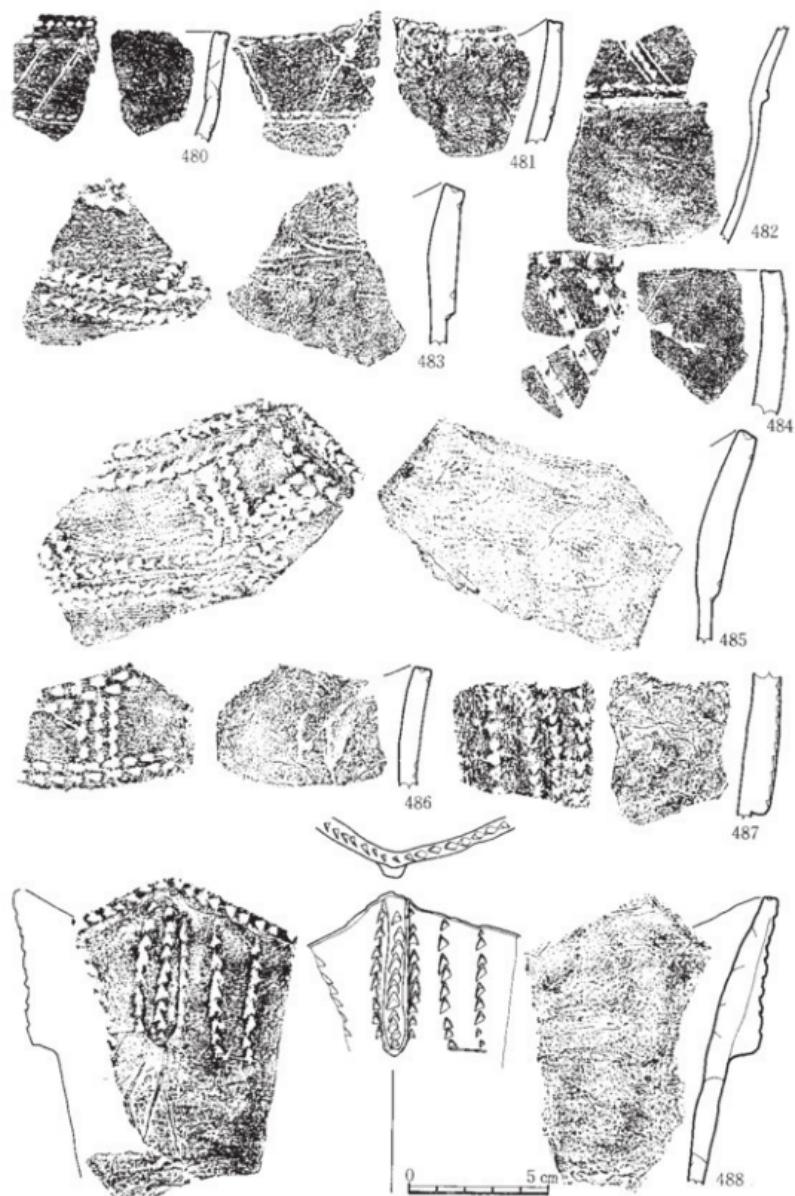
また、内面にも縦位の浅い沈線が描かれているものもある。

押し引きと刺突の施文具は、先端部が鋭く磨かれた三角形・丸形・方形等であり、総じてシャープな文様が見られる。そのため、専用の工具が用意されていた可能性が高い。

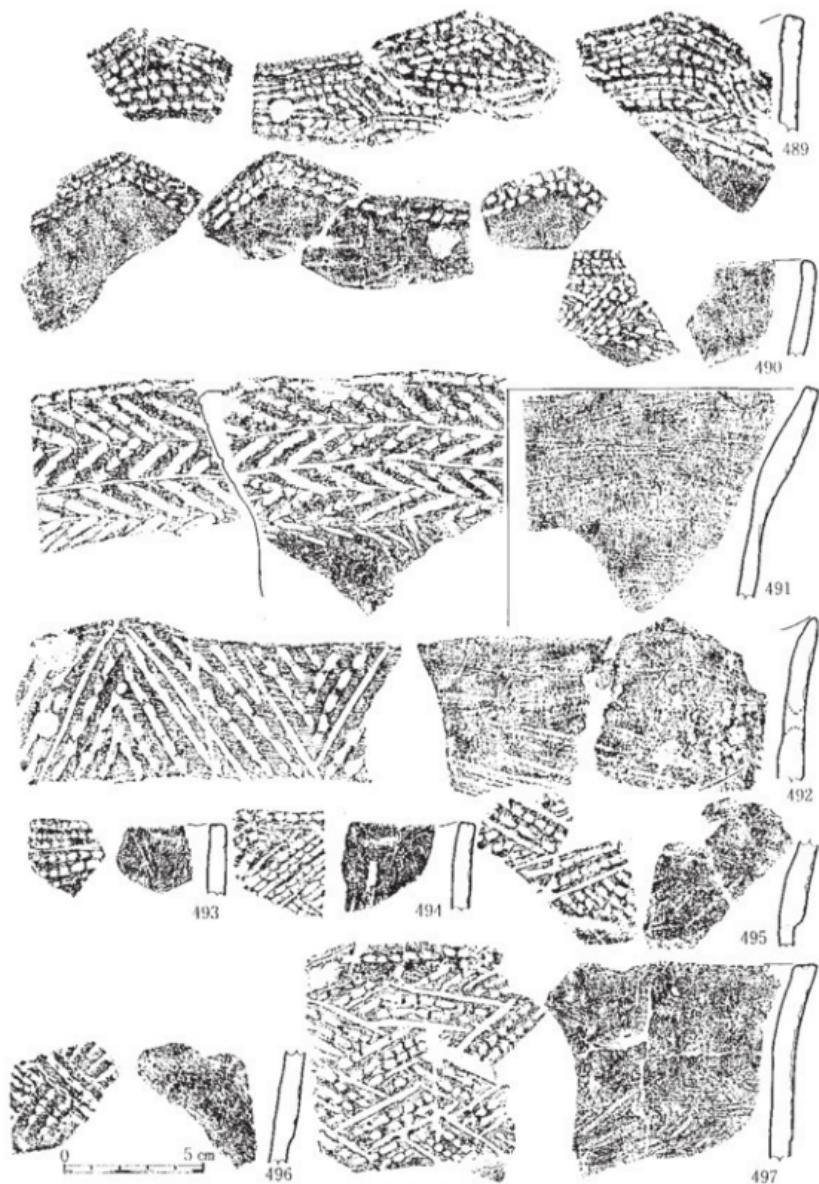
489 山形口縁は段差がつけられる。文様帶のほぼ中央部に横走する細沈線がつけられ、その他部分的（不規則）に短沈線を描き、その間を連続して斜めの刺突で埋めている。内面は、山形頂部で 2 列、その他に 1 列刺突を巡らしている。尚、補修孔は、外から内へ向けて穿っている。490 では、口唇部の頂部、内面端、外面端に 3 列刺突を施している。491 は口縁部がラッパ状に開くもので、他には例はないようである。497 はやや幅広の沈線で入組み文を構成。498 の施文具は、叉状工具。501 の山形口縁頂部は削りにより抉る。504 の口唇部の瘤状突起にも刺突がつけられ、薄手で硬質な仕上がりである。505 は細沈線により複合鋸歯文が描かれ、その後間のび押し引きがつけられる。510 の口唇部は平坦。512 は 8 号集石遺構内に出土し、胴部下半は失われていた。口縁部は、相対するものどうしが同一の形状を持ち、頂部は削り出しによりアクセントをつける。514 は大型土器で、ステップのある山形口縁を持ち、先端部の鋭い工具で施文している。515 は焼成前に穿孔を行



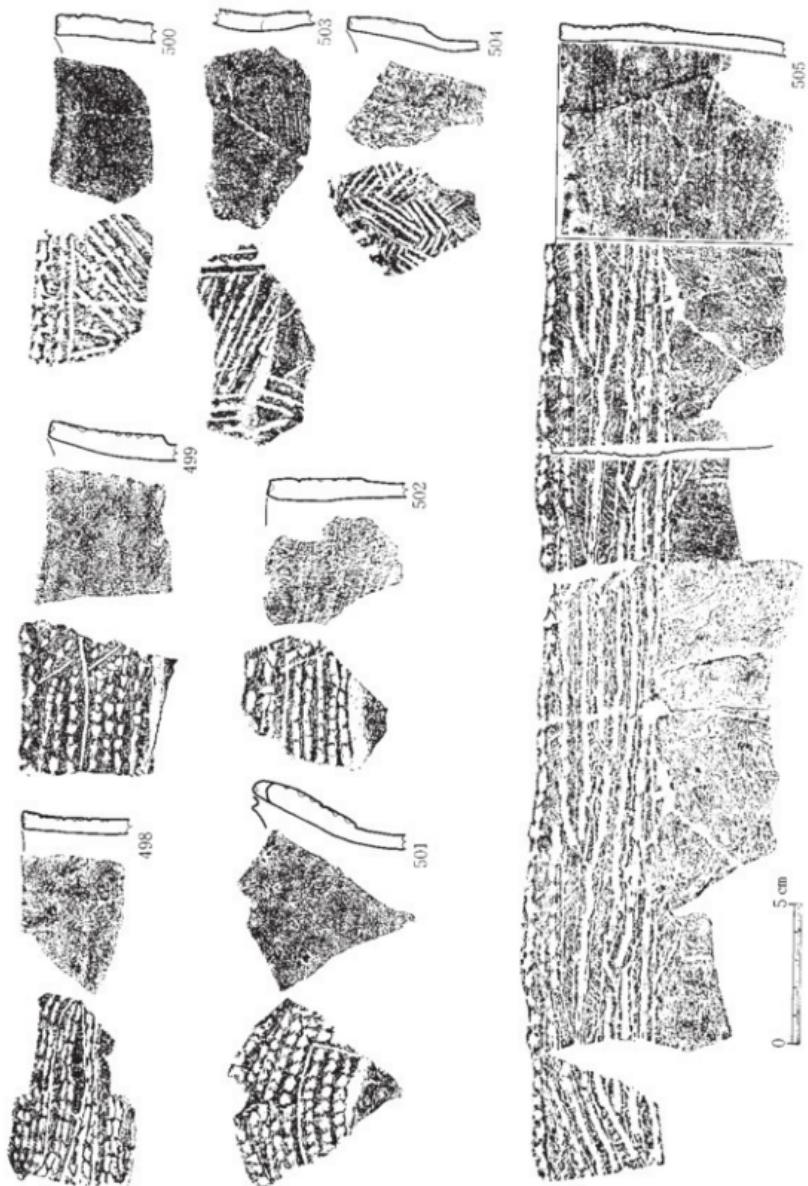
第39図 土器(第3地点)-30



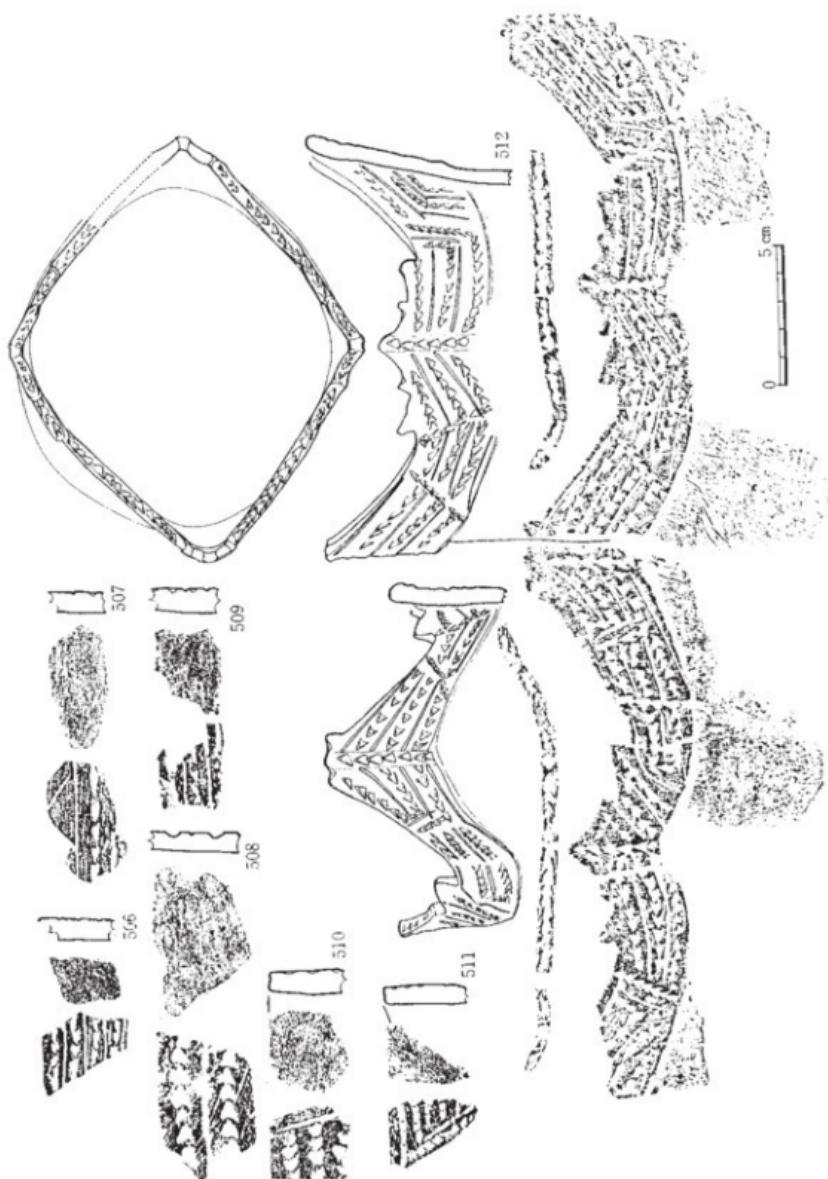
第40圖 土器(第3地点)-31



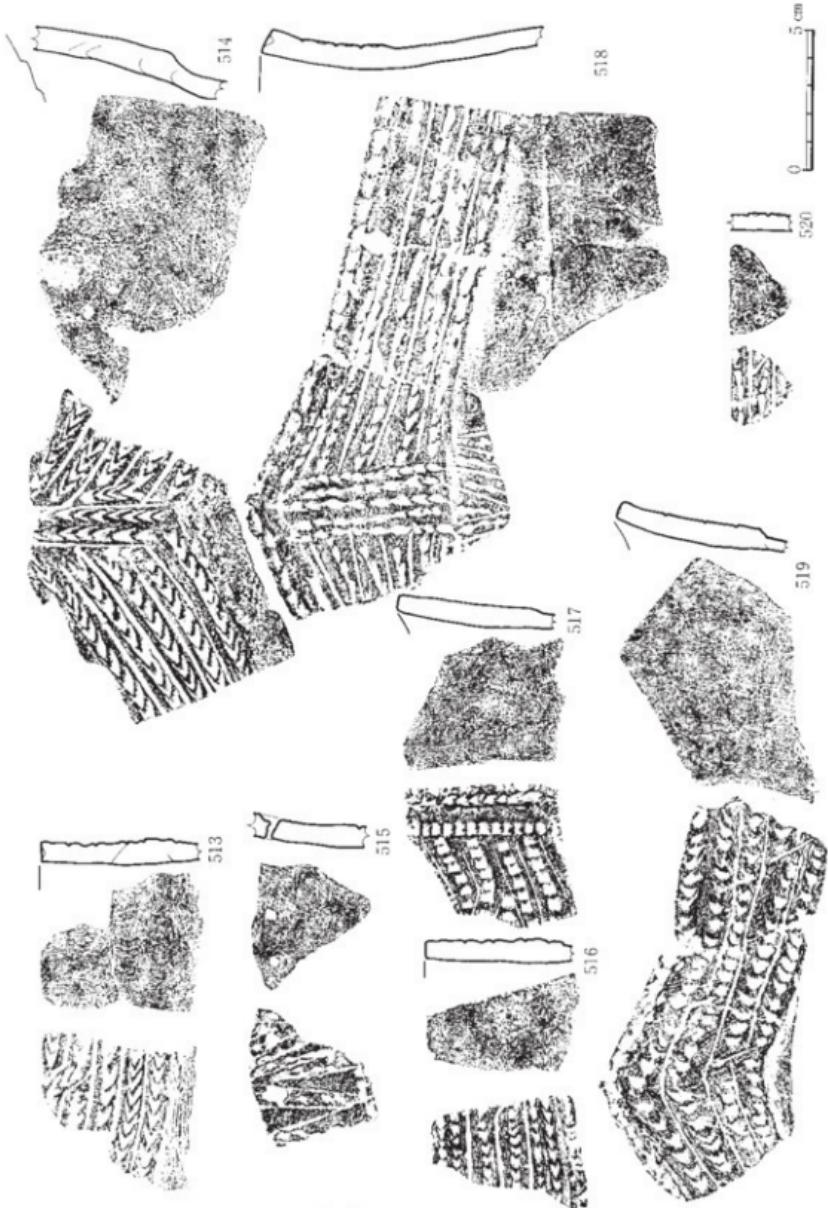
第41図 土器(第3地点)-32



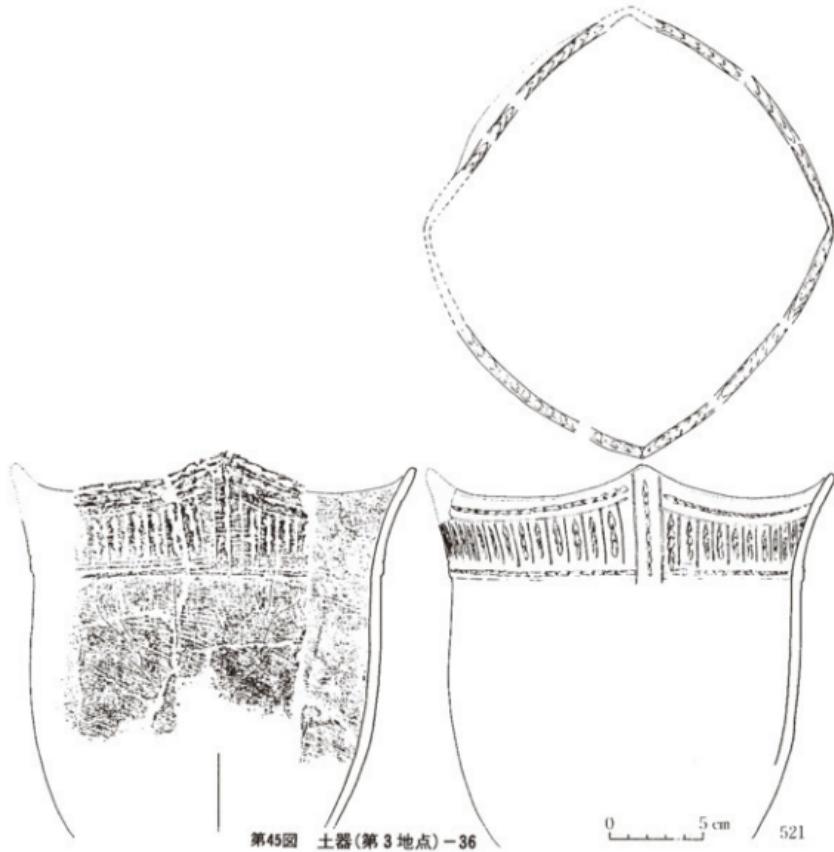
第42図 土器(第3地点)-33



第43図 土器(第3地点)-34



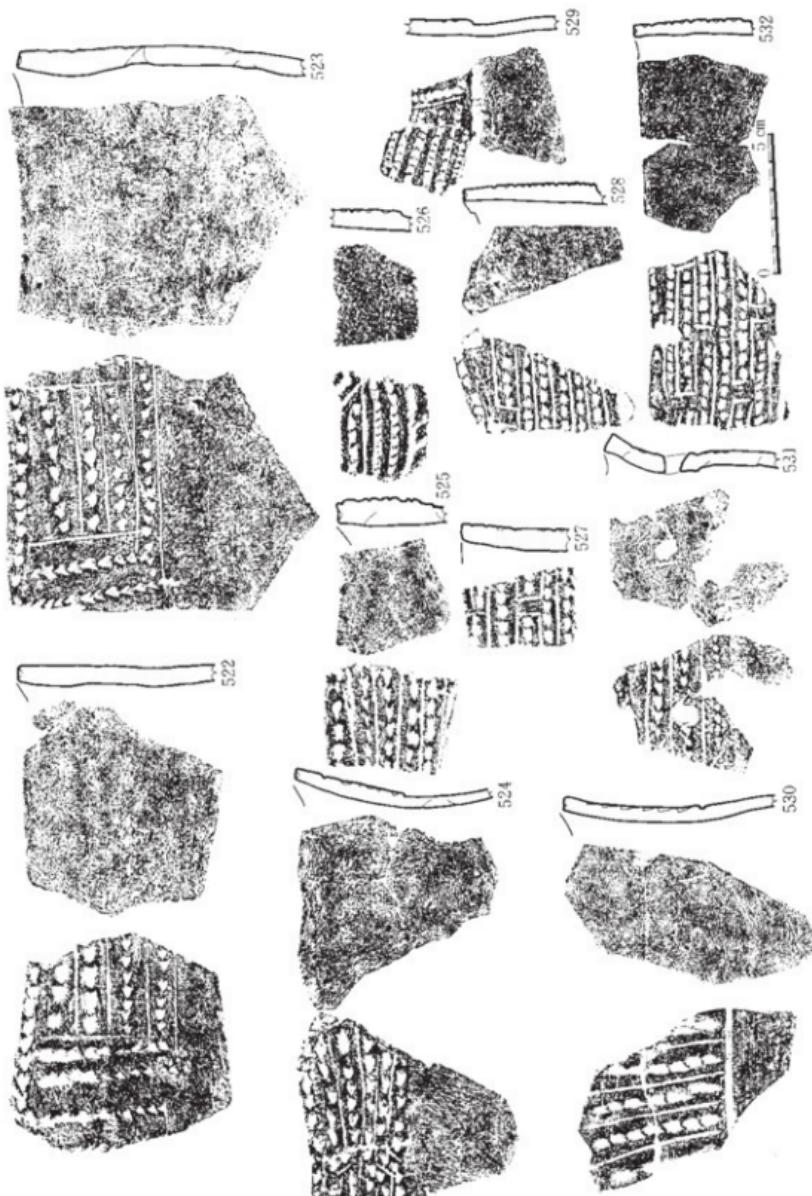
第44图 土器(第3地点)-35



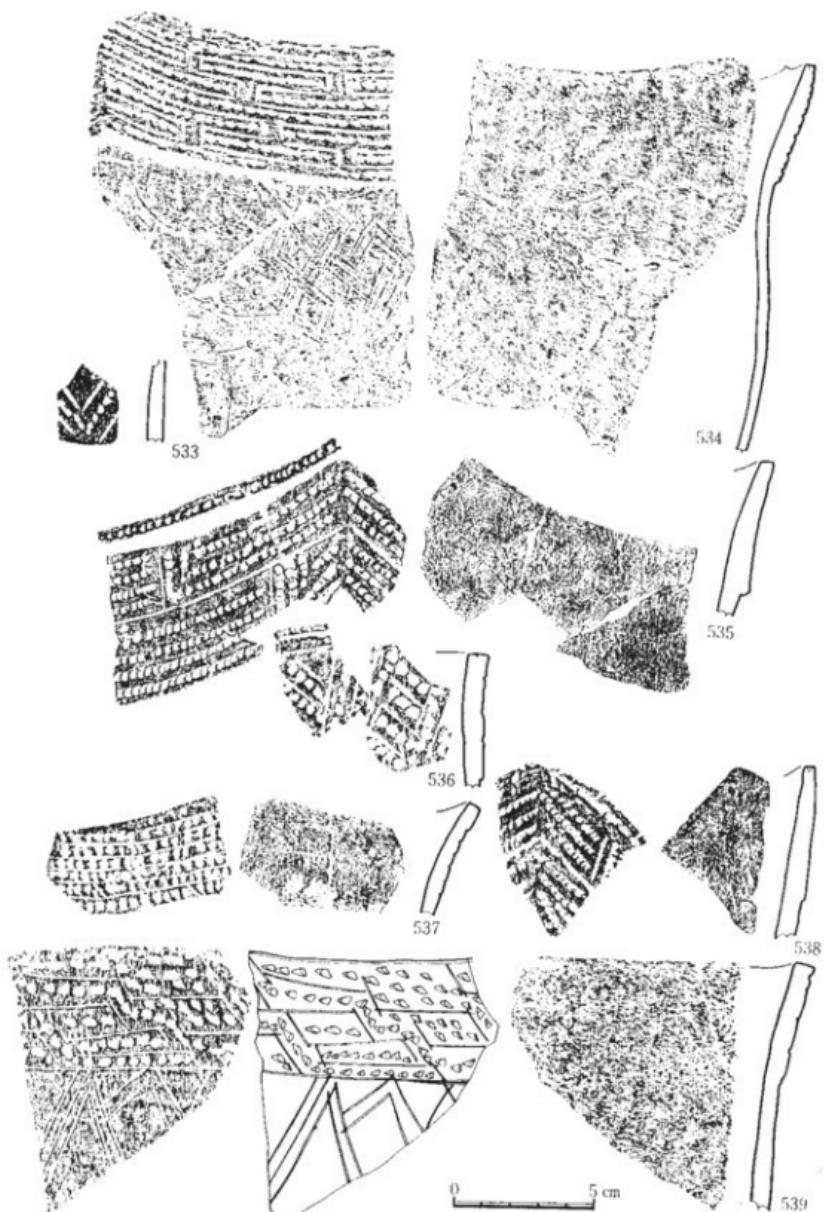
第45図 土器(第3地点)-36

なっている。518はZ-32区の14号集石遺構に伴った大型土器である。山形口縁を持ち、頂部直下の胸部にも同構成の施文を行っている。文様帶は、わずかに肥厚するだけである。517は刺突の部位により工具を変えている。

521も14号集石遺構に伴ったもので、文様は縦位の構成である。522・523は文様帶は肥厚しない。530も縦位に文様構成し、口唇部は沈線を巡らす。534の胸部施文は、下描きした後に描き出している。砂粒が多く含まれ、硬質でザラザラした器面をなしている。540、山形口縁を持ち、先端部方形の工具で縦位に間のび押し引きを施す。胸部は4本の平行線文で釣手状文を描く。542は壺形土器の可能性のある形状を呈している。548は、横走する沈線間に間のび押し引きを浅く施すが、途中で方向を変えている。この方向転換は、編籠文との関わりが区画文との関わりか不明であるが注目される。557の連続刺突は一定方向に行わず、動作の変化が見られる。560の工具は先端部が方形で、綿条痕が明瞭に残る。また、押し引きも間のびが大きく、若干異質の様相を呈している。570は、14号



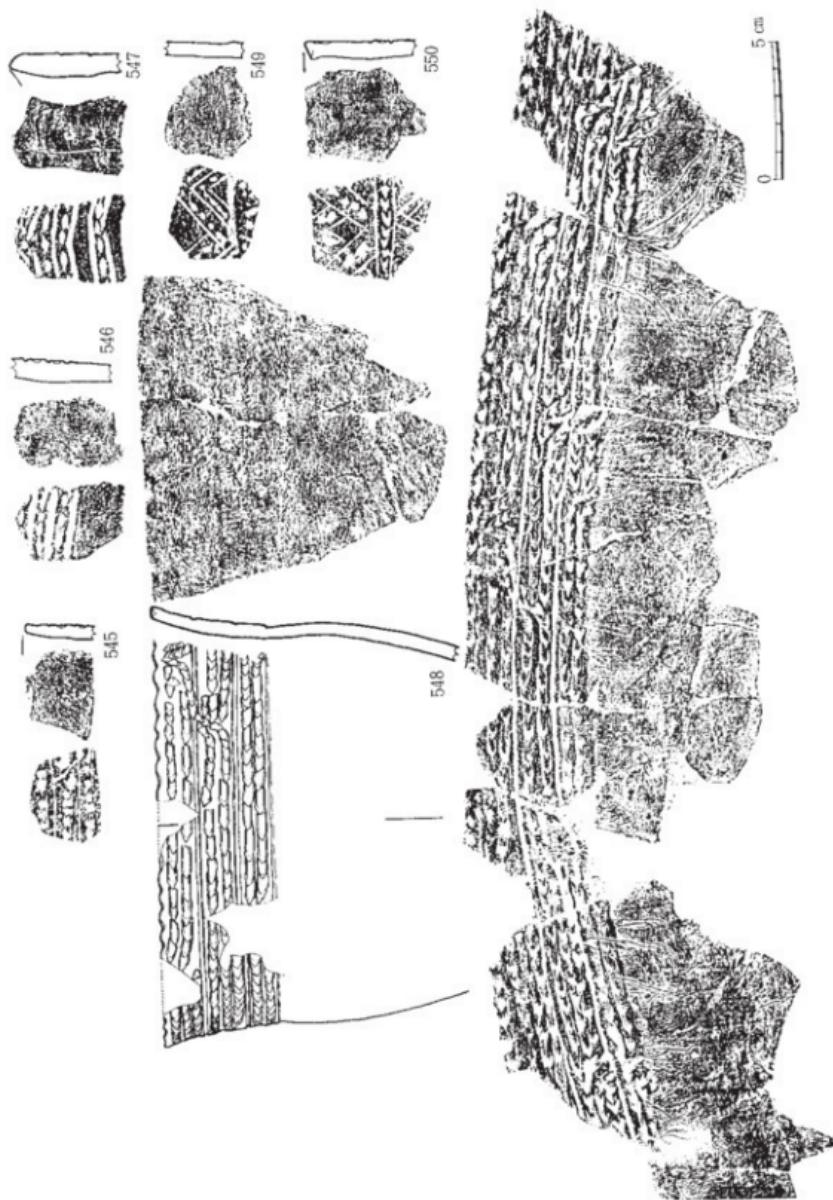
第46圖 土器(第3地点)-37



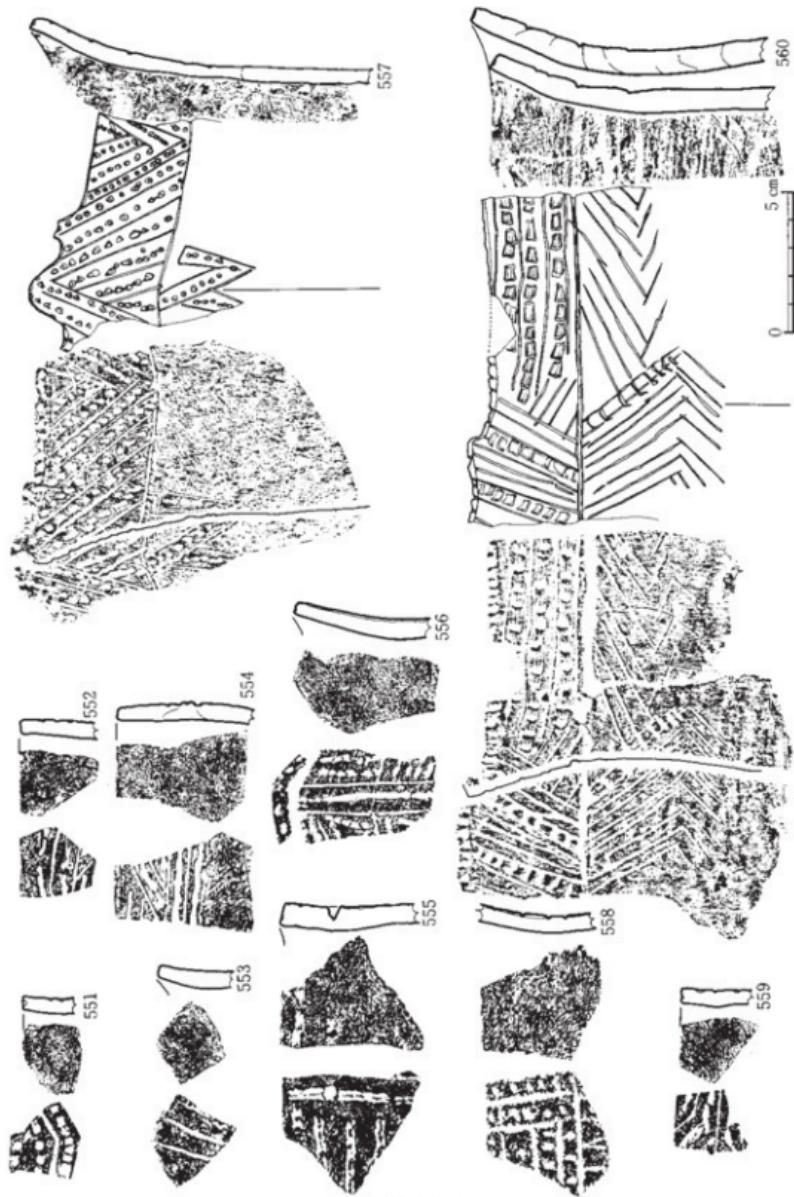
第47図 土器(第3地点)-38



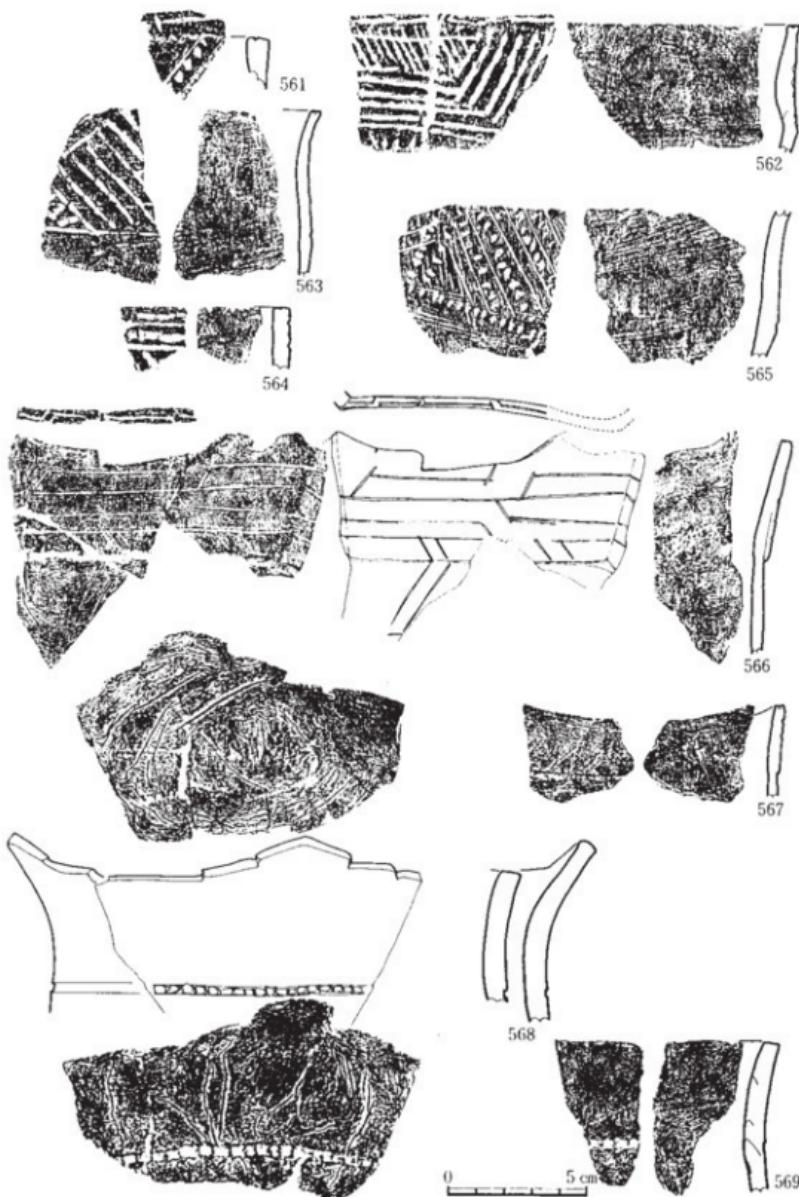
第48図 土器(第3地点)-39



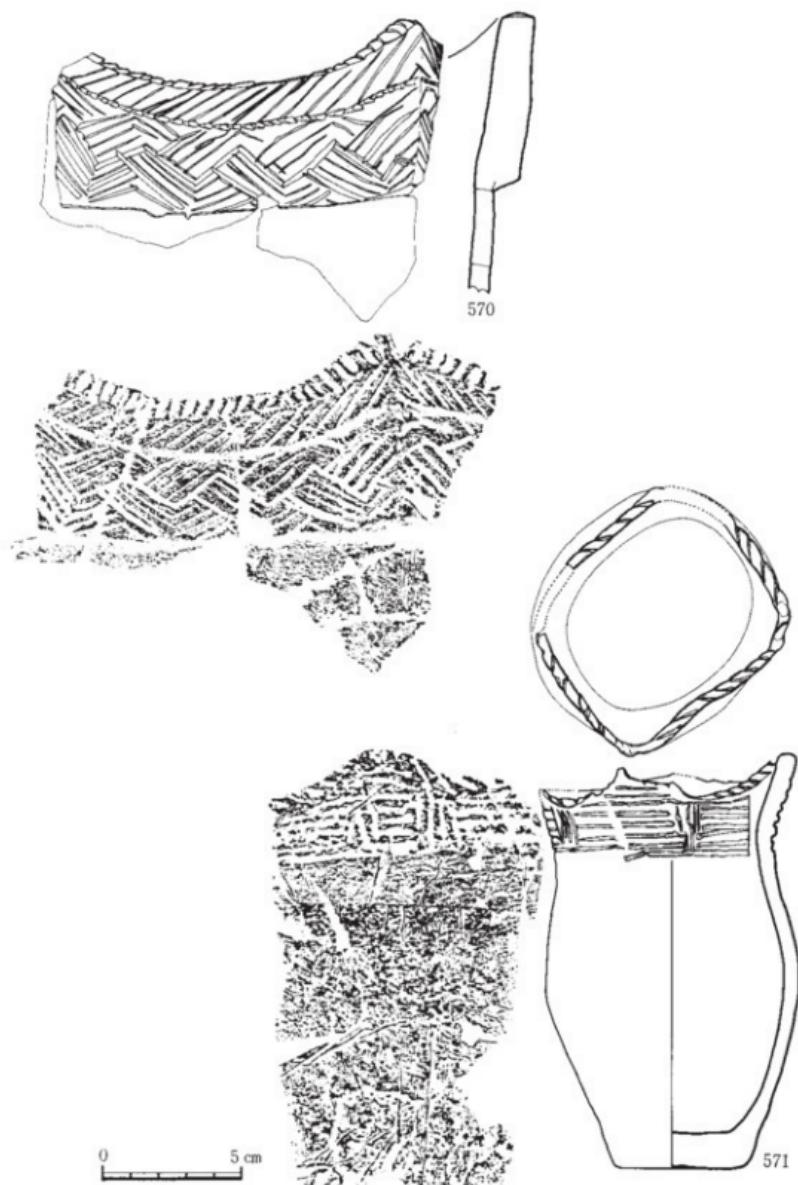
第49図 土器(第3地点)-40



第50圖 土器(第3地点)-41



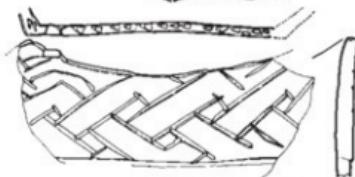
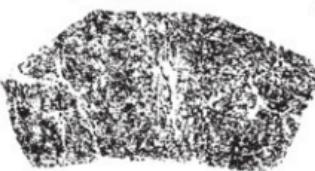
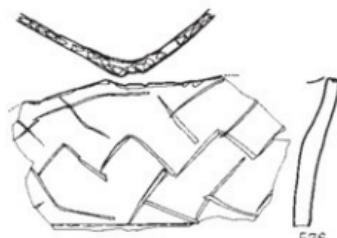
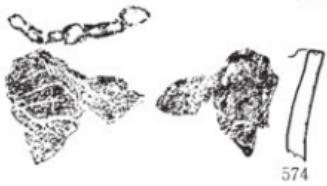
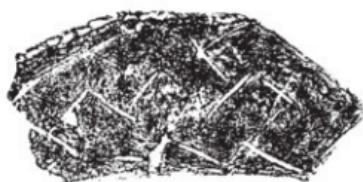
第51図 土器(第3地点)-42



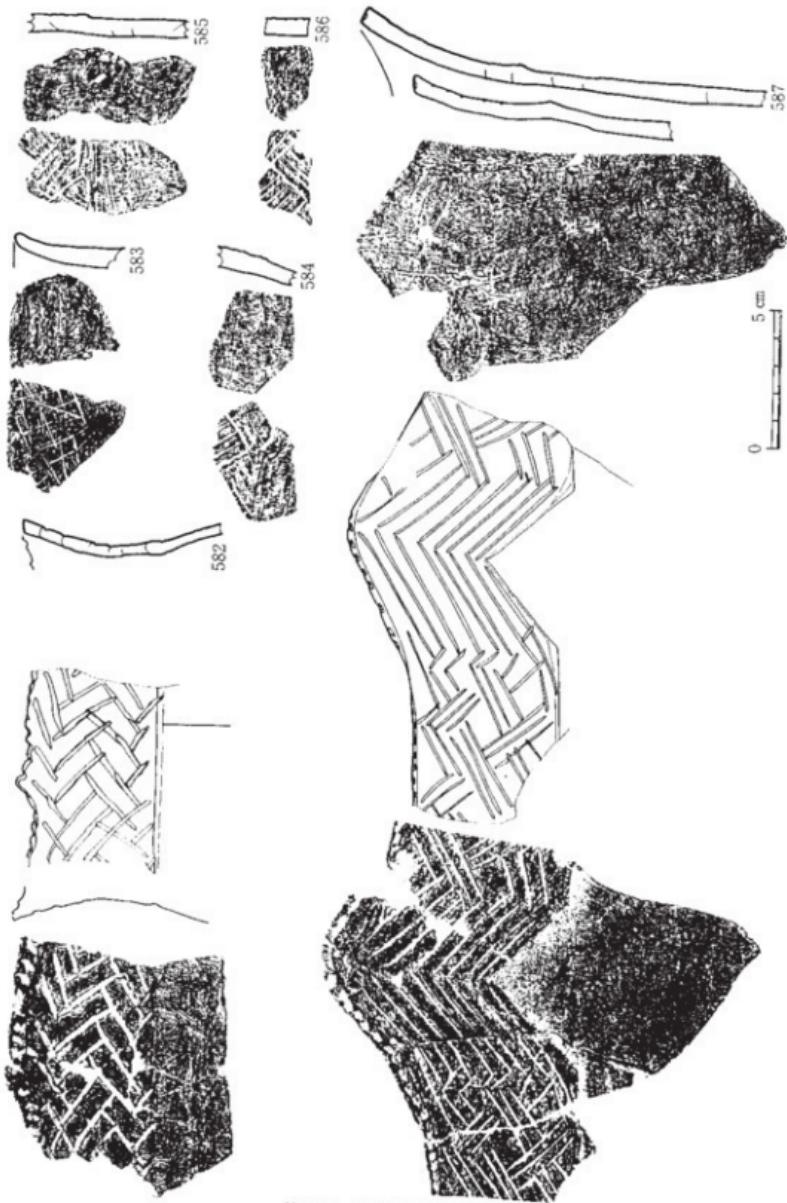
第52図 土器(第3地点)-43



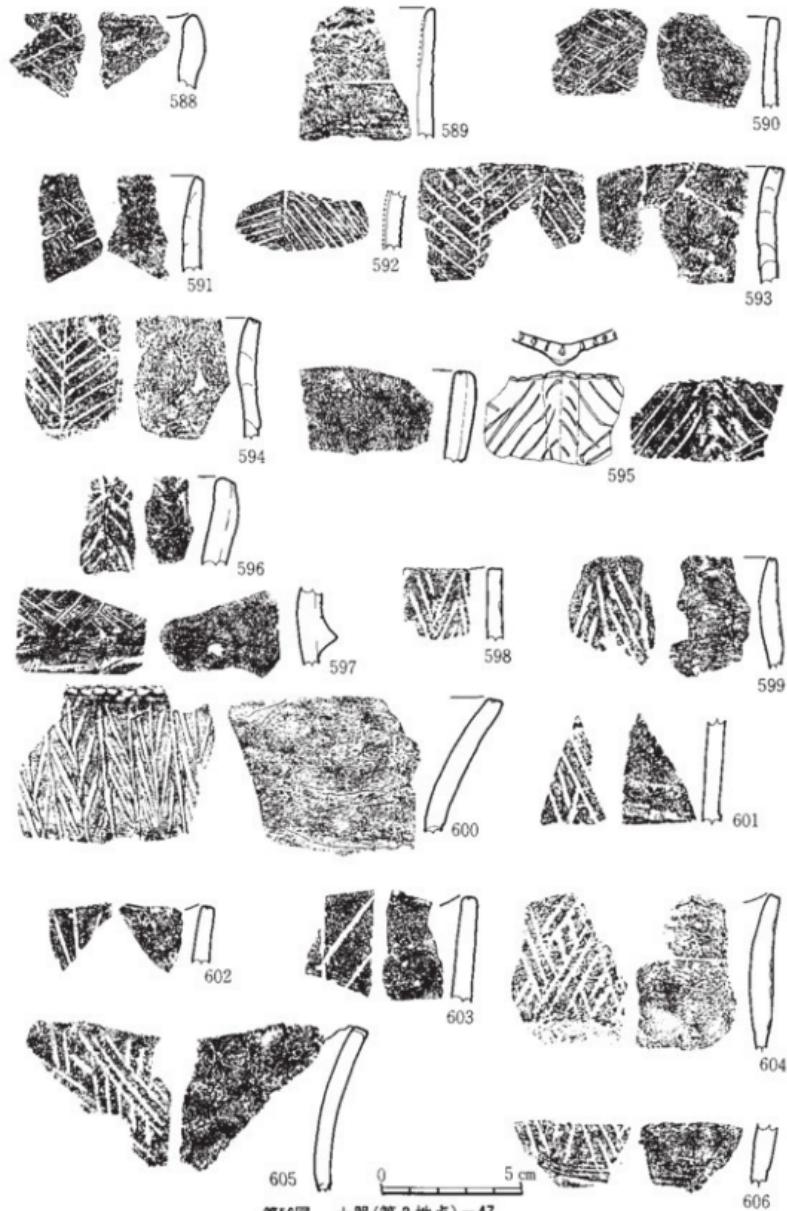
第53圖 土器(第3地点)-44



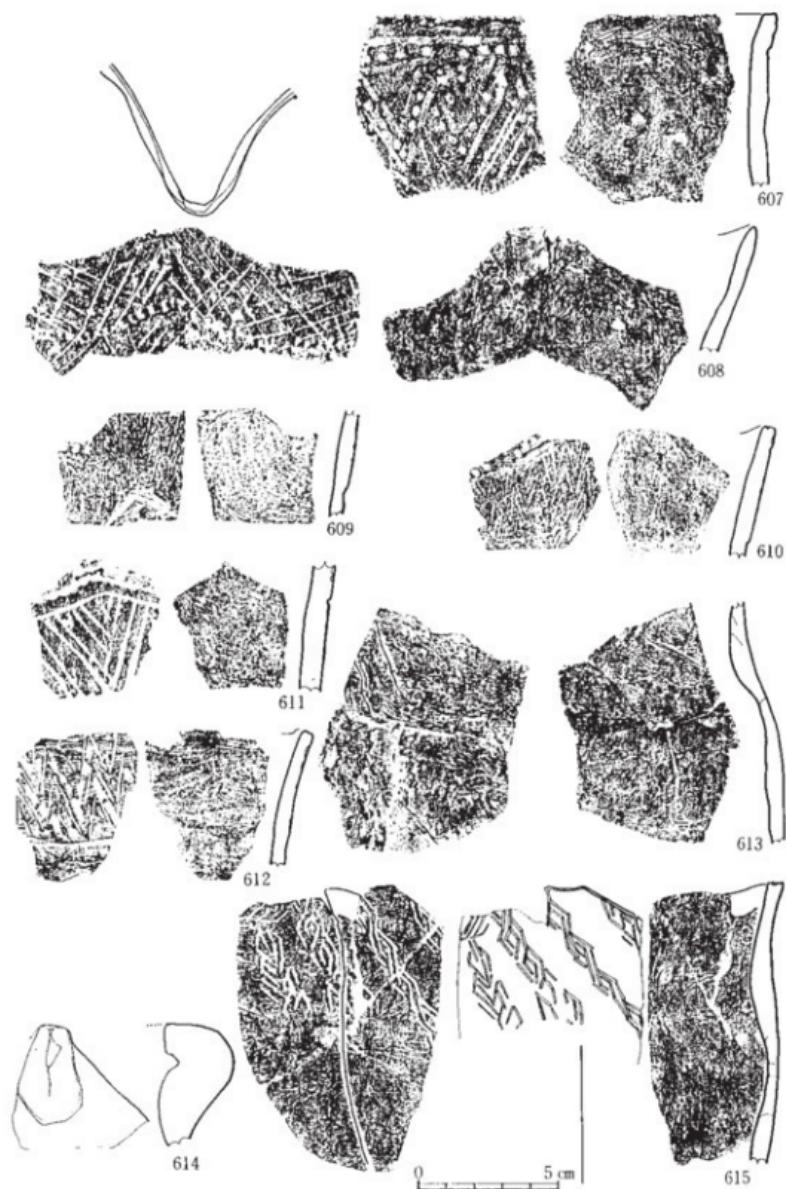
第54図 土器(第3地点)-45



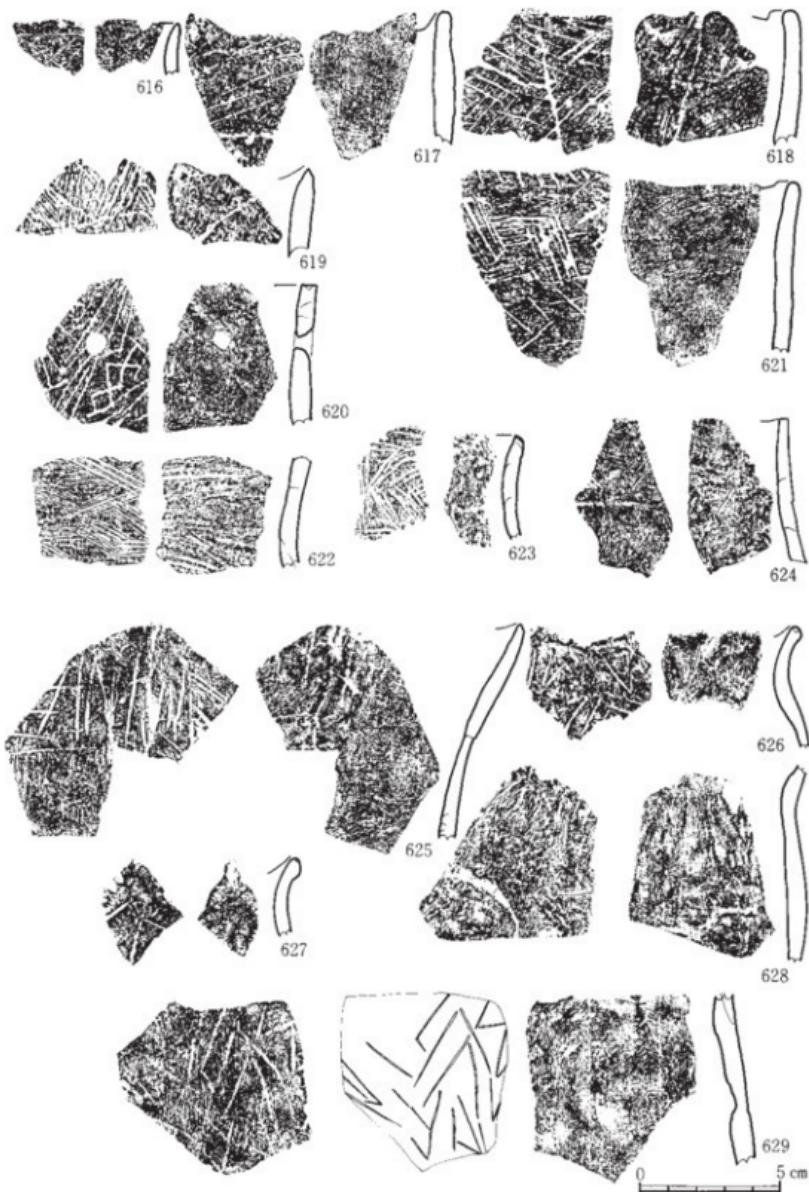
第55図 土器(第3地点)-46



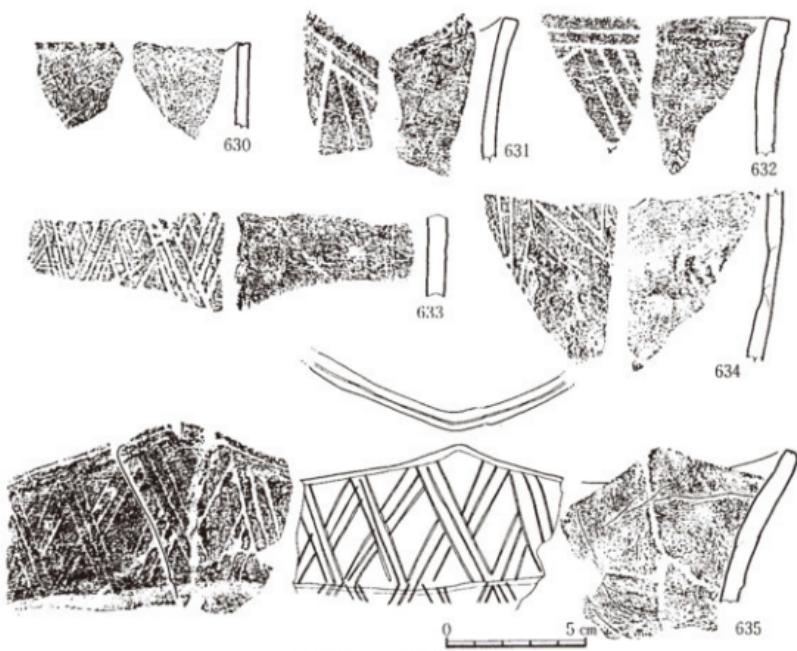
第56圖 土器(第3地点)-47



第57図 土器(第3地点)-48



第58図 土器(第3地点)-49



第59図 土器(第3地点)-50

集石遺構に共併したもので、山形口縁を持ち、上面観は方形を呈す鉢形土器である。他に、同一個体を示す資料は無く、破棄された資料の感が強い。口縁直下に、間のび押し引きが1条横走し、下位はやや太め沈線で区画を行い、その間を細沈線で充填している。コーナー部は、特に肥厚させる。572、10号集石遺構に貼り付いた状態で、内面を上位に出土している。文様帶が若干肥厚し、突起した状態の山形口縁を呈し、口唇部には連続刺突が全周に施される。文様帶に描かれる連続刺突文は、山形口縁の直下にだけ見られ、縦位の沈線間に施されている。山形口縁部を境に文様帶は4区分され、その内の3つが残されているが、各々が独立し、別々の文様を構成する。

#### X N類

文様帶がシンプルに強調された一群の土器で、細沈線、間のび押し引き、連続刺突などが独立して文様を構成している。沈線で区画文を描くもの(X N a類)と文様帶は形成されるが施文しないもの(X N b類)に分ける。

X N a類 556、文様帶は肥厚し、ステップのある山形口縁を持つ。文様帶は、入念にナデ消され、細沈線で鋭く区画文が描かれている。器肉は薄く、硬質の土器である。567の口唇部は連続刺突が施され、文様帶は、鋭い細沈線が描かれる。556同様、薄手の硬質

の仕上がりである。573と576は、編集後接合している。薄手で硬質の土器であるが、砂粒を多く含み器面は粗くザラザラしている。口唇部は、間び押しづきが施され、内面には、縦位の浅い沈線が描かれている。575の口唇部は、ヘラ状工具で斜めに刻まれる。581は、566と同様ステップのある山形口縁部を持ち、口唇部は連続刺突を施し、内面には縦位の沈線が描かれる。

X N b 類 568と569の2点で、文様帶は意図的につくり出しているが、施文は行われず無文のままである。口唇部も施文されず、ヘラによる削り出しで作出している。

#### X K 類

734・735の2点は、厚手の壺形土器で、口縁部は大きく外反し「く」の字状を呈したもので、内面にはヘラ削りがなされている。733は、この類に含めているが、上記2点とは若干異なり、再考を要すると思われる。

#### X X 類

内面が黒色に研磨された、いわゆる内黒土器で2点だけの検出である。2点とも、良質できめの細かい粘土を用い、内面はヘラ研磨により光沢のある黒色を呈している。移入土器の可能性が高いと思われる。

#### X XI 類

類須恵器で、カムイヤキ窯系のものと思われる。

738～740等の内面は格子目タタキの後ナデられ、742では大き目の平行タタキが認められる。外面では、小さめの平行タタキが施された後、ナデによる仕上げが施されている。739の内外面は、ロクロによるていねいなナデで仕上げられている。

X XII 類土器は、長浜金久第I遺跡や泉川遺跡で、兼久式土器との共伴関係が認められ、また、X X 類土器の黒色研磨（内黒土器）も、長浜金久第I遺跡で同様に出土しており、兼久式土器の下限を知るうえで重要視されている。

#### その他（特殊把手状）

639は、桶状把手を持つもので、把手に3本の縦位の沈線と綾杉状の沈線が施される。また、屈曲部と胴部最上位には、半截竹管による刻み目を持つ突帯が巡らされている。これらの特徴から判断するとN類土器に近いと言える。

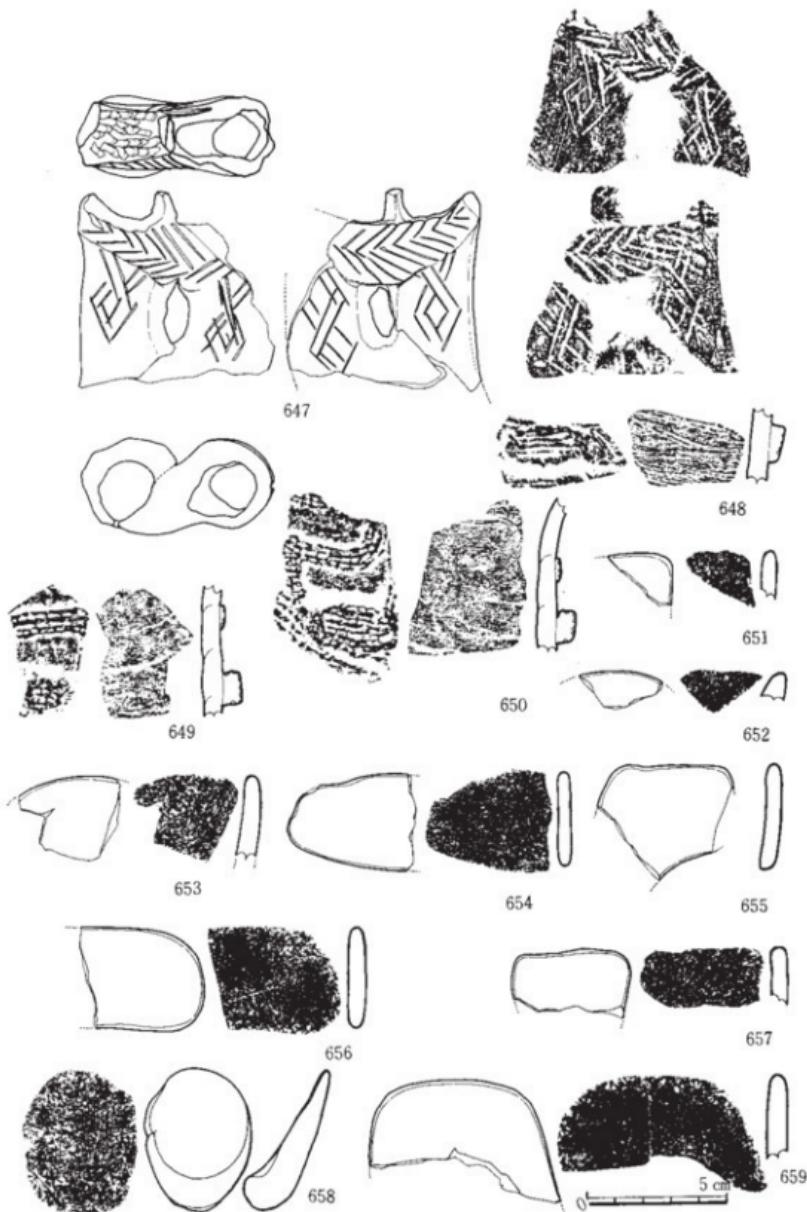
645は、人面を模した把手と思われるもので、器種は壺形土器の可能性が高い。“目”と思われる部分は、斜めに細長く穿ち、押し引きにより区画文を描いている。

646は、獸面の把手で、対象は猪かと思われる。粘土ひもを貼り付け、連続刺突により施文している。目と思われる部分は、焼成前に穿っている。

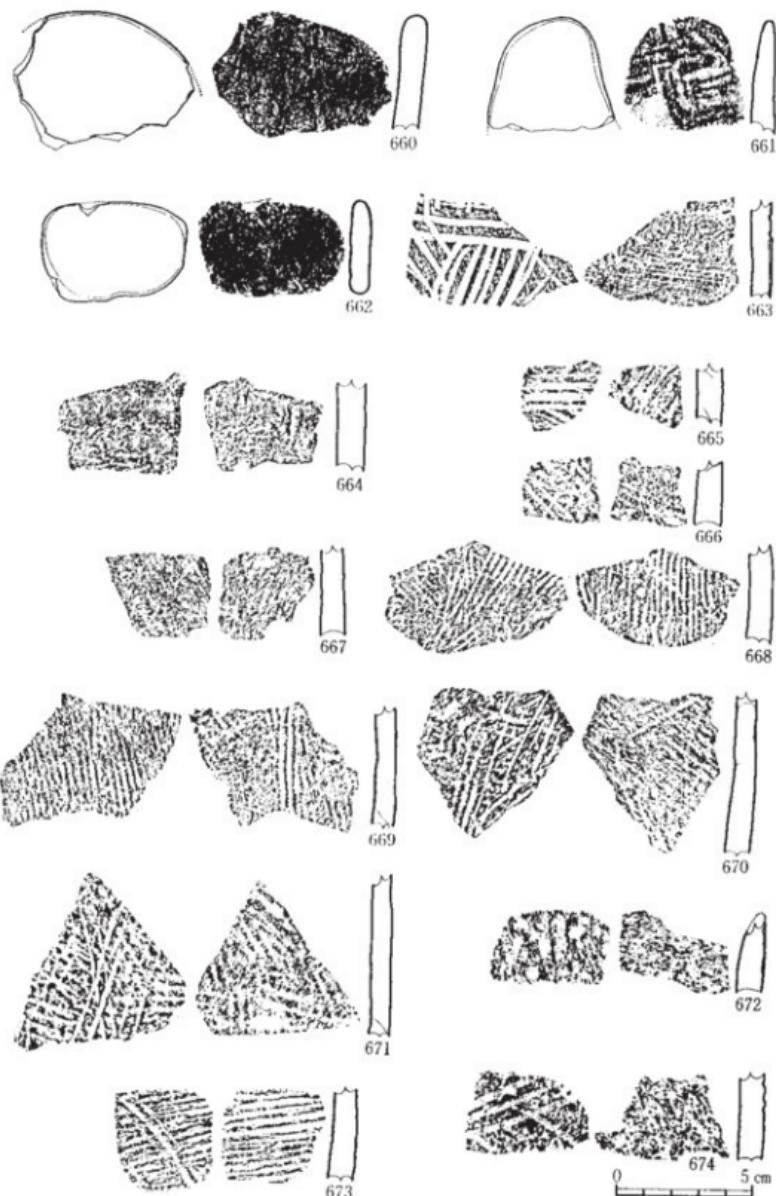
面繩前庭式土器以外は宇宿下層式土器が主で松山式土器の口縁部が1点含まれている。宇宿下層式土器は河口貞徳氏によって土器編年が行われているがここではあえて形式名を使わずに文様構成の違いによって分類を行った。文様はほとんど施文具を使っており、内



第60圖 土器(第3地点)-51



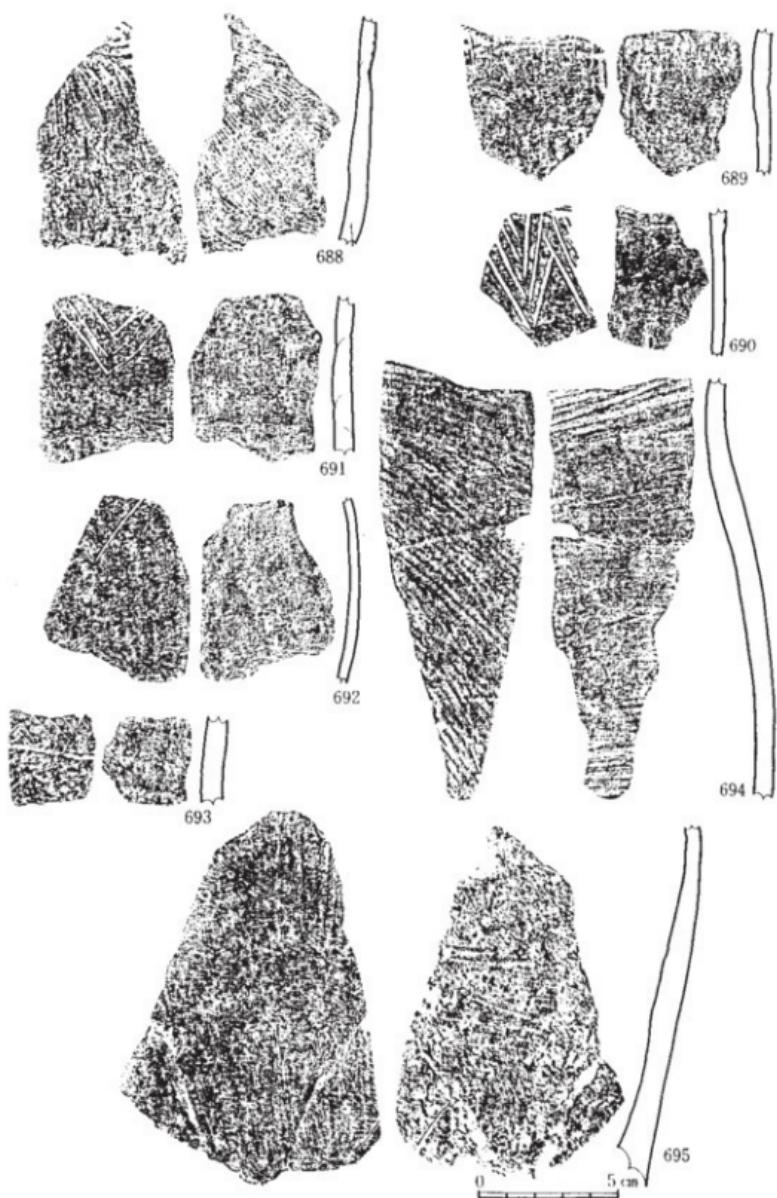
第61圖 土器(第3地点)-52



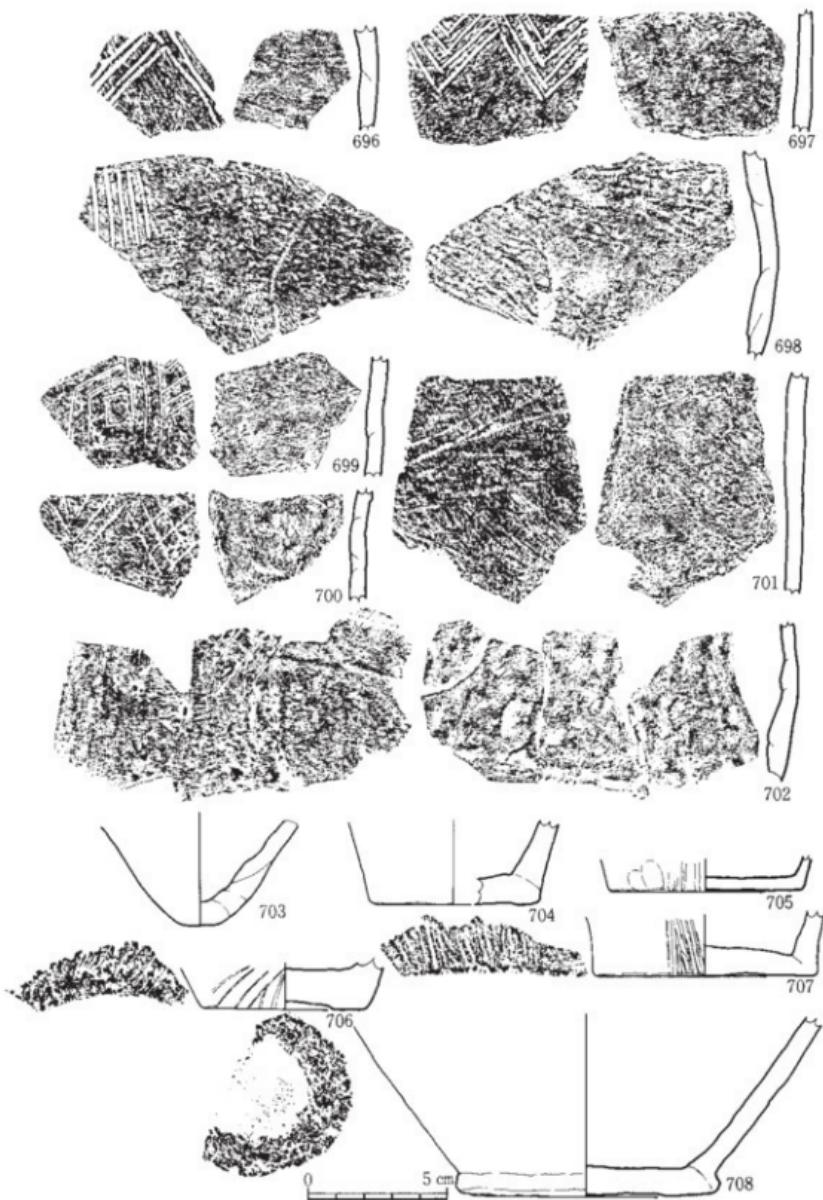
第62図 土器(第3地点)-53



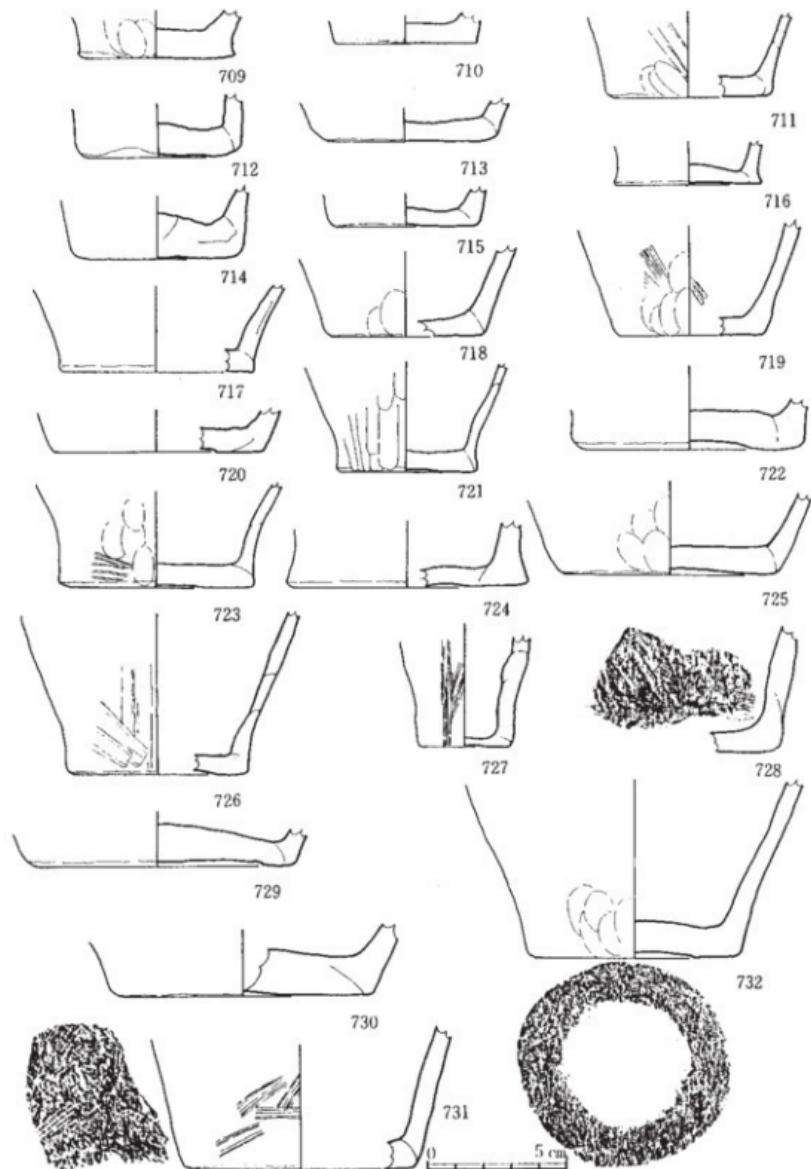
第63図 土器(第3地点)-54



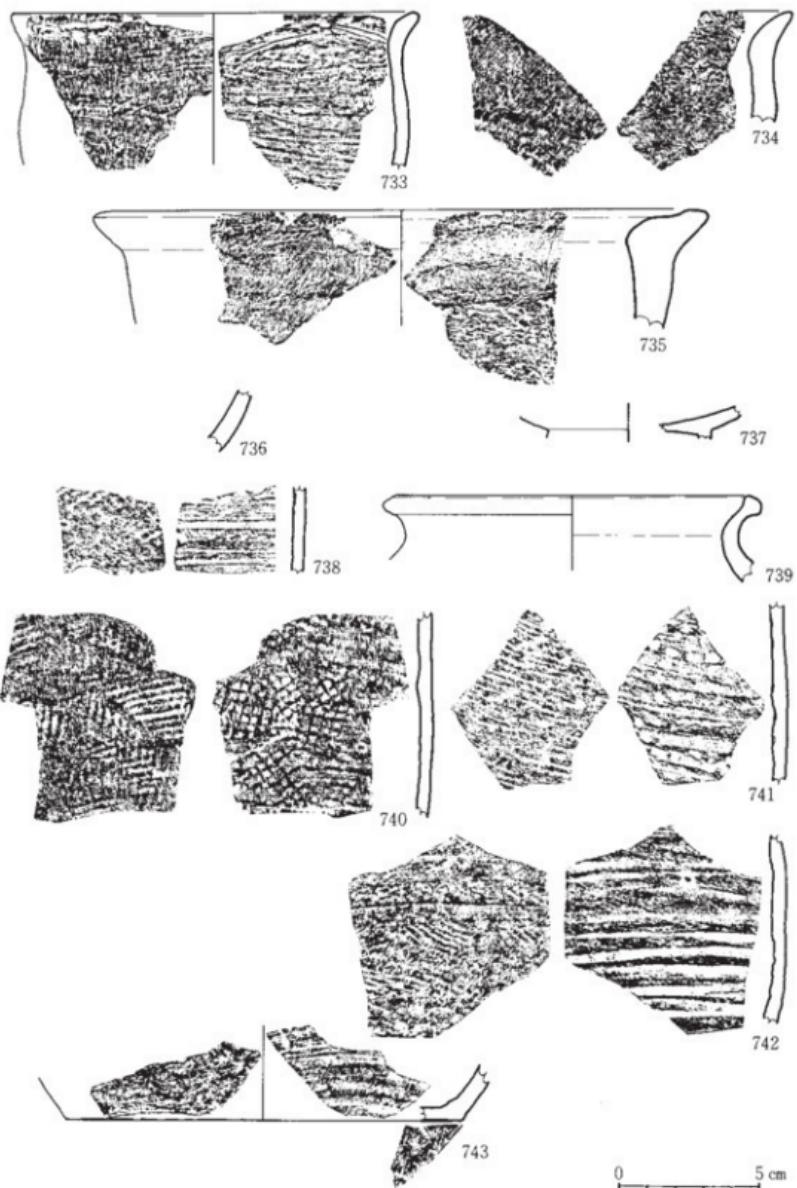
第64図 土器(第3地点)-55



第65図 土器(第3地点)-56



第66図 土器(第3地点)-57



第67図 土器(第3地点)-58

(以上第1次調査報告書より)

器面は貝殻による器面調整が行われている。貝殻条痕文がはっきり残っているものについては拓本を使った。器形はほとんど深鉢形の平底であるが動部が長くのびるものと壺の口縁か注口部にあたるのか不明のものが一点ある。土器は1区、2区合せて文様構成別に分類をしており、層序的な違いは土器資料でははっきりと区別は出来なかった。同一遺物包含層内出土としてとらえられ、他は出土状況の中で図化して報告する。

土器分類の中で1類から7類まで分類したが作図的な作業で行っており土器の時間的な編年を考えてのものではない。また文様形態の推移的な考察は特に行っていない。

#### 1類土器 (第68図) 38~55

太目の沈線による編籠文状に施文している。38は比較的安定感のある文様であるが44~48の土器になると多少ゆるみのある編籠状になっている。41は同じ編籠状でも施文具の違いからか太目の凹線文になっている。同じ1類土器の中でもこのような差異が認められるが、文様構成については基本的に共通するため同類とした。

38は文様も整然としており、内外器面ともいねいな器面調整が行われている。口縁部がやや外反し、口唇部は平で無文である。39は編籠状の文様下に斜状短沈線がめぐらされている土器で口唇部にも刻文されている。器面調整は38に比べて雑である。

40は39同様に編籠状文であり文様帶の下は貼り付けをめぐらしその上に施文している。口唇部直下には焼成前の有孔がめぐらされており土器の使途と何らかの関係があるように思える。このような焼成前の有孔は他にもあり、類例が増加することは間違いないだろう。第1次調査出土のものと同類であり、接合可能と思われる。

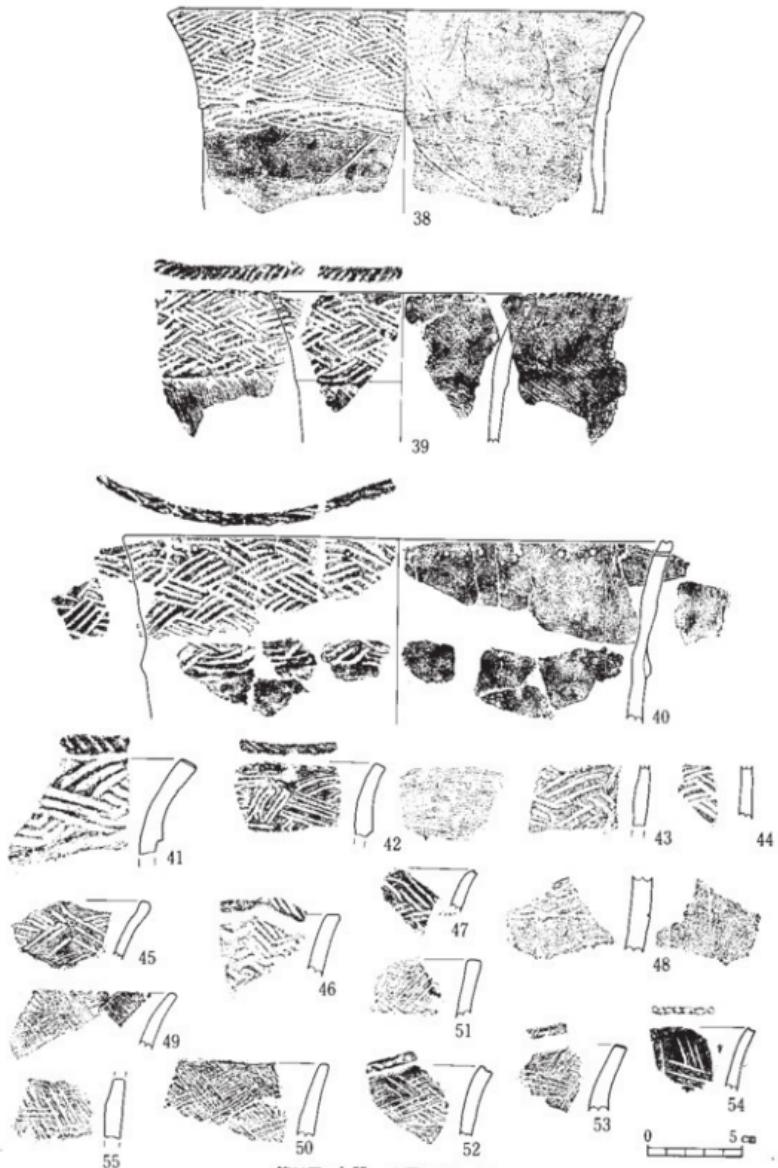
41は編籠状文であるが太くて凹線になっている。胎土は粒子が多く黄褐色をなす。こうした胎土はこれまでの在地の土器には少ない。口唇部にも凹線による文様が刻されている。44~55までは編籠状の文様のモチーフであるが38~40のように緻密な編籠状文ではない。42, 47, 53~55は口唇部に沈線(46, 47, 54)を有するものまた刺突文(53, 55)を有するものがある。

46, 47は口縁部が波状口縁になっている。文様帶は同一だが形式はちがってくる土器である。

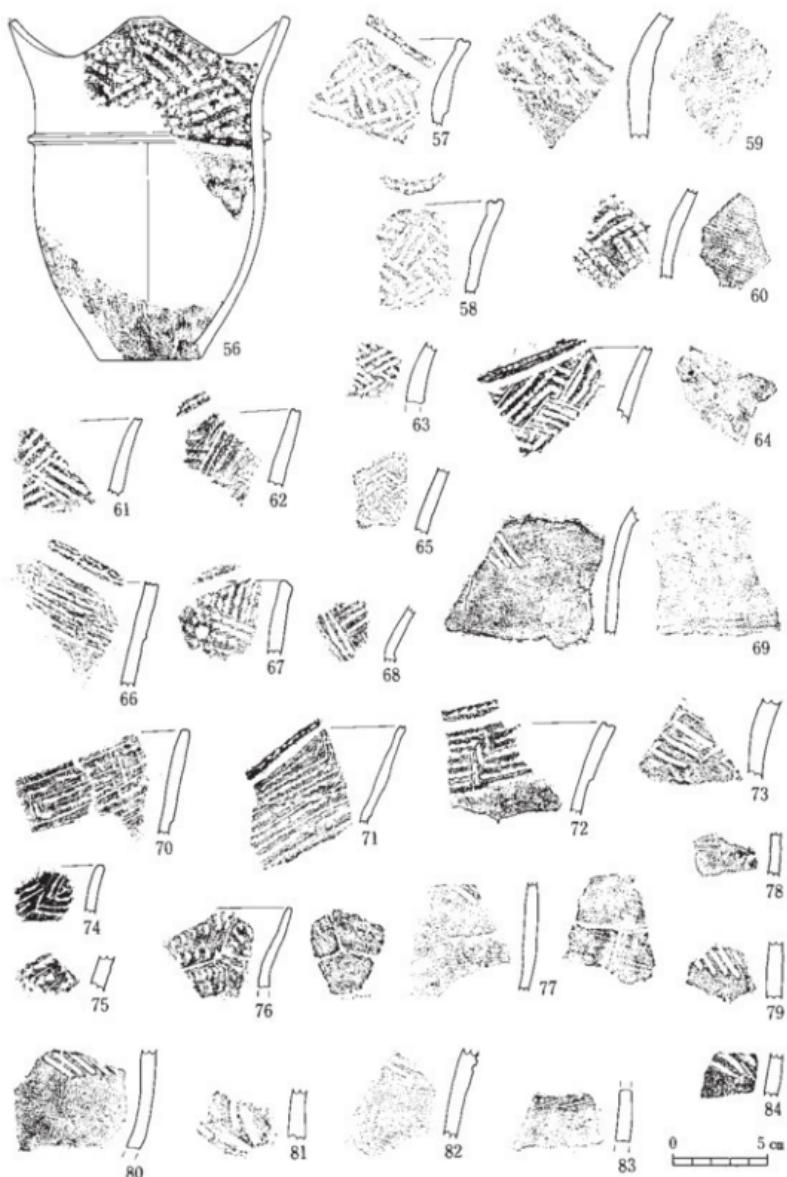
#### 2類土器 (第69図) 56~61, 63, 65

1類土器が沈線で編籠状文を構成するのに対し、2類は押し引き文による編籠状文を構成する。文様帶部分はやや器厚するのは1類と同様であるが56は文様帶下に貼り付け凸帶文をめぐらしている。

56は波状口縁で押し引きによる編籠状文である。唯一図で復元出来た資料である。第1次調査出土の土器と類似した接合可能と思われる。復元図による口縁の径は15cmで器高は18cmである。やや小形の土器であるが奄美では一般的な大きさの土器である。胴部は貝殻による器面調整が行われており条痕が残っている。



第68図 土器 1類 38~55



第69図 土器 2類 56～61, 63, 65 3類 62, 64, 66～75

57～62までは押し引き文によるもので57も56同様に波状口縁をなすが口唇部に刺突文を有する土器である。59は口縁部のコーナー部分にあたり、口縁部が方形状をなすと思われる。2類土器は同じ文様帶であるが器形が波状口縁、方形口縁等も含んでいる。

第1次調査と今回の資料とを比較した土器分類の必要は2類土器の中にも含まれる。

### 3類土器 (第69図) 62, 64, 66～75

押し引き文を主とし、押し引き文を沈線によって区画している。文様構成は全体的には不明であるが編籠状文を意識したモチーフと沈線の区画を行い、その中に押し引き文を入れたものがある。

ここでは沈線と押し引き文による文様構成として分類を行った。

61, 66, 67, 71, 72等は編籠状文様の流れである。69, 73は全体の文様は不明であるが沈線によって囲っているため2類にした。胴部になり、全体的な復元が出来たら分類を別にしなければならないと思う。

64, 69, 76, 70は波線によって区画され、その中に押し引き文を有する土器である。71, 72は口唇部にも押し引き文を有する。70, 71は山形口縁をなす。3類においても2類同様に器形が数タイプあり、第1次調査との資料の比較を必要とする。

### その他の土器

76は半截竹管状の施文具によって文様が刻され、沈線で区画されている。この土器1点のため76は類例をもって分類したい。同様に77～84は特別に分類を行わなかった比較的太目の斜状沈線であるため別にした。全体的な文様帶は不明である。

### 4類土器 (第70図) 85～119

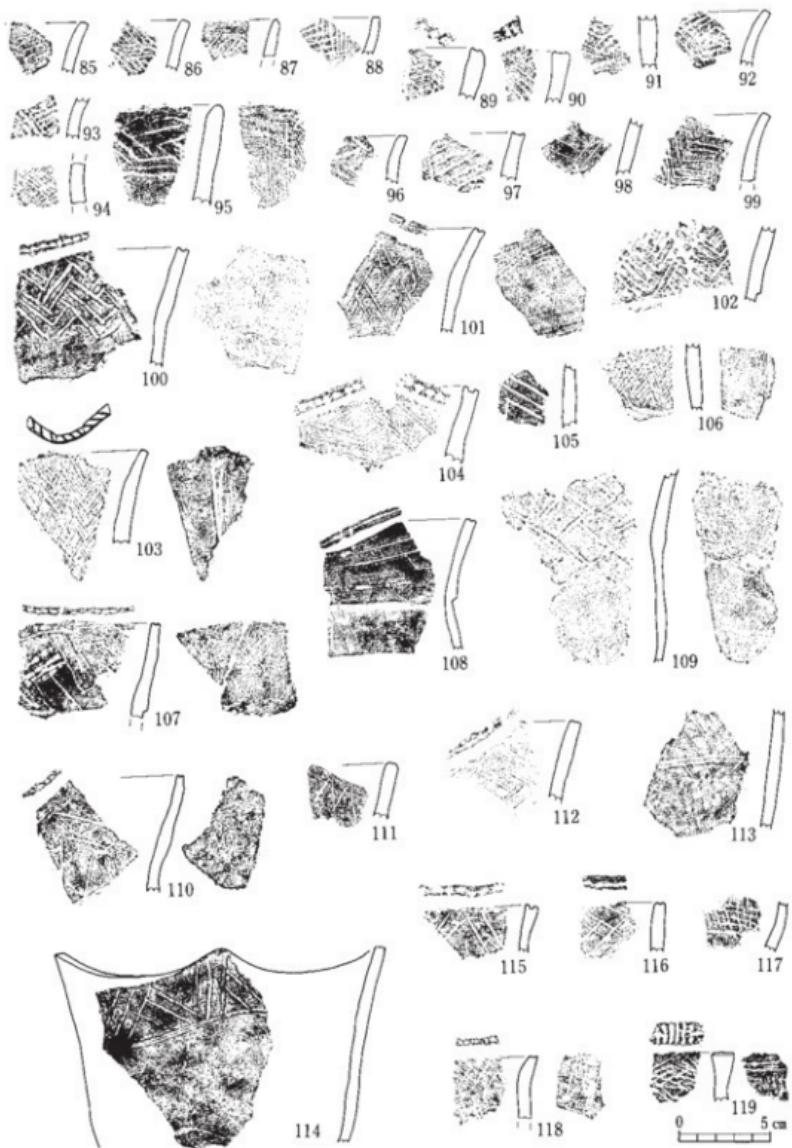
4類土器は基本的に沈線文だけによる文様構成である。文様には編籠状文のモチーフ、鋸歯状のもの3類の沈線の中に押し引き文が入っていた沈線文だけによるもの格子状のもの等に細類出来るが沈線の文様構成ということで同一に行った。器形も波状口縁をなすものと平口縁、方形口縁をなすものに分類出来る。

85～99までは細沈線による編目状の文様構成である。95は器面の裏側にも沈線が入っている99, 90, 97は口唇部に刺突文を有する。

102, 103, 106はV字状に区画線を交互に組み合せた文様であるが、103, 106は細沈線である。器形も口縁印のコーナー部分になり方形状になると思われる。100, 101, 104は口唇部分に押引き文を有する。107, 109は沈線が少なく格子状になっているものもある。基本的には籠目状の文様であるが簡略化されている。119は松山式土器に類似する。

### 5類土器 (第71図) 120～129

押し引きによる鋸歯状区画文をなす土器である。分類するには土器の量が少なかったが文様に特徴があったためあえて分類を行った。斜状に押し引きを行い、押し引き文によって鋸歯状に文様を構成しているのが特徴である。



第70図 土器 4類 85~119

### 6 類土器 (第71図) 130～135

綾杉文をモチーフにしたものを6類に分類した。131は押し引き文による縦位の綾杉文をなしており、口唇部がやや山形状になっている。130は横位の綾杉文である。この綾杉文も押し引きによるものである。

132, 134, 135は沈線による綾杉文である。特に126は口縁印のコーナー部分にあたる。文様もヘラ状のもので施文されている。第1次調査出土の中にも類似するものがある。

### 7 類土器 (第71図) 136～139

押し引き文を一括して入れた。押し引き文で横位に5, 6本めぐらすものと縦位に施文するものとは分類出来るが全体的な文様構成と第1次調査での類例があるためあえて行わなかった。

136～139は押し引き文による横位の施文である、口唇部にも押し引きを有する土器である。

### 壺形土器 (第72図) 149～151, 156

149, 150, 151は沈線による文様で土器も赤褐色である。151はやや口縁部がカーブしている。

156は細い粘土ひもを線状にめぐらし、その上に三条の細い押し引き文を有している。口唇部直下は押し引き文だけによる文様である。上から見た図が注口条にもなっており、全体の器形を復元しないと不明であるが、注口土器の可能性もある。第1次調査でも類似土器が出土しており、接合出来る可能性もある。他遺跡からの出土例はなく、新しい土器になる。

140は松山式土器である。はっきりした松山式土器はこの1点だけである。

### その他の土器

146は内外に沈線文が刻されており、やや太目の土器である。148はヘラ状の施文貝を使った横位の沈線文土器である。152～157は胴部で貝殻条痕文が残っている。157は胴部から底部近くの土器片である。

### 土製品

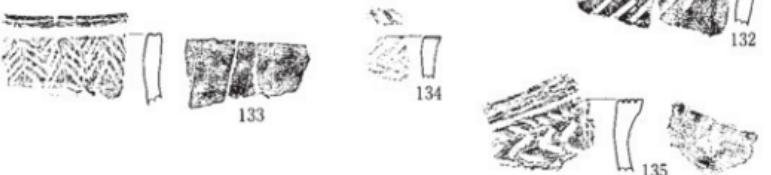
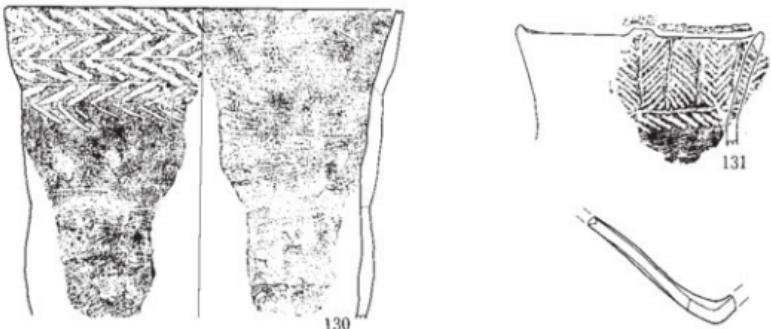
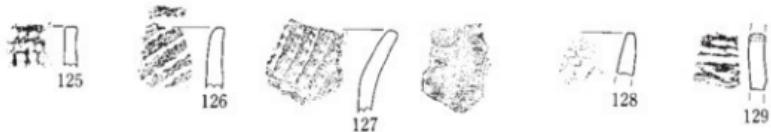
方形で大きさ形は不明である。把手状なのか上部が欠損しており不明である。何らかの土製品ではなかろうかと思い一応土製品に入れて類例資料の増加をまちたい。

### 3) 骨製品、貝製品

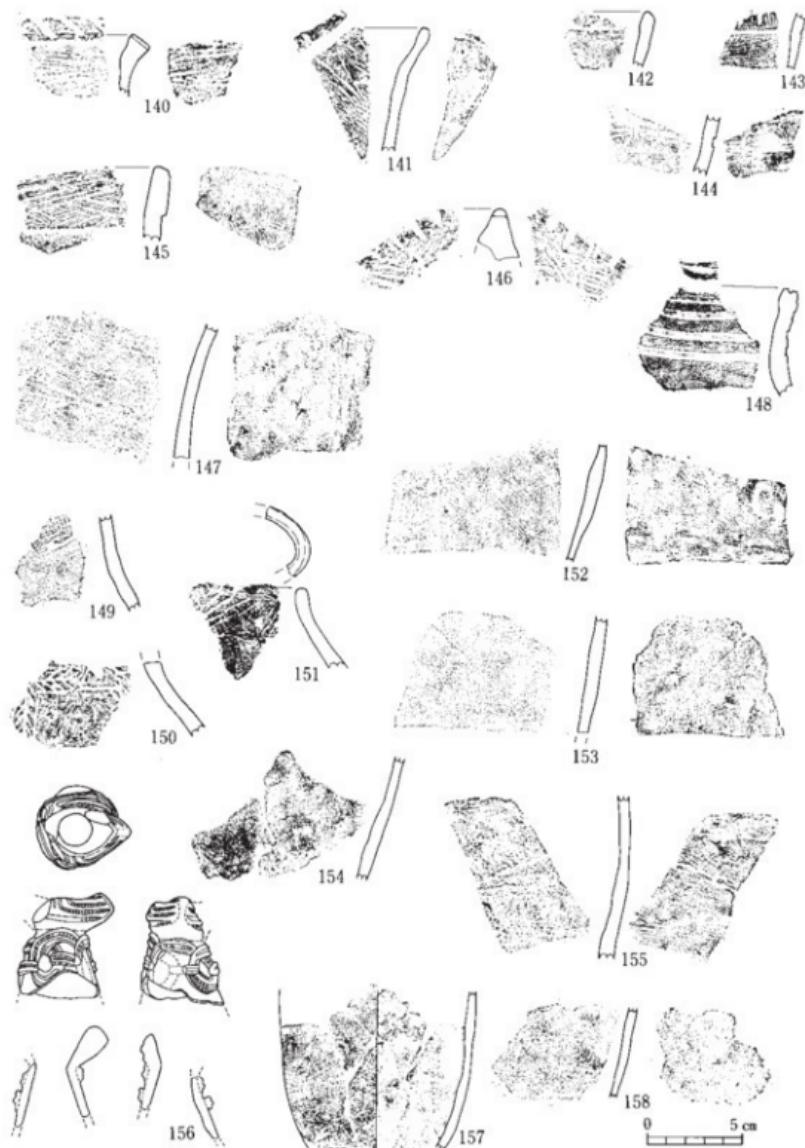
貝製品、骨製品は1区に多く出土している。出土品の中には用途及び素材が不明なものも多い。第1次調査でも同様の貝製品、骨製品も出土しており、全体的にかなりの量になる。

### 骨製品 (第74図)

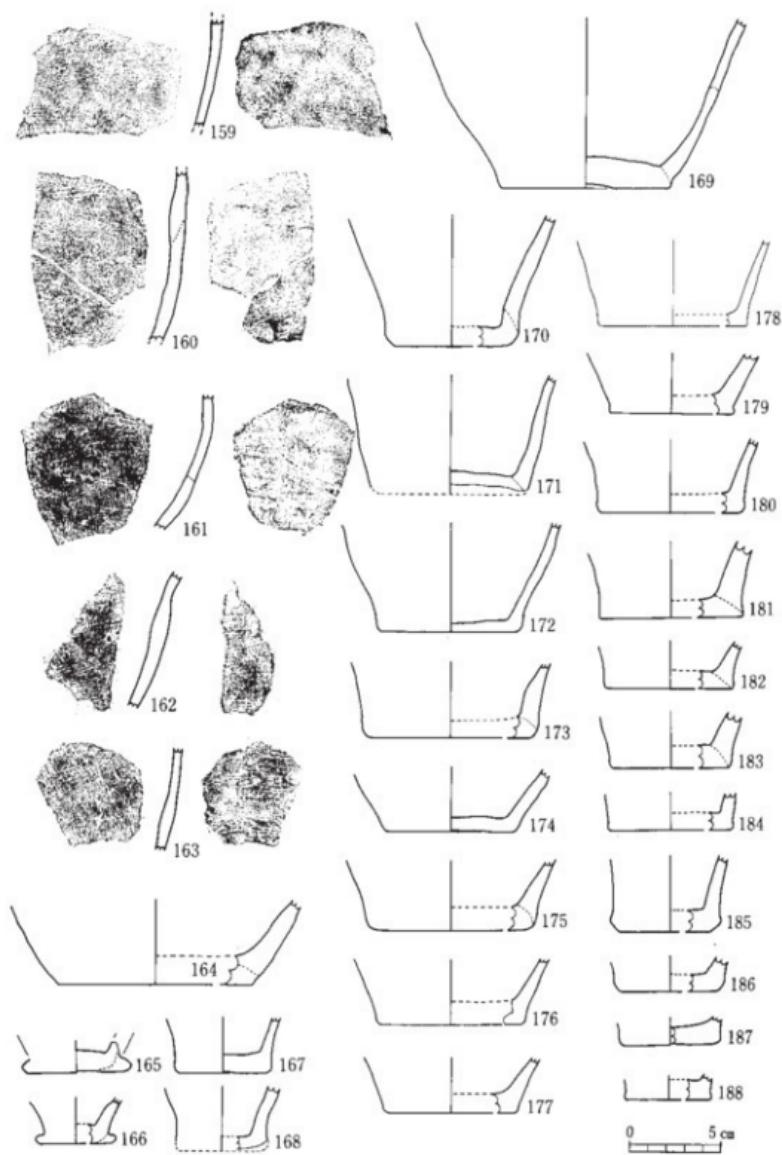
2はサメの歯をそのまま利用し片面を磨き基歯中央部に有孔がある。基歯の中央部分は



第71図 土器 5類 120~129 6類 130~135 7類 136~139



第72図 140 松山式土器 149～151, 156は壺形土器 その他の土器



第73図 土器 底部

凹んでおり、ヒモ通しの孔として利用されたと思われる。最近の土産店にベンダントとして商品化されているのが目立つ。

3～4は骨製品で両端は尖り、中央はやや扁平をなす。第1次調査時でも同類のものが出土しており、資料を追加することになる。使途については不明であるが鏃、刺突具の機能を備えたとも思われる。同類のもので中央部がくびれている資料が福井県鳥浜貝塚に多量に出土しており「地獄針」として紹介されている。この方法で資料を復元してリーフから釣り糸を垂らした。結果比較的口の大きいアラ類がエサなしで釣れた。釣針としての用途も可能であることを付け加えたい。

5、6は骨製品で基部に孔を有する。5は先端部が尖っており、骨針と思われる。6は先端部分が欠損しており不明であるが5と同様であろう。

10は骨を美しく磨いている。全面磨かれたように加工され製品になっているので不明である。

11はイノシシの牙製プレスレットである。牙の内側を加工しているが、美しい加工とは言えない。類例が2点出土している。

#### 貝製品（第74図）

1は貝製品である。シャコ貝を使用しヘラ状に加工している。使途については不明である。

8、9は貝を加工した鎌で中央部に孔を有する。先端も尖く実用品としてはあまりにも薄く、どのように使われたか不明である。先端部が欠損したものと2例の出土である。第1次調査でも類例資料が出土している。

13はタカラガイの上面剥脱しており、人的な加工である。1点の出土である。

#### 貝・小玉（第75図）

貝垂飾品はイモガイ類の螺塔部に孔を有したビーズ状に加工してある。1、2は未製品で一部に加工痕が残る。3～15は貝類がはっきりわからないほど磨いている。1、2の状態の貝は現在の海岸でも採集出来、自然に出来る。このような貝を3～15の状態まで加工を行っている第1次調査でも出土しており、類例は増加している。

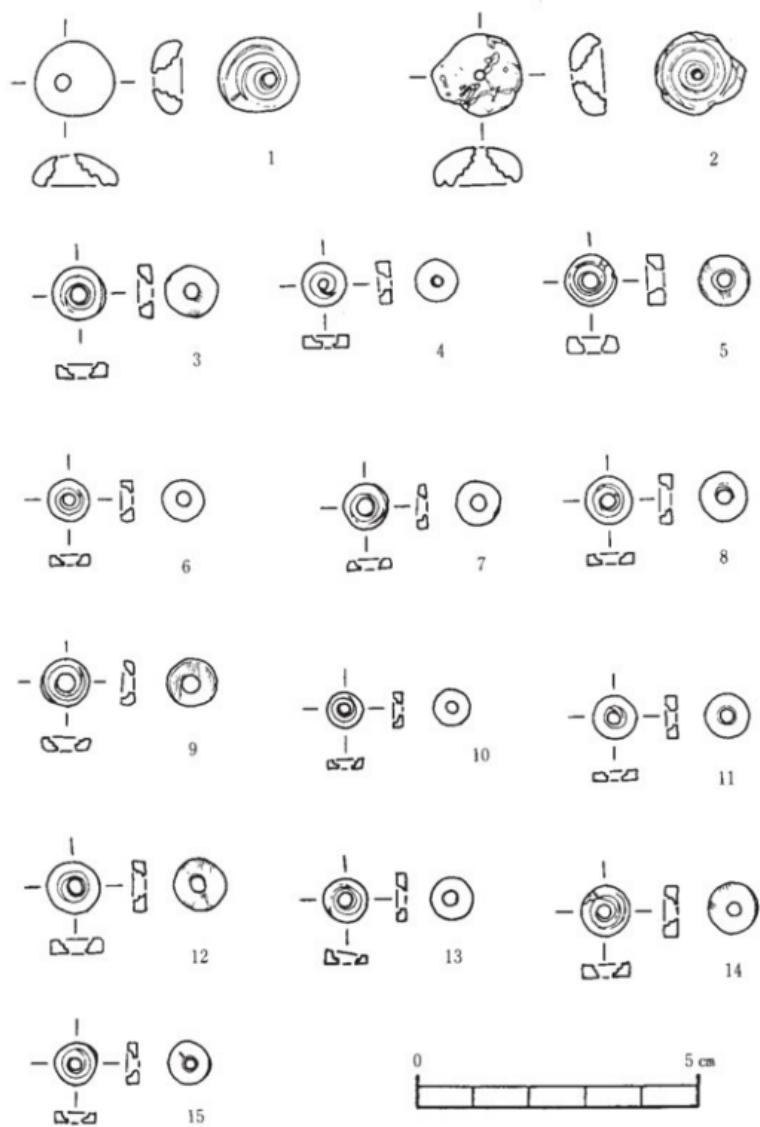
#### 貝輪（第76図）1～13

貝輪は第1次調査でも20程出土しており、今回も13点の出土である。1は二枚貝の上部を磨いており、加工途中で欠損したと思われる。貝の表面のザラザラした部分を入念に磨いて全体的に加工を行おうとした痕が残る。3はゴホウラと思われるが貝種については不明である。内外とも美しく磨かれている。5、8はサラサバイラの底部を加工したもので孔を穴けるのにチッピングしている。6、9はスイジガイの中の部分を利用した幅広の貝輪である。

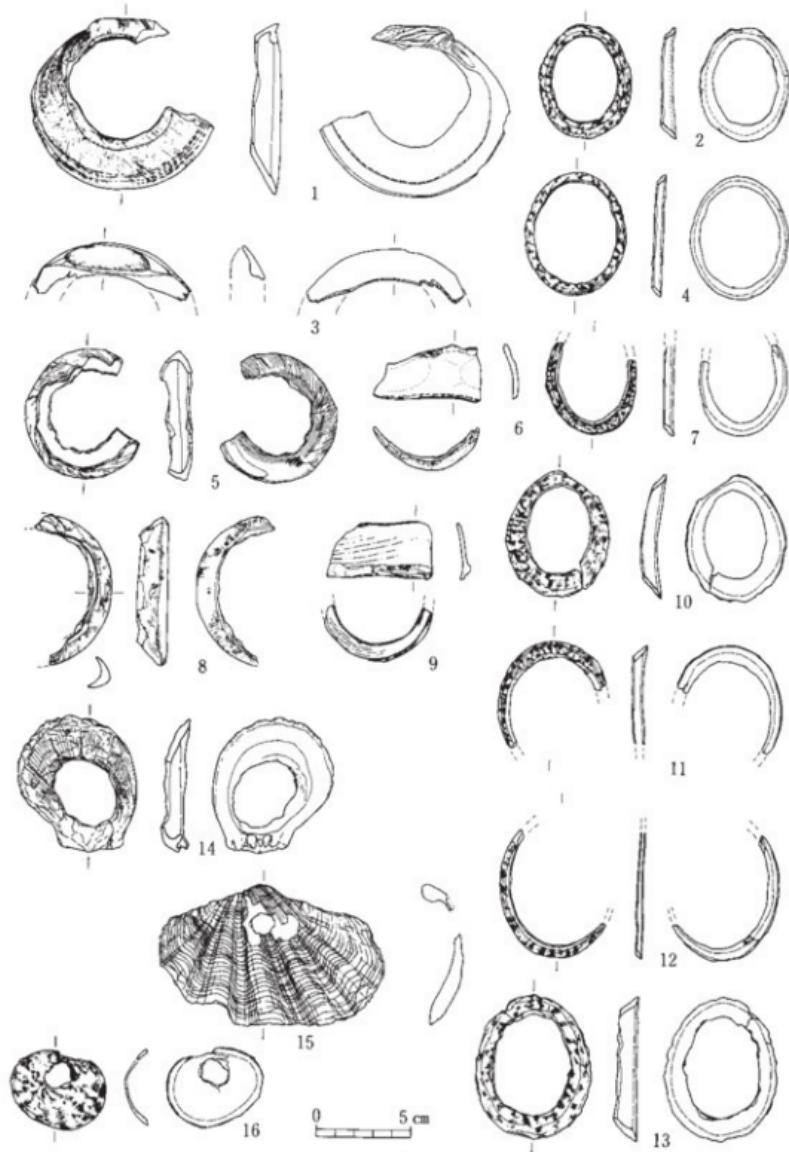
2、4、17、10～13はオオツタノハと思われる。貝の上部を割って孔を拡大し、その後



第74図 貝・骨製品実測図



第75図 貝・小玉実測図



第76図 貝製品実測図

に磨いている

14~16は貝垂で15のシャコガイや16のカサガイは孔が小さい。他に加工痕は見えない。シャコガイ等は近年まで網に使用されている。

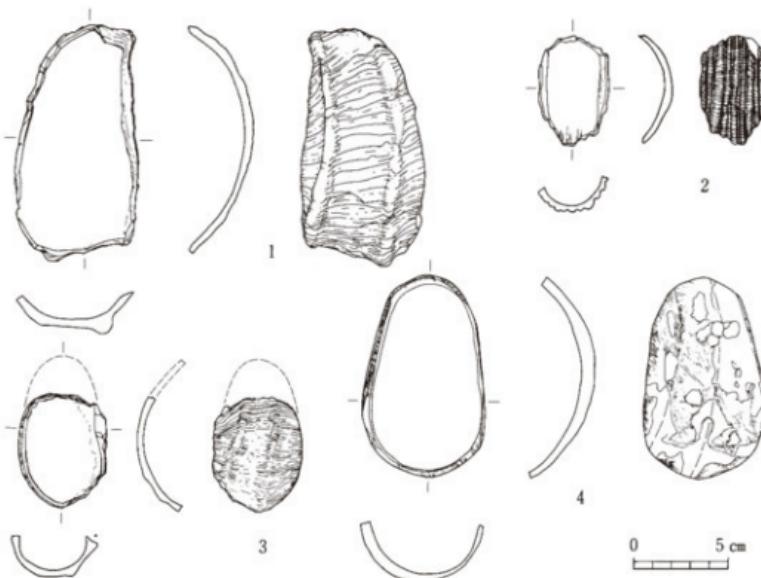
#### 貝製品（貝製容器）（第77図、第78図）

貝製容器はほとんど夜光貝である。奄美、沖縄では一般的に良く見られる資料である。第78図3は中央部に孔を有している。第77図3は全体を美しく磨いて夜光貝特有の美しい輝きを今も残している。

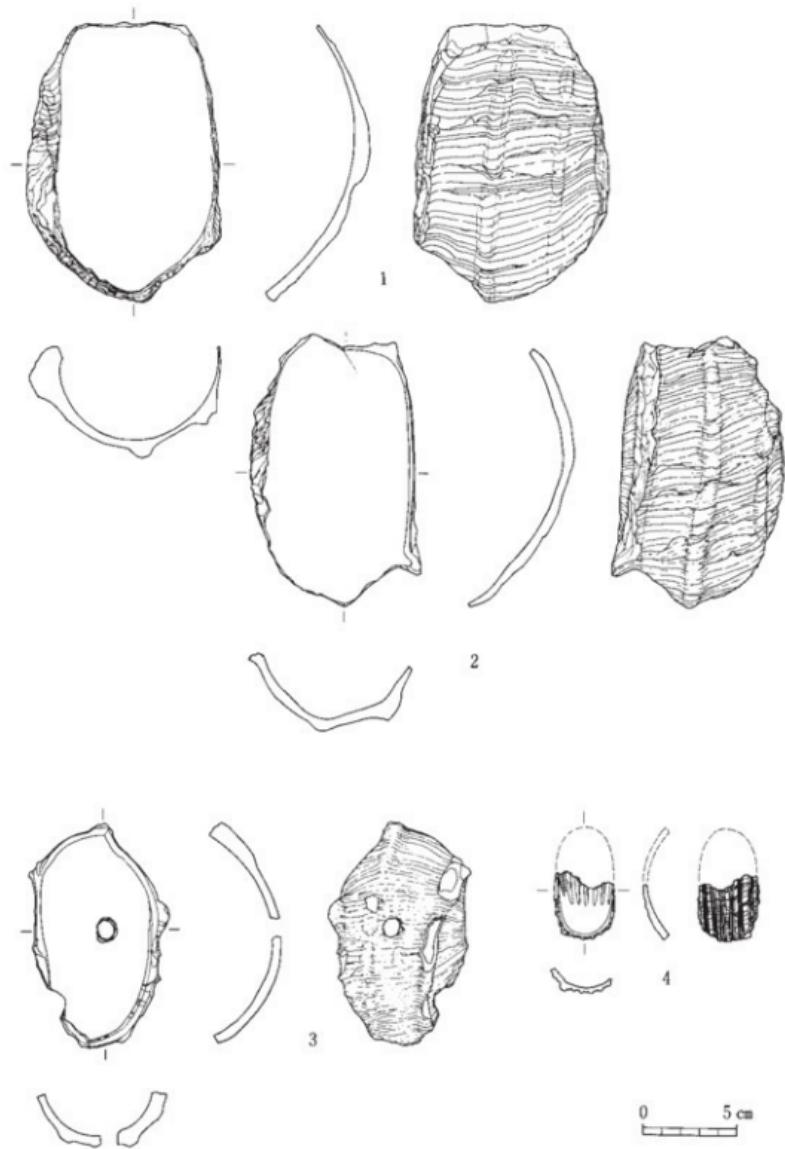
貝全体に砂がこびりついてなかなか取れなかった。前述したように砂と灰で固く締って貝と一緒にパックした状態である。遺物の残りは良好である。

貝製品のはほとんどが第1次調査の資料の追加である。写真ではスイジガイ等の突起部の先端に施用痕の残るものもある。実測図は書いてないが実測出来なかった資料は写真で記録した。

二枚貝の部分を割ったものと磨って孔を有している例がある。その他貝輪片等は図版にまとめた。貝刃もかなりの出土例であるが紙面と実測の時間的制限で図版のみとした。



第77図 貝製品実測図（貝製容器）



第78図 貝製品実測図（貝製容器）

#### 4) 石器（第79図、第80図）

石器の出土は貝製品に比べて少なかった。磨石、石斧等である。

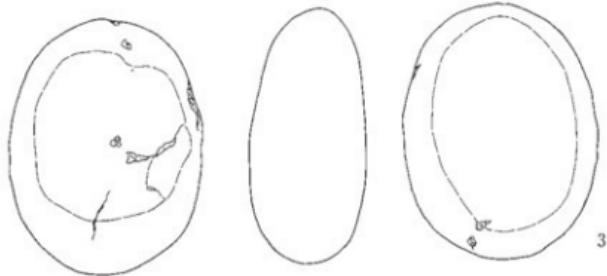
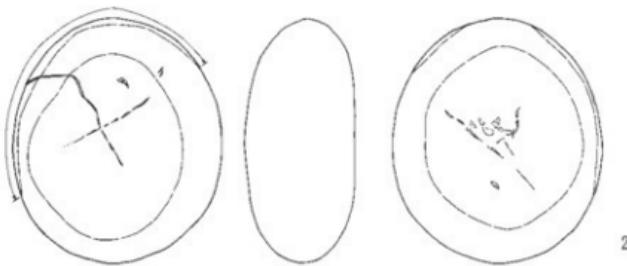
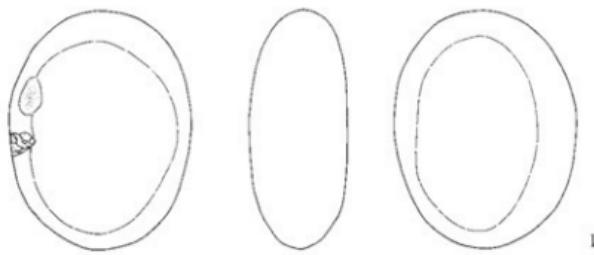
第79図1は扁平の石で片面に剥離痕がある。3は1と同様に扁平であるが片面が磨かれており片刃状になっている。4は砂岩状の石で全面に2条の凹痕を有する石器である。奄美では類例が多いが沖縄においては少ない。凹痕が直線であり。使用して凹状になった考えられることから手で持つて貝などを磨いたものではなかろうかと思われるが、まだはっきりした所見はない。

その他にチャートのチップ（図版）が出土している。

第80図は磨石4点である。重量感のある石器である。磨石、叩石の機能を持つ石器である。



第79図 石器実測図



0 5 cm

第80図 石器実測図（磨石）